
夕空の下の、天使さま。

雛月詩音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕空の下の、天使さま。

【ノード】

20796D

【作者名】

雛月詩音

【あらすじ】

一日中夕空、ときどき黒い雨が降る、すこし終末的だけど現実によく似た世界でのお話。天使病患者である天使さまたちは、今日も一生懸命みんなの心の支えになろうと頑張っています。ちょっとひねてるけどふつうの子、沙凪は、ある口とつぜん天使さまになるんだと⾔われて……。

序

天使さまがテレビの中での福祉活動している。

隣の美加子みかこがふら～つと、吸い寄せられるように走り寄っていく。
足取りは何だかあやしいのに、やたら速い。

「待つてよ、美加子」

「ごめん、沙凪さなぎ」

白くて長い髪を揺らして謝るけど、視線は街頭テレビに向いたまま。美加子は熱心な天使さま信者だから、天使さまを見るとおかしくなる。

テレビの中では、天使さまがお年寄りに笑いかけていた。天使さまの白、お年寄りの白髪、病院のシーツ、とテレビの中は美加子の髪みたいに真っ白だつた。本当は逆であつて、美加子の髪が天使さまみたいに白いんだけど。

美加子はその様子を見てはあ……、なんてため息をついている。まるで夢見る少女みたいな、浮いた目つき。テレビの中のレポーターさんも、同じように熱っぽい調子で天使さまを讃め称えている。天使さまたちは今日も、病気の体にも関わらず身を粉にしてボランティアに従事しています、何て素晴らしいことでしょう。隣で美加子がうんうん激しく頷いている。

でも、わたしはちょっと、冷静だ。

美加子やレポーターさんみたいにテンション高いひとのほうが普通で、わたしみたいに冷静なのはどっちかといつと、少数派。なんで天使さまはこんなに人気があるんだろう、とか思つていてる。

病気だから？ 天使病なんていう死病に侵されながらも、気丈に社会貢献する姿がみんなの胸を打つ……のかなあ？ 病気なのに働いてるのは、たしかに、すごいと思つけど。あんまり具合悪そうに見えないのは、とりあえず置いておくとして。

でも例えばわたしが重い病気にかかるって、それでボランティアし

たとして、ここまで騒がれるものかなあ？

うーむ。

それにしても、天使さま、美人だな。いつも通りだけど。これが騒がれる原因かな、とか考えてしまつ自分がちょっと嫌だ。だって、天使さまたちってば、なぜか美形揃いなのだ。男の天使さまも、女の天使さまも、みんな。さらに頭のてっぺんからつま先まで真っ白だから、ほとんど人間離れして神秘的に見える。さらに、羽根まで生えてるし……ちいさいけど。いわゆる本物の天使と比べて足りないものといえば、頭の上の輪っかくらいなものだ。

「ねえ、美加子」

「なに？」

テレビを見つめたまま、なおざりな返事。

「なんでそんなに天使さまが好きなの？」

美加子の白い髪は、もちろん地毛じゃなくて、色抜きしたものだ。天使さまの真似。何も美加子だけじゃない、そんな子は沢山いる。今も周りを見れば、白い髪に真っ白な服を着た子が、探すまでもなく目に入る。

「優くて、きれいだから！」

そんなに輝いた目で言われたら納得するしかないです……想像通りすぎるけど。もう、アイドル扱いだ。わたしにはちょっと特別な病気に罹つただけの、ふつうのひとたちに見えるんだけど。

天使さまたち自身はどう思つてるんだろう。天使病に罹ると入院、それも専用の病棟に入つて、残りの人生ずっと暮らすことになるんだとか聞いたことがある。天使さまとしてボランティアするとき以外は、カンヅメだそうだ。

テレビでちやほやされるのは幸せか、ほとんど病院から出られないのは不幸せか。

「あ」

そんなことをぼやあと考えつつ、真っ白な画面から目を背けると、真っ黒い雲が目に入った。地面に落ちて、跳ねる水滴。

雨だ。

今日の雨は、結構黒い。

「やだなあ雨降ってきたよ…………」

「黒雨警報、出てたつけ？」

美加子が雨を見上げて、そう言つた。テレビにおける天使さまの出番は終わったようだ。

「出てなかつたと思つけど」

わたしがそう言つた瞬間、テレビに黒雨警報を知らせるナロップが流れた。遅いですよ、言うのが。

とはいえ、道には屋根がついてるので、直接雨に濡れることはない。濡れると大人たちがうるさいから、少しは注意しないといけないのがちょっと面倒だけど。

「なんで大人たちは、雨が嫌いなんだろ？ね…………」

独り言みたいなわたしの疑問に、美加子は律儀に答えてくれた。「私たちが生まれた頃、雨のせいでの結構酷いことがあつたらしいよ？ そのせいで過敏になつてるんだって」

「へえ……」

初耳だった。今は少し濡れたくないじや何ともないのに。激しく濡れたことはないから、そのときはどうか、分からぬけど。

まるで天気に従つみみたいに、ニュースは暗い内容になつていた。食料自給率下降の一途、配給量減少は免れないか。少年少女十三人が廃屋で集団自殺、現場には麻薬が残されていた。寝つきり老人が配給を受けられず孤独死。先日地下街でテロがあり、幸い死者は出ませんでしたが重傷者三名を含む云々。何となく気分が滅入るので、わたしは目を逸らす。

「いこ、沙凪」

美加子が、少し先で手招きしていた。目当てのお店はすぐそこだ。

黒い雨。暗いニュース、そして明るい、天使さま。

ふと、閃く。もしかして、世の中暗いから、天使さまみたいな明るい話が必要なのかなあ、とか。

……なんていう考えは、すぐにわたしの中から消えて。

基本的には、そんなことわたしには関係、ない。わたしは美加子ほど天使さまに興味が持てないし、天使さまのボランティアを受けるようなこともない。

たぶん一生関わりはなくて、今みたいに友だちと楽しんだり、よく分からぬ宿題で困ったり、家庭の事情で悩んだりするだけの、じく平凡な日常生活を送つて、年を取つていくんだろう?……。

と、そのときは、思つていたんだけど。

人生とは何があるか、分からぬもので。

まさかこのわたしが、天使さまになるだなんて。

一 天使さまの体は、砂糖菓子でできている

「いまなんて言いました、せんせ？」

「だからな、名霧。なきりお前天使さまになるんだよ」
菱沼せんせはわたしの顔を見ながらそう言った。

真顔だ。

何言つてるんだろうこのひとは。

「それつてわたしが天使病びやくだつてことですか？」

「そうだつてここに書いてあるし、医者の先生もそう言つてたぞ」
せんせは手に持つた紙を手の甲でぴしひと叩いた。わたしの健

康診断結果らしい。

「でもわたし白くないですけど？」

テレビで見る天使さまは全員真つ白けだけど、わたしは標準的な日本人のものであるところの、黒髪だ。ついでに言うと肌の色もふつう。……少なくとも今朝までは。

「これから白くなるんだろ？」

そういうことですか。まあ、天使さまといつても、ちょっと普通じゃない病氣に罹つちゃつた普通のひとだもんね。最初から白いわけじゃない……ってことか。

「いやしかし、名霧が天使さまか……」

せんせはじろじろとわたしの顔を見た。わたしは居心地が悪くなつて顔を背ける。そんな目で見ないで欲しいです。恥ずかしいから（天使さまは美形揃いなので）。

それにしても、本当にわたしが天使さま？ 信じられない。

「ちょっとその紙見せてくださいよ」

半ばひつたくるようにせんせから紙を奪い、わたしは結果を確認した。よく分からぬ数字の羅列。ええと何処に天使病びやくって書いて

あるの？

……と思って見ていつたら、一番下に書いてあった。

後天性色素欠乏及び翼状畸形症候群の疑い濃厚。

そういうえば正式名称はそんな感じだったよつた気がする。

ううむ、これは、本当に、まじなのか。

わたしは天使病で、これから白くなつてちいさい羽根が生えて、テレビに出て日々ボランティアやらに明け暮れることになるのか。

……なるのか？

「いやあ、すごいなあ」

菱沼せんせは何やら感心している。やうじやなくてですね。

「いやすじくないですって。病気ですよ？」

「でもお前、天使さまだぞ？」

だぞ？ ってそんな何を言つてゐんだみたいな顔をされても困ります。

「というか、何かおかしくない？ 確か天使病つて、死病だつたよね……。

「まさか俺の生徒の中から天使さまになるやつが出るとは… すこいなあ！」 わたしが記憶の真偽に悩む間にせんせのテンションはつなぎ上りだ。

「だからすじくないですって！」 度も同じことを言わせないで欲しい。

ていうか、軽つ！ 死病の告知という重々しいシーンのはずなのに何だらうこのテンション。おかげで実感がぜんぜん湧いてこない。本当なら元氣出せとかそういうことを言つぐべきところでは？

「なあ、名霧」

「は、はい」

ふいに菱沼せんせはたたずまいを正し、真面目な声でわたしの名を呼んだ。急だつたのでわたしはびきつとした。これはあれか。ようやく教師らしく、死病であることが発覚して傷心の教え子を慰めようといつ氣になつたのか。

「天使さまになるお前に、言つておきたいことがあるんだが」「は、はー」

真剣な顔で見つめてくるので、ばかみたいに同じことしか言えなくなってしまう。

緊張するわたしの前で、菱沼せんせはこう言つた。

「今のうちにサインくれないか?」「お断りします」秒速で断るとわたしは踵を返して職員室を出た。ろくでもないだめ教師だ。緊張して損した。

扉を閉めて歩いていると、改めて信じられない気持ちがむくむくと湧いてくる。

本当に天使さま? わたしが?

手にした紙をもう一度確認する。後天性何たらといつ長い病名は、やつぱりそこに書いてあつた。夢じやない。

「はあ」

何となく溜息が出た。どうなつちやんだら、これから。

*

「沙凪が天使さまー?」

「声大きいって!」

わたしは慌てて美加子の口を塞いだ。周りを見回す。学校でこの話をする気になれなくて、わたしたちは一人で公園に来ているのだ。何人か、ひとがいる。

どうやら、誰も聞こえていなかつたみたいだ。

「む、ぐ、」

「あ、ごめん」

苦しそうな声、我に返つて手を離す。

「えつと、冗談じゃないよね?」

冗談だった良かったのに、と思いつつまたも健康診断結果表を確認してしまうわたし。やっぱり後天性以下略という長い病名はそ

」にある。

「それ、ぼくにも見せて」

わたしは黙つて結果表を手渡した。今日は「ぼく」の日か……。
何でも自分のことをぼくと呼ぶ天使さま（女のひとだ）が居るから
しく、ときどき美加子の一人称はぼくになる。美加子はミーハーだから
から気まぐれだ。

「うわ、本當だ……」

美加子の視線は何度もわたしの顔と結果表の間を往復した。

「へええええ、沙凪が天使さまかあ……」

美加子はそう言ってにつこり笑うと、わたしの顔をじいっと見つめた。居心地が悪くなる、わたし。なんとなく顔が赤くなつていくのが分かつてしまつ。そんな目で見ないで欲しい。なるほどなんて呟かないで。

「すごいなあ……」

にやにやしながらしみじみと言ひ。圧力を感じてわたしはすこし、
のけぞつた。

「すごくないつて！ わたしは何もしてないし

「でも、天使さまだよ？ 純白の、穢れ無き、純粹無垢の象徴たる
天使さま……。その淨潔の御手はすべてを癒し、あまねく救い給う
のよー！」

なんだジヨウケツのミテつて。

「天使さまかあ……うふふ」

夢見る少女、湯葉美加子の背後には少女漫画みたいな花々が乱れ
咲いていた。田が遠いです……。

「ねえ沙凪」

「な、なに？」

美加子はとつぜんわたしの名前を呼ぶと、腕をがつしと掴んだ。

「天使さまの体は、砂糖菓子でできています」

「は？」 意味がわからない。

「だから甘いんです！」

美加子が壊れた！

「だからね、沙凪」

じりじりと、美加子の顔が近付いてくる。離れたいのに腕をしつかりと掴まれていて、それもできない。

そしてどんなことを言い出した。

「食べさせて？」

「え……」

「だから、食べさせて？」

にこりと笑いながらおかしなことを言わないで欲しい。

「冗談だよね？」

「何が？」この人まじですか？

「天使さまのお体を食べると長生きできて幸福に満ちた人生が送れるんです！」

天使さまって病人なんだけど！ 長生きビックリか早死にするんじゃ？

「ね、いいでしょ？」

「よ、よくないです。」

「せめてなめさせて？」

美加子の顔はもう目の前だ。

「健康に悪いってば！」

「いいじゃない。ぼくに幸せをください！」

そう言つてが一つと襲い掛かつてくる美加子。わたしは思わず目を閉じた。

と、ぱっと腕を掴まれる感触が消えた。

おそるおそる目を開けると、美加子は離れて笑っていた。

「なんてね、冗談」

さっきまでとは少し違う微笑み。ちょっと寂しそうだった。

「ちょっとふざけてみただけ。最後に」

「最後。」

「ああ、

そうなんだ。

天使病の患者は専用の病棟に入つて、そこで残りの一生を過ごす。つまり入院で、すなわちお別れなのだ。

「沙凪、天使さまになつても、ぼくのこと忘れないでね？」

「美加子」

わたしはうんうん頷いた。切ない気分がどんどん心を満たしていく。

「忘れないよ。ぜつたい」

「お見舞い行くから」

「うん」

「病院の場所とかつてもう分かるの？」

「ううん、まだ分からぬ。分かつたら教えるよ」

「いつから入院？」

「それもまだ、分からぬんだ」

「そつか……」

そこで言葉が途切れた。

二人して、しばらく黙る。

「まつ」わたしは何だか泣きそだつたので、努力して明るい声を出した。「もう一度と会えないってわけじゃないと思うし、そんな大した」とじやないでしょっ

「うん」

「わたしがテレビに出たら、あの天使さまわたしの友達なんだよすゞでしょって言えるよ」

「うん」

「まあやつぱり、ちょっとは、いやかなり寂しい、けどね……」

「うん……」

「だめだ。失敗した。

だつて、美加子のせいだ。美加子の目と鼻頭がどんどん赤くなつていくのが悪いのだ。そんな顔されて笑つていられるほどわたしは鈍くない。

「ううー、沙凪い……」

そんなぐずぐずした声でわたしの名前を呼ぶなよ。

ああ、だめだ。涙が出てきた。目から溢れてぽたぽた落ちた。

「あ

それを見た美加子が声を上げた。

「ん?」

泣きながら微笑むといつ、かなり切なくなる表情で。
でも。

「涙、なめてもいい? つて痛あつ!」

わたしは美加子の頭のきれいな分け目にチョップしてやった。雰
囲気ぶち壊しだ!

両手で頭を押さえて、美加子は苦笑い。涙目なのはチョップのせ
いもあるかもしれない……(分け目チョップは素肌に直接ヒットす
るので、いたい)。

「まあ、湿っぽいよりはね。やっぱり笑つてお別れしたいじゃない
それはそうだけど。何か、釈然としないなあ。

「入院するまではまだ少しあるでしょ? その間にたくさん、楽し
いことしようね」

それについては、異論なし。

わたしは、はつきりと頷いた。

わたしが天使病に罹つたことを、育ての親である叔父夫婦に言つたときのこととはあまり思い出したくない。というか、そもそも叔父夫婦にまつわる思い出で良かったことなんて殆どないんだけれど。天使病だつた、入院する、と言つたときの顔。

嬉しそうだつたな……。

わたしの存在は、あの人たちにとつて、金銭的にかなりの負担になつていたみたいだ。天使病患者の治療や生活、一言で言つと何もかも全部、にかかる費用は全て国が負担してくれるそうなので、叔父夫婦はわたしを養う必要がなくなる。

つまり、あの人たちにとつて、わたしの存在が消えてなくなるのと同じなのだ。

惜しまれることは全然期待していなかつたけど、それでも、ああもあらかさまに嬉しそうにされるとショックだつた。人間、やつぱり、お前居なくともいいです、むしろ居ないほうがいいです、と言われたらかなしい。

まあわたしのほうも気楽にはなるんだけれどね。……とか、無理矢理にでも前向きに考えないとだめだつた。

*

入院日は、あつという間にやつてきててしまった。家での生活に惜しむようなことはほとんどなかつたから、それは良い。むしろ美加子とか、学校関係のほうが後ろ髪引かれる思いだつた。

面会謝絶だつて言われたから。

メンカイ、シャゼツですよ……。はあ。

だから余計に。やっぱりといつか、最後は泣いてしまつた。でもちゃんとお別れをしてこれた、と思う。これからどうなるか分から

なくて不安だけど、わたしはその思い出を胸に、やつていけると思うのだ……たぶん。

事前の説明によると、何も持つていかなくていい、というより持つてくるなどいうことだったので、わたしはほとんど手ぶらだった。一番痛かつたは携帯NGだったこと。まあ病院だし、それは仕方ないのかもしれない。とりあえず生活必需品は全部用意してもらえるらしい。

いまはお昼過ぎ。わたしは近くの小学校の校庭で、お迎えを待っている。待ち合わせ場所にここを指定されたからだけど、理由は不明。ちなみに日曜日だから、誰もいない。

落ち着かない気分だ。お迎えか、文字通りだよね、とか暗い気分で笑つてみたり。笑つた後でため息が出た。

天気は良かつた。雲はなく、空はお昼過ぎにしては珍しいくらい深い茜色に染まっている。いつもはもつと薄い、紫とか藍とかそれ系の色なのに。

茜色は、なぜか切ない。

どうにも今の心境に合い過ぎていて、もし神をまでも居るなら、もしやわたしのために用意してくれたのか、なんて普段は全然考えないことに思いを馳せたりしていた。

その夕空の中を、一機のヘリコプターが飛んできた。こちらに向かってくる。へりは真っ白だった。天使さまの色。もしかして、と思ふわたしの予感を裏付けるように、それはゆっくりとわたしの目の前に舞い降りた。なるほどだから校庭、とかわたしは一人で納得。へりから大人のひとが出てきて、名霧沙凪さんとご家族の方ですね、と聞いてくる。叔父夫婦がすかさずにじり寄つて挨拶した。見たこともないくらい愛想がいいその姿をできるだけ視界に入れないようにしながら、わたしはさつさとへりに乗り込んだ。彼らに最後の挨拶はしなかつた。何だか捨て鉢な気分だった。

へりの中つてどうなつてるんだろ、と思いながら体を引き上げると、田が合つた。

先客がいた。

何故か誰もいないと思いこんでいたわたしは、面食らつて一瞬固まってしまった。

「はじめまして」

先客であるところの女の子は、何だか大人びた口調でそう言つた。

「あ、は、はじめまして」

わたしはぎくしゃくした動作で、外見通りに狭い内部を縦断して、その子の隣に腰を下ろした。

「日野日羽よ。よろしくね」

短くて覚えやすい名前だなあと思いつつ、お返しにわたしも皿口紹介。

「名霧沙凪です。よろしく……あの、あなたも？」

「日羽でいいわよ。あなたの思つてる通り、入院」

やつぱりそつかあ、とわたしは納得した。

だつてものすごい美人なのだ。肌はきめ細かくてきれいだし、長い髪は絹みたいにサラサラでしつとり真っ黒。切れ長の瞳。純和風美人。わたしははあ、と溜息をついて思わず自分の貧相な胸を見下ろした。わたしと同い年くらいだと思つんだけどなあ。

「やつぱり人それよね……」

「何がつ？」突然日野日羽がしみじみと呟くものだから、わたしはどうきつとして彼女を見た。思わず胸に両手を当てる。彼女はそんなわたしをきょとんとした様子で見ている。

「あ、いえ。あなたも随分落ち着いているようだつたから。私の周り、私が天使病だつて分かつたら大騒ぎだつたのよ」

「ああ、そういうこと。

「それだつたら、わたしの周りもすごかつたよ」

わたしは主に美加子を思い浮かべながらそう言つた。

「ただ病気になつただけなのにね。そんなに騒ぐことかなあつて」

「同感ね。それだけ、天使の人気がすごいといふことなんでしょうけど」

日羽もわたしに似て、天使さまに対する接し方が割とドライなようだ。すこし共感を覚えて、ちょっと安心する。入院先でみんな天使バンザイしてたらわたし、やつてけないかもだし。

それにしてもそんな二人が天使さまになるとは、何というか皮肉な結果だ。どうせならすきなひとがなつたらよかつたのに。いや病気だし、よくはないけど。

ヘリが浮き上がった。そういえばヘリに乗るのは初めてだつたけど、意外に怖くない。もつとぐらぐら揺れたりするものだと思つたけど。

ところで。

「なんだか、それっぽいヘリだね……」

わたしはヘリの中を改めて見回した感想として、そう述べた。医療器具っぽいのがそこらの壁に取り付けられていたり、天井からぶら下がつていたりしている。救急車ならぬ、救急ヘリ？

「このヘリ、天使がいつも移動に使つているのをそのまま転用してみたまうみたいね」

なるほど、天使さまは病人だからして、移動中に具合が悪くなつても対応できるようにといふことですか。

「わたしたち、病気……なんだよねえ……」

今のところ、特に気分が悪いとか具合が悪いという自覚が全くなつた。だからこういうのを見ても、自分がそのお世話になるところが全然想像できない。

「そうよね……病気、なのよね」

日羽は何だか沈んだ顔で黙つてしまつた。わたしと同じで実感がないのか、それとも病気になつてしまつたことを憂いでいるのか、よく分からない。

きゅうに雰囲気が暗くなつたので、わたしはちょっと焦つた。

「ま、まだ全然悪いとこないのに、入院でカンヅメなんて大げさだよね？」

自分でも妙に思えるくらい明るい声で、そんなことを言つ。言つ

てからちょっと失敗したかもと思つた。彼女にはビックリ悪いところがあつたのかも。

だけど幸いといふか、日羽はにっこり微笑んで普通に返してくれた。

「そうよね。でも自覚症状がないっていつだけで、水面下では結構進行してるとか……」

「ええっ」

わたしは思わずのけぞつてしまつた。なぜなら田羽の笑顔がちょっと怖いから、すなわちにっこりからにやりに変わつたからだ。

「お、おどかさないでよ」

「ふふ、言つてみただけよ」

「このひとは……」

「大丈夫よ。自覚なくとも強制入院で検査なんて、天使病じやなくてもよくある話よ」

「そなんなんだ」でもそれは大丈夫でもなんでもないような。「病院つてどんなところなのかなあ」

「そうね、分からぬけど……住みやすいといいわよね。噂では結構いいところらしいけど」

「へえ、そなんだ」

わたしの天使さま知識はほぼ全て美加子から聞かされたものであり、美加子は病院に関する話をぜんぜんしてくれなかつたのでその噂の内容は分からなかつた。

「これから一生病院暮らし、なんだよね」

「そうね」

「治らないのかな？」

「そういう話、聞かないわよね」

「そうだねえ……」治つてたら二コースになつてそつだし。天使さま引退式とか。

うーむ、治らない病気なのにこんなに自覚がないって、アリ?いや痛いより全然いいんだけども。

そんなとりとめのない会話をしばらく続けていると、ヘリが下降した。またどこかの学校に着陸するようだ。

窓から外を眺めていると、中年くらいのおじさんと、その隣に、小柄な女の子の姿。遠田でよく見えないけど、女の子はわたしたちより少し下、中学生くらいに見える。あの子がそうなのかな？

と思つていたら、果たしてその子が乗り込んできた。

その子は不安げな瞳でわたしたちを見ると、なぜか慌てたように目を逸らして離れた席に、しかもこちらに背を向けて座ってしまった。わたしは日羽と顔を見合せると、連れ立つてその子のところへ歩いていった。

「こんなにちは？」

そつと声をかけたつもりだったんだけど、後ろからだつたせいか、その子は痙攣したみたいにビクツとなつてこっちを振り向いた。

その子も、やつぱりというか、とても可愛かつた。肩くらいまで伸びた髪に陽が反射して、輪つかを作っている。何というか小動物系。笑つたら、見ているだけで幸せになりそうな気がする。するなんだけ……。

なんだかものすごくおどおどしているのだ。わたし、何かした？とか不安になるくらい。見た目がかわいらしいので余計に心配になつてしまつた。虐められてないかなあとか。すこし変な気分になる表情だ。

「初めてまして。日野日羽よ」

日羽の落ち着いた声で、正氣に返るわたし。

「あ、わたしは名霧沙凪（なぎ）」

「あ、ほ、穂ノ村、奈緒です」

かわいい声だなあ。

「よろしくね。奈緒も入院？　あ、丁寧語じゃなくていいよ」

わたしの質問に、がくがく頷く奈緒。激しく人見知りするタイプなのかな。

日羽と一人で、奈緒の近くに腰を下ろす。奈緒は俯いて固まつて

しまった。どうしようか、という気持ちを込めて日羽を見ると、田
が合つた。同じことを考えてたと分かつて、二人で苦笑い。

「ね、奈緒は天使さまになるつて聞いて、どう思つた？」

とりあえず無難そうな話題を振つてみる。

「あ、わ、わたしは」

すると、俯いたままではあつたけど、奈緒の声にほんのすこしだ
け、力がこもつた。

「ずっと、憧れてたから……」

そして頬を桃色に染めて、とても幸せそうに、口元を緩めた。
やつぱり笑うと可愛いなあ。

「す、ぐく、嬉しいなつて……」

ああ、この子も天使さんファンなんだなあ。

わたしはまたも日羽と顔を見合わせてしまつた。どちらかという
と奈緒みたいな子のほうが多いつて、分かつてはいたけども。

それにして、世の中には病気になつて嬉しいという子がたくさん
いるのだなあ。天使病限定だらうけど。どうなんだろ、それつて。

「でも、わたしなんかが、ちゃんと天使さまになれるのかなあ……」
小さい声、また不安げな表情に戻つてしまつた。それはきっと身
体的なことじやなくて、ちゃんと天使さまとして社会貢献できるの
かなという意味なんだろう。

「それはわたしも、ちょっと心配だな」

だいたい天使さまは具体的に何するのかさえよく分かつてないし。
「訓練も何もなくて、いきなり天使やってください、とはならない
と思うわよ」

日羽は気楽な構えだ。わたしも彼女を見習おう。

「でも……」

奈緒はやつぱり不安みたい。

「まあ、きっと大丈夫。よくわからないのは同じだし、これから一
緒にがんばっていこうよ。仲間なんだし」

ね？ と奈緒に向かつて首を傾げると、彼女はちょっと驚いたよ

うに目を丸くした。わたし何かへんなこと言つたかな。

「うん……」

俯いてしまつたけど、でも、その後で安心したみたいに表情を緩めた。

「そうだよね……がんばる。がんばろう」

そしてうんうん頷いて、えへへと笑つた。ほわんかオーラがちいさい体からふんわり放射。なんだか和む。

奈緒の緊張もずいぶんほぐれたみたいで、それからは普通の雰囲気になつた。わたしはほつとした。これから一緒に天使さまやるのに、ずっとおどおどされてたんじゃちょっといやだしね。

三人でしばらく話し込んだり（といつても奈緒はあんまり喋らなかつた。引っ込み思案な子だ）、ヘリが降り始めた。いつの間にか随分陽が傾いている。深い深い茜色。そして眼下は木ばかりだった。どこかの山の中みたいだ。

少し視線を巡らすと、山の中にぽつかりと空いた場所があつて、そこにいくつかの建物が見えた。ヘリはそこに向かっているみたいだつた。

ある建物の屋上に、着地。長いような短いようなフライトは終わりで、いよいよわたしたちは、これから的人生を過ごす家である、病院に辿りついたようだつた。

病院が家。我ながらいやな想像。

三人して夕日が照りつける屋上に降り立つと、一人の女性が出迎えてくれた。

「初めまして。新しい患者さんたちね」

三十歳くらいの女のひとだつた。ジャージ姿で、さばさばした態度で話しかけてくる。手にクリップボードみたいのを持つていて、視線がわたしたちの顔と順番に往復していた。あそこにわたしたちの顔写真その他が貼つてあつたりするんだろう。

「間違いないようね」

確認を終えたらしい女のは、ボードを下ろすと改めてわたしたちに向き直つた。

「私は浅川瞳。これからあなたたちの、寮母兼教師になります。よろしくね」

「あ、よろしくお願ひします……」教師？

日羽は礼儀正しく、奈緒はやつぱりおつかなびっくり。三人三様に挨拶するのを待つて、先生であるらしい浅川せんせは口を開いた。

「まずはあなたたちの病室に案内するわ。ついて来て」

病院の中は、ちょっとイメージと違っていた。床はフローリングで、壁にはちゃんと壁紙が張つてある。ところどころに花が飾られていたりした。病院というより小洒落たマンション？みたいな雰囲気……なのだけど、においだけは、ここが何であるのかはっきりと主張していた。ちょっと薬くさい。

せんせは階段を一階分下りて、廊下の端にある部屋の前で立ち止まつた。

「ここがあなたたちの部屋よ」

部屋の入口の横にはネームプレートが掲げてあって、そこには四人分の名前が書いてあった。

日野日羽

名霧沙凪

穂ノ村奈緒

白河夢

一人だけ、知らない名前があった。しらかわはかな、と読み仮名が振られている。それを横目に、誰だろうなあと思いつつ、扉開け放しの部屋の中に入ろうとしたわたしは、思わず立ち止まつてしまつた。

ベッドの上にお人形さんが座つてる！

だだつ広い部屋の中、四つあるベッドのひとつに、可愛らしいお人形さんがちんまりと腰を下ろしていた。半分振り返るような体勢で、こちらを見ている。ゆるゆると波打つ長い髪が、ベッドの上に散らばつていた。

そのお人形さんが、あ、と声をあげた。

そして微笑んで、小さく頭を下げるよう、こんにちは、と挨拶する。長い髪が揺れて一房、ベッドの縁からはらりと落ちた。

夕日に照らされて、整った顔だちに朱と翳が差す。消えてしまいそうに儚い微笑み、それはまるで、絵みたいな光景だった。

ここまで名が体を表している人もまざいない。ベッドの上に居たのはもちろんお人形さんなんかではなくて、知らないネームプレートの女の子、白河優だったのだ。

*

四人揃つてまずはじめに浅川せんせがやつたのは、わたしたちの右手にバンドを巻きつけることだつた。

桃色の、ビニールでできたバンド。生年月日と名前が書いてある。外せない構造になつてゐるみたいで、引っ張つても取れそうになかつた。

「こら、取らないの」いきなり怒られた。

「取り違えとかないようにするための、大事なものだからね

「は、はあい」

「それじゃ、最初は一通り案内するから、これ、暇なときにも読んでおいて」

その次にして最後、わたしたちに手渡されたのが「病棟での生活ルール」という冊子。説明らしきものはそれで終わりらしく、浅川せんせはさつさとどこかに行つてしまつた。あつさりしすぎ!と思つたけど、延々説明されても退屈そうだしこれはこれでいいかもしない。条件反射的に冊子をぱらぱらとめくると、一日の生活スケジュールとかお風呂の使い方、図書館とかの病院内の施設についてなんかが書かれていた。

で、当然のように、閉じる。

それよりも、最後の同室者のほうが気になるのだ。

「ね、僕も今日からここなの?」

名前だけの簡単な自己紹介の後、みんなそれぞれ四つあるベッドに腰を落ち着けた辺りで、わたしはそう切り出した。

「うん、わたしも。みんなよりちょっと前に着いたみたい

「やっぱりへり?」

「うん。わたしひとりだったから、ちょっと寂しかったわ」

「ちょっとはかなげに苦笑い。手足なんかすごい細くて、なんとい

うか守つてあげたくなるような女の子だった。

「あと一人くらいは乗れたと思うし、僕も一緒に連れて行けばよかつたのにね」

日羽が答える。

「多分、僕が来たのと方角が違つたんじゃないかしら」

「あ、なるほどね。わたしは関東だつたけど……」

「わたしは九州ね」

「ということは、ここはその間にあるということとか。そういうえば随

分長いこと、へりに乗つてたもんない。

ところで僕は九州人。その割には……、

「九州のひとつて方言ないの？」

「ある、んだけれど……でもわたしの周りには偶然、関東出身の人ばかりいたみたい」

「へえ……学校でも？」

僕もやつぱり、わたしたちと同じくらいに見える。当然学校に行つてゐるだろうと思つて聞いてみたんだけど、僕の顔がちょっと曇つた。すこしだけ困つたような微笑。

「わたし、学校には行つてなかつたのよ」

「えつ」

「ずっと入院してて。あ、そんなに重い病気じゃないのよ。でも、もしものときのために言つて言われて」

慌てたように、言葉を重ねる僕。わたしも慌ててしまつ。

「ごめん、いきなりへんなこと聞いちゃつて」

「ううん、気にしないで」

てのひらをふりふり。その腕の細さも病気だつたと言わると納得してしまう。

「にしても」わたしは話題を変える。「僕つてきれいだよね。お人形さんみたいな」

「……うん」

ずっと黙っていた奈緒が、ちいさな声で、感心したように、同意した。わたしや日羽と会ったときはおどおどしていた奈緒だけど、僕相手にはそんな様子がない。これは僕の出している雰囲気のせいだと思う。とっても柔らかい雰囲気なのだ。

「ありがとう。でも、みんなも天使さまみたいにきれいよ」

ふふ、と言つて花咲くように笑う。本当、絵になる笑顔だ。

「天使をまといえば、僕はどう思つた？ 天使さまになるつて言われて」

日羽はクールで、奈緒は憧れてたつて言つてたけど

「私は、嬉しかったわよ」

ちよつとびきつとした。相変わらず雰囲気は柔らかかったけれど、強いやる気というか、意志を感じるというか、……うまく言えないけど、声にそんな感じの何かが混じつたから。それがどういう意味かはわからないけれど、一つ分かつたのは、僕も天使さま肯定派だということだ。

そんな雰囲気は、でも、嘘だつたみたいに一瞬でどこかに行つてしまつた。

僕はふと思い出したように、斜め上を見て「ひひひひひひ」

「そういえば、現役の天使をまたちつてびじてこるのかしら？ 何だか人の気配がしないけれど……」

そういえばそうだ。

「お勤めに出てるんじゃないから?」

「と、日羽。なるほど、お仕事中か。

「お勤めつてちゃんとできるか、不安だわ……」

僕が、わたしたちの心中を代弁するようなことを言へ。これに対し、日羽が衝撃の推論を述べた。

「さつきの浅川さん、寮母兼教師つて言つてたわね。きっとその辺りに関する授業とか、してくれるんじゃないから?」

先生つて、そういうことか！

「病院に来てまで、勉強かあ……」

我ながら情けない声が出た。でも考えてみれば当たり前だ。天使さまのための訓練とか何もないはずがない、それすなわち勉強、といつことだ。

「ふふ。まあ、みんなで助け合っていきましょ」

日羽は余裕の笑み。この人は頭よさそうな感じがする。

「うう。よろしくお願ひします……」

因みにわたしは、勉強は苦手だ。げんなり気分をこまかすべく、ばさーと布団に顔をうずめる。きもちいい。異様に肌触りのいい布団だ。家より全然いい。

家よりいいと言えば、この病室。ベッドに机、クローゼットが四人分、さらに洗面台も大きなのが備え付けられているのに、広さにはまだまだ余裕がある。内装もきれいで、はつきり言って快適だ。

「ここ、快適だよね」

わたしがそう言つと、奈緒ががくがくと激しく頷いた。他の二人もそれぞれに同意。

「でも、病院なのよね」

日羽、さくつといい気分を破壊。わたしは突然怖ろしいことに思い当たつた。

「もしや点滴とかありますか？」

「定番ね」

日羽め。すこしは気遣いといつものをしてほしい。……奈緒も蒼い顔してるじゃないですか。

「大丈夫よ。慣れれば大したことないし、すぐ慣れるわよ
傳さんそれフォローになつてませんから」

「そうそう。それに点滴なんかの治療よりも、検査のほうがつらいと言つし」

どう考へてもわざとおどかしている。そのにせにや笑いをやめて

欲しい。日野日羽はサディスト女だ。

「天使病の検査って、どんなのかしらね……」

そして僕はちょっと天然？

段々付き合い切れなくなってきたので、奈緒に話を振つて逃げることにする。

「それ、何が書いてあるの？」

奈緒はぼやつとしていたらしく、わたしの声にびくつとして顔をあげた（多分わたしと同じで病院トークを聞きたくなかったんだろう）。その手元にはせつとき浅川せんせが置いていった「病棟の生活ルール」がある。

「えつと……」

奈緒の視線はわたしの顔と手元の冊子を三往復ぐらうした。

「もうすぐ、ご飯の時間みたい」

「そういえばお腹減ったな。

「ご飯てどんな感じなんだらうね」

「病院食だから、やっぱり健康的なのが出そうだよね。僕は知ってるかしら？」

僕にあつさりと入院ネタを振れる田羽は、結構ただ者ではない。わたした的には結構触れづらい。

当の本人は全く気にしてないようで、

「そうね。配給食より少しいいものが出ているみたい」

なんてふつうに答えてる。

「じゃあ、ちょっと期待していいかな。……配給つておこしくないし」

「全くね。それくらいの役得がないと、割に合わないわ
あ、奈緒の目が、ちょっと輝いてる。相当期待してそうだ。

「なんだ、ちょうどご飯の話してたのか」

そこに聞き覚えのある声。入口を見ると、浅川せんせが立つていた。

「晩ご飯の時間だよ。食堂に案内するからついてきて

「何か見たこともないくらい、豪華な感じなんですか？」

いま食堂にいるのははわたしたち四人だけ。やつぱり天使さまたちはどこかに出かけているようだ。せんせも何やら忙しいらしく、案内が終わるとどこかに行ってしまった。

だけどそんなことよりも。

ちょっとおかしいくらい豪華な夕飯だった。「」飯に味噌汁、焼き魚……とこうと基本のように聞こえるけど、どれもびかーと輝いてる。いや、「冗談抜きで。

確かにこれは……すごいわね」日羽も驚いている。「病院食って、こんなにすごいのかしら」

「ここまでは……」

僕まで驚いているといつとせ、これは本当にすごい。

「とりあえず、いただきまーす」

わたしが言うと、みんなが唱和。

「頂きます」「い、いただきます……」「いただきまーす」

ご飯を一口。う、うまい！ふくらもちもちが口の中で弾ける。しかも何だか甘い。配給米のぱさぱさカラカラに比べると、もはや別の種類の食べ物みたいだ。

「これ、日本米だわ……」

感嘆した様子で、日羽が呟いた。まじですか、日本米って言えば超高級品じゃないですか。

「お魚もすごくおいしいわ……」

ほとんど呆然とした様子で、僕。何ていう魚か分からぬけど、淡白な中にも脂が乗つていて、確かにものすごくおいしい。

「ひうつ」

しゃくりあげる声が聞こえたのでどきっとして見ると、奈緒が泣いていた。

「ビ、ビウしたの、奈緒」

「うう」

隣に座っていた僧行が、すかさず背中を撫でてあげた。大粒の涙をぽろぽろこぼして泣いている。

「どうしたの？」

僧行が優しく尋ねると、途切れ途切れに奈緒は答えた。

「う、うはん」

「うん」

へんなものでも入つてたのかな……。

「お、おいし……よお……」

あまりのおいしさに号泣ですか。

何だか逆に、微笑ましい気分になつた。何といつても号泣である。泣くほどかなあと思わないでもないけど、気持ちはよく分かる。このご飯は、それくらいおいしいのだ。

みんなで顔を見合わせる。やさしい表情だった。

「毎日こんなご飯が食べられるのかなあ」

それだつたら相当幸せなんだけど。

「わたしたちが生まれるちょっと前くらいまでは、これくらいのご飯が普通だつたそうだけど……」

奈緒が落ち着いた頃を見計らつて、僧行がそんなことを言った。

「え、そうなの？」

なんてぜいたくな時代なんだ。

「ていうか、じゃあなんで今はこんなになっちゃつたの？」

「……黒塵のせいよ」

僧行の表情が、ちょっと曇つた。

「黒塵……つて？」

何となく僧行に聞くのがためらわれたので、わたしは奈緒を見て、田羽を見た。奈緒は知らないらしく、ふるふると首を振つたけど田羽は知つてゐみたいだった。

「昔、大裂穴っていう大きな災害があつたって、聞いたことないか

しら

「うーん、知らないなあ」ニュースか何かで名前くらいは聞いたことがあるつたかもしれない。

「十五年くらい前になるのかしら？ 世界のいろいろなところで、とつぜん、地面に大きな裂け目ができたのよ」

「へえ……」

「日本だと、北海道に一つ。当時はすごいぶん、沢山の被害者が出たみたい」

「そうだ、ニュースで見たのってその大裂六十周年だかで北海道が映つてたやつだ。」

「そして、その裂け目からは塵が噴き出している。それが黒塵」

「そうなんだ。でもそれと食べ物が、どう関係あるの？」

「塵が大気中に巻き上がって、太陽の光を遮つてるのよ。それで作物が育たなくなつて、食べ物があまり採れなくなつた、といつことらしいわ」

なるほど。大裂穴というのはずいぶん重大な災害だつたようだ。

「あ、もしかして今、食べ物が配給なのってそのせい？」

「そうみたい。以前はお金さえ払えば、好きなだけおいしいものが食べられたそうよ」

「へええ、昔はいい時代だつたんだね」

「ね？」と奈緒に同意を求めるど、うんうんと熱心に頷かれた。ち

んまいで何だかかわいらしい。

「大裂穴以前は、空もいつも青く澄んでて、きれいだつたそうね」

そう言う僕の口は何だか遠く、笑顔はちょっとだけ、弱々しい。

「今は大体いつでも『夕空』っていうけど、昔は夕空つて、日が沈む前のほんの少しの間にしか、なかつたみたい」

「きれいな空があ……そういうえば、昔の映画とかの空つて青くてきれいだね。何だろうこれつて思つてたよ」

空と言えば、灰っぽい青色とか藍色とか、暗いイメージが強い。ときどき真っ赤になつてるとときはきれいだと思つけど、それも明る

いとは言えない雰囲気だし。

「それも黒塵のせい？ なんだよね」

頷く僕。

これについて、日羽が追加で説明してくれた。

「大気に散った塵が、陽の光を反射するのよ。青い光はたくさん反射されると見えなくなつて、赤い光が残るから、空が赤っぽくなるのね」

「へえ……く、詳しいね」いまいちよく分からるのは内緒だ。

「ええ……。父の仕事の関係で、よくそういう話を聞かされていたのよ」

日羽は苦笑い。ちょっと喋りすぎた、というかんじの顔だ。

「日羽のお父さんは、学者さん？」

「ええ。そうだったわ」

「だつた？」

「もう随分前に、死んでしまつたの」

「あ、そななだ……」

ちょっとと申し訳ないこと聞いたかな、と思つたけど、日羽の顔はそれほど深刻な感じでもなかつた。

「昔の話だから、もう氣にしてないわよ。だからいいの」

「う、うん。わかつた」

いつもとしては、やつぱり多少氣を遣つてしまつ。でも日羽の態度は本当に気になさそうだった。

「その、黒塵のせいで、なんだか随分色々なことが変わっちゃつたんだね」

「そうね、と日羽。

暗い話はちょっとといやだつたので、わたしは話題を変えた。

「えつと。天使さまつて、結局どうこうすることするのかな？」

「ボランティア活動よね。老人ホームとか、児童養護施設に行つて話し相手になつたりとか、お茶配りとか」

「そういうのつて、テレビでよくやってるね」

「そうね。あとは……」

「チャリティコンサート、とか……」

そう、ちいさな声で、奈緒が言つた。奈緒が自分から喋るのは、これが初めてだ。この子なりに気を遣つたのかもしれない。

「コンサートって、楽器とか？」

「うん……樂器の天使さまもいるし、歌う天使さまも」

「へえ……奈緒は行つたことあるの？」

ふるふると、横に首を振る奈緒。天使さま好きみたいだから行つたことあるんだろうと思つたけど、ちょっと意外。

ここで僕が話に加わってきた。

「部活、って言つてたわよ」

「部活？ つていうか、僕って天使さまと話したことあるの？」

「ええ、入院してたとき、一度だけ天使さまがボランティアで来て。そのときにちよつとだけ、話すことができたの」

まだ少し顔が白かつたけど、僕の表情は笑顔だ。いいなあ僕ちゃん、と呟く奈緒に、奈緒ももうすぐ会えるわよ、なんて返す。もう平氣みたいだ。

「……ていうか、部活なんてあるんだ」

「最初から部活として活動してたわけじゃなくて、誰かが『冗談で『部活』って言つたのが通つちゃつたみたい。わたしたちと同じくらいの年の天使さまばかりだから」

「なるほど」 そういえば、もうふつつの学校へは行けないんだよなあ。

「いろいろなんだね、天使さまのお仕事つて」

「そうね。結局は自分でやりたいことを、やるのがもしかないわね やりたいこと、か……。よくわからないな。ちょっとばかり不安が増した気がする。

「さて、じちじちとままでした」

気がつけばみんなの食事が終わっていた。

色々思うところは、あるにしても。

今はとつあえず、明日からも同じようにおこしこじ飯が食べられることを祈る「と思つ。

タジ飯が終わつた後は、お風呂（ホテルみたいにどでかいお風呂だつた）。奈緒が妙に服を脱ぐのを躊躇つていたのが印象的。恥ずかしかつたのかな。みんながはだかになつてしまつてよづやく、という感じだつた。

それが終わると、今日のところは、何もすることがないらしい。寝るにも早い時間だつたから、ベッドの上で「ううう」しながら話していると、ふいに入口から声が飛んできた。

「あつ、新しいひと、いたよ！」

振り向けば、そこはテレビの中の世界。

病室の入口は真っ白、天使病患者であるところの天使さまたちがひしめいていた。白い髪、白い肌、白い服、女のひとも男のひともみんなものすごい整つた顔立ちをしていて、とつぜんその場所だけ昼になつたみたいに明るく見えた。

天使さまたちは、うわあやつぱり今回もかわいいなあ、とか黒髪懐かしいなあ、などと言しながら次々病室に入つて来る。来た。頭を撫でられた。

わたしは大いに慌てて、助けを求めるように奈緒を見た。

奈緒はだめだ。

わたしと同じように頭を撫でられたり、体をぺたぺた触られたりしているけど、田が遠い。口元もふにやふにやだつた。ここではない、どこかへみたいな。田羽と僕もそれ天辻さまにいじられてゐる。どことなく困つたような顔。

白い激流がわたしたちを呑みこんで、どこか遠いところに連れ去つてしまつようと思つた。テレビの中の世界とはつまり、夢の中の世界だ。

とんでもないところに来てしまつた！

本当だつたのだ。ここが天使さまたちの巣だというのは眞実だつたのだ。今の今まで、実は信じていなかつた。ちょっと豪華なところに入院することになつたなくらいの気持ちだつた。でも違うのだ。ただの病院ではないのだ。

ここは天国、天使さまのまします白い樂園だつたのだ！

といつぶつ飛んだことを考えてしまつくらいすごい光景だつた。全員白くて超美形、後光が差して見えるのだから、仕方ない。ないのだ。

わたしの頭の中まで、ついでに真つ白になつた。結局、天使さまたちが満足するまでしばらくいじり回されてから、ようやく解放された。もう、半ば放心状態。

奈緒の状態がいちばん酷かつた。

「うふふ~う……」

枕に顔を埋めてなにやら奇声を上げている。笑い声らしい……。

ときどき思い出したように足がばたついていた。不気味だ。

「奈緒が、壊れちゃつた……」本氣で心配そうな声をあげる儂。

「しばらく放つておけば大丈夫よ、冷静な日羽。

そんなみんなをぼうつと眺めながら、わたしはよつやく実感していた。

これから本当に、天使さまたちの仲間入りをするんだ。

*

入院最初の夜は、なかなか寝付けなかつた。たつた半日で、ものすごく色々なことがあつた気がする。

何だかずいぶん、遠いところにきてしまつたよくな。

まったくの異世界だつた。入院するのは初めてだつたし、同年代の子と共同生活みたいなことをするのも初めてだつたし、あんなにおいしいご飯食べるのも初めてだつたし、生で天使さまを見るのも初めてだつたし、あれ？ いいことばかりな気がしてきた。

でも明日からは治療とかするんだから、とにかく、わたしは病気なのだ、自覚ゼロだけど。……やつぱりいじばかりじゃなさうだ。はあ。

ベッドの中でぐるぐる考えながらも何もぞしていると、他のベッドからも同じような音が聞こえてきた。全然眠くないわたしは声をかけてみた。一応小声で。

「ね、起きてる？」

「起きてるわ」これは田羽の声だ。

「私も」「……うん」何だ全員起きてるじゃん。

「何だか眠れないんだよね」

わたしがそう言つと、皆がそれぞれに同意した。皆同じ気持ちなのかなあ……。

「ねえ、みんな寂しくない？」

これは僕の声だ。

寂しい、か。わたしはそんなに寂しいとは思つていなかつた。美加子とかの友達と会えないのは寂しいけど、親はもういないし。まず日羽の声が聞こえてきた。

「私は寂しくないわね。こいつときはホームシックになるものかもしれないけれど、私には親がないし」

お母さんもいなかつたのか……。でもやつぱり、そんなに深刻な感じがしない。もう気持ちに整理がついてるかんじの声。

だから、その雰囲気に乗つかつて、わたしも自分のことを言つてしまつ。

「田羽もそうなんだ。わたしもそうだから、あんまり寂しくはないなあ。みんな、いい感じだし」

「ふふ、そうね。ここに来るまで不安だつたけれど、良かつたわ」

「そう言つ僕はホームシックとかどうなの？」

「わたしは、慣れてるから」

ずっと入院生活だつたから、あまり状況は変わっていないんだと言つ。彼女の声は明るい。

「わ、わたしも……」

奈緒の声だった。

「心配してくれるような親、いないから。……」のほうがいいな

……」

消え入りそうな声で言つ。田んぼありげな雰囲気だった。まあでも、むしろそれが普通かもしれない。わたしたちみみたいにすっかり割り切てるほうが、珍しいかも。

それにしても。

「みんな、ホームシックとは無縁みたいね」

日羽がどこか楽しそうな調子で、そう言つた。わたしも何だか妙に高揚した気分だった。連帯感？

「明日から、いっしょにがんばろうね」

仲間意識らしきものを感じたわたしは、勢いに任せてそう言つた。それに返つてくる同意の言葉。

同じ立場の人人がすぐ近くにいる、安心感とか。

明日からどうなるか分からない、不安とか。

いろんなものが閉じた目蓋の裏に浮かんで消えて、わたしはいつしか眠りに落ちた。

目覚めれば、明日が来る。

— 天使さまの体には、黒蜜が流れている

「気持ちのいい朝だ！」

翌朝。軽やかにベッドから飛び降り窓に駆け寄ると、かしゃーと一息にカーテン全開。射し込む朝日。陽光は元気と笑顔の素だよね。

「はいそれじゃ気持ちよくお薬飲みましょうねー」

空気が読めないにも程がある台詞に振り返つてみれば、看護師さんと思しき白衣の女性が何やら袋を持つて、部屋に入つてくるところだった。

「これ、毎食後に飲んでくださいね」

何とも微妙な氣分で袋を受け取る。うわあいっぱい入つてる。

「はい朝ですよ、起きて起きて」

まだ寝ていた他の三人を叩き起しながら薬袋を押し付ける看護師さん。鬼。

「……ふえ？」

寝ぼけ眼で手にした薬袋を眺める奈緒。あ、倒れた。寝起きはようくないようだ。

「あと血採っちゃいますねー」

奈緒ががばつと起きて、この世の終わるような顔で看護師さんを見つめた。笑顔で注射器を構えた白衣の天使は、奈緒の目には白衣の悪魔に見えているに違いない……。

四人分の採血を手早く終えた看護師さんは、来たとき同様さつさと去つて行つた。

「なんだかずいぶん、突然よね」僕は苦笑いしてそう言つと、起きてだして身だしなみを整え始めた。

日羽は不機嫌そうな顔で薬袋を見つめている。気持ちは分かる。

*

朝ごはん（やつぱり豪華だった）を食べに行つて幸せな気分で部屋に戻り、少し話していると、さつきの看護師さんが再びやって来た。

そして看護師さんは不幸になる呪文をとなえた。

「それじゃ、点滴しますねー」

「ええっ！？」

悲鳴を上げたのはわたしと奈緒だ。さつきの今でまた注射！？

「大丈夫だいじょうぶ、チクツとするのは一瞬だから」「うそだ！ 針長っ。見なきゃよかつた！

痛い痛い痛いもう看護師さんなんて信じない！

「おはよー」

そこに浅川せんせがやつて來た。

「早速やつてるわね」やられてます。

「検査なんかは、ないんですね」

そう聞いた僕は、もう腕に点滴チューブ装着済。早い。慣れてるせいか。

「うん、天使病の初期治療は、だいたい確立された手順に沿つてやることになつてるらしいから。でも採血はあつたでしょ？」

浅川せんせが説明する傍らで、看護師さんがそうですよー、なんて言つてる。

そういうする内に全員への針刺しが完了。看護師さんは病室から出て行つた。

「さて、あなたたちのお勉強の話なんだけど」うわ。

……やっぱり、やるんだなあ。

「あなたたちは全員義務教育を終了してゐるから、参加は任意なのよ」「勉強しなくてもいいんですか？」

わたしの言葉に、浅川せんせ、苦笑い。嬉しそうな声出ちやつたのがちょっと恥ずかしい。

「まあまあ、勉強の内容聞いてから答へなさい」

「は、はい」

……というか、全員義務教育終了ってことは、奈緒つて高校生だつたんだ……中学生だとばかり思つてた。だつてわたしの肩くらいまでしか背がないから（ちなみにわたしは普通だ）。

「で、内容だけど。基本的には、一言で言えれば、天使になるための訓練ね」

ああ、やっぱりそうなんだ。

「あなたたち、天使については知つてる？」

「もちろんだ。みんな頷いた。

「最近は知らない子、ほとんど居ないわね。それじゃ一般的なことは省いて、少し詳しい説明をするわ」

せんせは一拍置いて、天使さまについての説明を始めた。

「あなたたちが罹つている病氣、通称天使病には、症状にいくつかの段階があるの……」

せんせが言うには、こうだ。

天使病の症状にはいくつかの段階があつて、それは主に外見に表れる。

最初の変化が、髪や肌が白くなる、「白化」。

その次が、肩の辺りからちいさな羽根が生えてくる、「生翼」。わたしたちがよくテレビで見ていた天使さまは、症状がこの段階にある人たちだ。

ここまでは、しばらくは症状が安定するらしい。そして、この状態にある患者さんは、薬や点滴の必要があるとはいえ、健康な人と大体同じように動ける。

「そこで、希望者はボランティアなんかで社会貢献、というわけ。動けるということは、他の誰かのために、何かができるとこう」とだから

（ふむ？）わたしにはちょっと、よく分からなかつた。話が飛んでいる気がした。

誰かのために何かをする、みたいなことを、わたしが眞面目に考えたことなかつたせいかもしれない。

やれることがあるならそれをやる、というのは、分からぬでもない氣もするけど。

「ボランティアと言つても色々あつて、一口には括れないんだけど、基本的な考え方とか、行く場所によつては訓練が必要になつたりする。あ、あとテレビに出るときの心得とかね」

そう言えば、天使さまといえば、テレビに出るんだ。

「すごい人気ですよね、天使さまって」

僕のこの発言に対し、せんせはちょっと苦そうな笑いを浮かべた。意外な反応。

「あれは、ちょっとと予想外だつたけどね。こんなにおお」となることは……。でも、テレビに出てる天使たちを見て、心の支えにしてる人もいるつて聞くから、結果的には良かつたのかもしれない」「私、そつだつたんですよ」「……わたしもです」僕と奈緒が控えめに、そう言つた。そつだつたのね、と答えるせんせの顔はさつきより少し、満足そつだつた。

「で、そんな感じの諸々を、生翼の段階になつて症状が安定するまでの間に勉強するわけね」

分かつた？ と言いつつ、せんせはわたしたちを見回した。

「質問が」

日羽が小さく手を挙げつつ、言つた。

「どうぞ」

「勉強は、天使のためのものだけですか？」

その質問にわたしはどうとしました。

「いいえ。ここではあなたたちの希望は、できるだけ叶えるようにしてゐる。だからやりたいことがあれば、私たちはできるだけのサポートをする。……まあ、あまり専門的なことだつたりすると無理だけど。高校の勉強くらいなら大丈夫よ」

最近はとくに、普通の勉強をやりたがる子がいなかつたから説明

を省いてしまつたけれど、といふことらしい。

「何をするにも自分の気持ち次第、何もしなくてもいいといふことですか？」

「その通り」

高校の勉強つて言われて不安になつたけど、そういうことならひとまず安心。

「ていうか、何もしなくてもいいんだ……。すうじとじるだ。

「……質問はもう、いいかしら？」

みんな頷いた。

「それじゃ、こっちから逆に質問。あなたたち、天使のための勉強、する？」

「ちょっと散歩でもする？　みたいな軽い口調だった。

「はい」「やりたいです」

奈緒と僕は即答だつた。わたしはすぐに答えられなかつた。なりたいか？　と聞かれると、よく分からぬ。絶対ならなきやいけないものだと思つてたし。

日羽も答えなかつた。

わたしたちが何か言つ前に、せんせが再び口を開いた。

「さつきも言つたけど、天使になる必要は全然ないし、別のことがしたければしてもいいの。全部あなたたちの自由だし、今やると言つたからつて途中でやめちゃいけないとこつともない」

せんせの顔は、優しい。

「一応言つておくと、ここに来た人全員が天使になるわけじゃないから。天使やらない人もいるから。だから気軽にね」

本当に自由らしい。わたしはちょっと悩んだ。いつそ強制つて言われたほうが楽かもしぬないと思つた。

「私も、やるうかしら」

日羽がそう言つた。僕と奈緒は何だかほつとしたような顔をしている。

一人の視線がわたしに集中。そ、そんな目で見られたら。

「じゃ、じゃあわたしも」

つて言つしかないじゃないか。

「オッケー。何度も繰り返すよつで申し訳ないけど、これは自由だから、それだけ忘れないでね」

まあ、とりあえずやつてみるとくらいなら損はないかな。ものは試しといふことで。

「じゃあ、今日はとりあえず自由行動。病院の敷地内は、立入禁止つて書いてあるところ以外は自由に歩き回つていいわよ。授業は明日からとこうことで」

そのとま。

「あつ、じつちかあ」

入口から女の人の声が聞こえた、と思つとそのひとはずかずかと踏み込んできた。天使さまだ。

「何しに来たの、綾菜^{あやな}」

「いやあ、新しい子たちを見に来たんですよ。ゆうべは疲れてすぐ寝ちゃつたし今朝は三度寝したから」飯も食べ損ねちゃつて、結局今の今まで会えなかつたから

すこい早口……。

「まだこっちの話が終わつてないのよ。後にしなさいな」

「かたいこと言わないでくださいよ。教室のほうだと思ってわざわざ無駄に一往復しちゃつたぼくの身にもなつてください」「ぼく？」

「それはあなたの都合で」

「やあ、初めてましてみんな！」

浅川せんせを完全無視して、綾菜さまと並ぶらしにその天使さまはわたしたちに片手を挙げて挨拶した。手首の白いバンドがきらりと光つた（^{かなで}ような気がした）。

「ぼくは歌撫^{かなで}。よろしくね」

やつぱりぼくつて言つた。世の天使さまファンの何割かに「ぼく」を広めた張本人、ぼく天使さまは、どうやらこの人みたいだ。

「ふむう、みんな天使になるのかな？」

そこそこ長い髪の一部を三つ編みおさげにした、垂れ目がちの一本重が愛らしい、少年みたいな口調だけど見た田はとても女の子な歌撫さまは、わたしたちの顔を順に見回しながらそう言った。

「一応、授業は受けたるやうよ」せんせがそう答える。

「そつか。じゃあ、そのうち一緒に外に出る」ともあるかもしけないね」

「そつそつ。だから今は綾菜だけ外に出てもらいたいかな?」

そう言って、歌撫さまの背中を押して病室の外まで運んでいく浅川せんせ。歌撫さまは「ふつぶつ」言いながらもつづがなく追い出されて行つた。

「い、いいんですか？　あれで」

わたしがそう言つと、

「いいのよ。まあ、その内また会つしね」との談。

その内とはすなわちその日の晩飯のいじだった。

「いじいいかな？」

と言いつつ誰の返事も聞かないで着席する歌撫さま。

「そつきはちやんと話せなかつたけど。よろしくね」

潑剌笑顔で「挨拶。うーん、きれいだ。わたしたちより少し年上っぽいので、まさしく美人、という感じ。喋り方は男の子みたいなので不思議な雰囲気。

「やつぱり黒髪はいいね。初々しくつて」

そんなものかな。

「世間では白いからいいんだって言われてますけど」

「あは。まあ他のひとから見たらそうかもね。でも私たちにとっては白が普通だからね、ずっとここで暮らしてると黒が新鮮になるのだよ」

そういうものですか。

「歌撫さまっていこゝ、長いんですか？」

「何だらへ、そひ言うわたしを歌撫さまはちよつと面白やつな田で見た。

「うん。今年で五年目になるよ」

「歌撫さまは、今いる天使さまの中ではこりがほん前からこる方なんだよ」

奈緒がおずおずと話に入ってきた。なるほどやつきの歌撫さまの視線は、わたしが知らなかつたのが興味深いことか。

「天使さまのお仕事つて、たいへんですか？」

僕のその質問は、全員の気になるところだらう。

「や、全然楽」

「えええ」

意外な答えだったので思わずわたしは変な声を上げてしまった。

「だつて介護とか、そういう重たいことはしないしね。私たちのやることは、せいぜい話し相手になるとか、雑用とか、それくらいだもん」

でも仕事が簡単すぎるとい段々だらけてくると、どつかで聞いたような。

「それってダレたりしないですか？」

そう言つと、突然、歌撫さまの視線が鋭くなつた。

「いや、それはないね」

雰囲気が引き締まる。不意打ちだったので、絶句してしまつた。

「ま、きみたちにもその内、分かるよ」

そう言つた歌撫さまの顔は、もう元のお気楽表情に戻つていた。うむう、何なんだろ？

そんな次第で、わたしたちの新しい日常が始まった。

朝は点滴。ときどき採血ほか、簡単な検査。点滴スタンドを押し押し、四人で教室に向かう。そのまま授業だ。最初は針刺したまま動くのが気持ち悪かつたけど、すぐに慣れてしまった。

午前は授業。「教室」と呼ばれる病棟内の一室で、四人と浅川せんせだけの、ゆるゆるとした、ちいさな授業。病衣の生徒と点滴スタンドが立ち並ぶ授業風景はちょっと異様だけど、居心地はわるくない。

午後は自由。みんなそれぞれに好き勝手なことをしている。日羽と僕は読書、奈緒は絵描きで、わたしはテレビ見たり、病院内を散歩……というか「わらわら」したり。

夜はおやすみ。わたし以外は趣味が趣味だけに、午後と同じような感じで生活している。でもわたしが居るから、このときはみんなで話をしていることが多い。

そんな毎日。

「穂ノ村、起きなさい？」

がばつと身を起こす奈緒。かわいそうに、よだれを拭うのも忘れて目をぱちくりさせている。すかさず僕が横からハンカチを差し出し、奈緒の口元をふいてあげた。

「最近、よく寝てるわよね。大丈夫？」

「す、すいません……」

ちなみに、授業中。黒板にはでっかく「天使のおじ」とは、がんばるな」なんて衝撃の文句が書いてある。つまり、基本的な心構えの授業。黒板の言葉は「無理してもいいことないからほどほど」とかそんな感じの意味だ。

「もうちょっとだね……」

お説教の気配を察知。

「ちょっと待つて、せんせ」

「いつなつてしまつと、奈緒の性格では何も言えなくなつてしまつ。

だからわたしは奈緒をかばつた。

「奈緒が寝不足なのは、夜遅くまでがんばつて勉強してるからなんだよ」

毎晩布団の中に灯りを持ち込んで、「はじめてのボランティア」とかそんな感じの本を読み耽っているのをわたしたちは知っている。布団から透けてくる灯りは、夜遅くまで消えないのだ。

「だからあんまり怒らないでやってよ」

「奈緒は確かにがんばってるわね。たぶん、私たちの誰よりも」

日羽がわたしの言葉を裏付けるようなことを言い、

「私からもお願いします、先生」

僕が静かな声でお願いすると、淺川せんせの態度は軟化した。

「しかたないわねえ。でも、寝不足は体によくないから。ほじほどにしなさいね」

「い、ごめんなさい、先生」

奈緒がおずおずと謝り、わたしたちには氣弱な微笑みを投げかけてくれる。

そんな和やかな風景も、いつのものこと、になりかけてくる。一週間というのは、それくらいの時間だった。

「さつきはありがと……沙凪ちゃん」

慣れてもやつぱりおいしいお皿[.]飯どき、奈緒がそう呟つてきた。

「いいよ別に。大したことじゃないし」

「でも、すごく助かつたから」

そう言つてうつすらと笑う。可憐、とこつ言葉が頭の中をよぎりつていた。

「ああやつて口に出して助けられるつて、ずいことだと思つよ……」

わたしは照れた。

「いや、まあ。知つた人しかいないからね。四人しかいないし。普通の学校みたいに三十人とかいたら、無理だったかも」

「いいんじやないかしら。こういうのは結果が大事なのよ。沙凪は奈緒を助けた。それで十分だと思うわ」

僕が追い討ちをかける。ああ顔赤くなつてないかなあ。

「そうそう。沙凪は格好いいわ」

日羽め。何ですかそこにやにや笑いは。

「そこ、面白がらない」

「『めんなさいね』

にやにや笑いが止まらない。「いつめ、反省の色なしだ。でも、突つ込みを入れてちょっと落ち着いたのは確かだ。

「あ、天使さまが出てる」

そう言つ僕の視線の先には、食堂備え付けの大画面テレビ。画質もきれいでめちゃくちゃ高そうなやつだ。こんなところまで至れり尽くせりなのだ。ただし番組の選択権は、なかつたりする（国営放送『NHK』固定）。

街角の花壇に、水あげる天使たちの姿が映つている。花の名前は分からぬけど、天使さまにちなんていいるのか、ぜんぶ真っ白だつた。今映つている天使さまが、すぐそこでご飯を食べていたりする。どうやら今回は録画の様子。……特に目立つた反応もないのは、もう慣れてるせいだろうか。

しばしあ喋りをやめて、みんなでテレビに見入つた。

「何でいうかわ……」

最近天使さまを見ると、思うことがある。

「実際これから天使さまになるんですよって言わると、見る目が

変わつていつか

遠い存在、自分とはぜんぜん関係ないと思つてた天使さま。だけど今、わたしたちは天使さま予備軍になつた、というか、なつてしまつたといふか。前に比べると、注目度が全然変わつたのだ。例えば、実際天使さまつてどんなことしての?つて気にするよつになつたとか。

「そうね。見てるだけじゃなくて、これから天使として活動する立場になると、やつぱり心構えといふか、見方も変わってくるわよね」「私は自分に置き換えて想像してしまつわ。今だったら、お水上手にあげられるかなあとか」

「あー、それはあるね」流石に水くらい、ふつりとあげられるだろうけど……。

奈緒はどう、と聞こひとしたら、彼女は相変わらず、じこつとテレビを凝視していた。

この子はほんとうに、天使さまが好きなんだなあ……。

「奈緒?」

ちこさへ名前を呼ぶと、大げさにびくつとしてこひちを振り向いた。

「えつ、あつ?」掬いつ放しのまま放置されてたシチューがぼとりとこぼれ落ちた。

奈緒、真つ赤。わたしたち、苦笑い。

「奈緒つて本当、天使さま好きだよね」

「う、うん……『めんなさい』

いやいや、謝らなくても。

「何かわけとかあるの? 傻みみたいに、前に天使さまと話したことあるとか」

「ううん、お話ししたことはないんだ」

「あ、そなんだ」

そこで言葉が途切れた。俯いて、上田遣いでわたしたち二人をちらちら見ている。

言つのが恥ずかしいのかな。でもちょっと面白いのでそのまま見ていようとか思つてしまつ、意地悪なわたし。

日羽も当然のように放置で、僕だけがその場の雰囲気をどうしたものかと迷つてゐるようだつた。

「あ、あの奈緒」「て、天使さまってかつこいいから」

結局一人でほぼ同時発言。

奈緒は勢いつけて喋つたせいで、止まれなかつた模様。「あ……」と言つたきり俯いてしまつた。

「かつこいいて、なんだか珍しい意見だね」

「そ、そうちかな」

「ふつうは、きれいとかかわいいとか、そんな感じよね」

日羽の言葉にみんなで頷く。

「あ、男の天使さまの話?」

男の子あるいは男の人の天使さまも、いるにはいるのだ。少數だけ。

「ううん、天使さま全部」

「へえ……」

「かつこいいか……。」

「どういうところが?」

「ううんと……」

上田線で考へ中、のポーズ。うまく言へない風だ。

「天使さまって、病氣……だよね」

「うん」

「それなのに、立派で……わたしどぜんぜん、違つて……」
ええと、それはつまり……。

「働くおとうさんみたいなイメージ?」

我ながらどうかと思うとえだ。それを聞いた僕がショックを受けたような顔をして、それを見たわたし自身もショックを受けた。

「え、えつ?……うん……え?」

奈緒までショックを受けてゐる。なにこのショックスパイラル。：

…わたしのせいだけだ。

「病気というハンデを背負つてゐるのに、立派に社会の役に立つてゐるから格好いいということかしら？」

「あ、うん……そんなかんじ」

密かにへ口むわたしを尻目に、日羽が奈緒の信頼を勝ち得てゐる。なんか悔しい。

「わたしはぜんぜん、ダメだから……」

そう言つて自嘲する奈緒。夜更かしして頑張つてる姿を知るわたしたちとしては、どうとも思えないんだけどな。

「奈緒はいちばん頑張つてるじゃない？だからダメってことはないと思うけどな」

「でも……」

「私もそう思うわ。奈緒ちゃんはじゅうぶん立派よ」

「努力は、報われるものよ」

みんなそれぞれの励ましを受けて、奈緒の顔がうれしそうにほころんだ。

「あ、ありがと……」

えへへと照れ笑い。素直でいい子だ。

「ところで、今田はみんなどうするの？」

午後は自由時間。ちなみに点滴は午前中に落ち切るので、自由時間は体も自由だ。

「私は今日も、本を」

「わたしも読みかけのあるから、続きを読むかなって」

日羽と僕はいつも通りの様子。どうも敷地内の図書館には相当な数の本があるらしく、初日に見に行つてきた後の一人の興奮ぶりはちょっとすこかつた（と言つても日羽はやつぱりクールだったけど）。

「奈緒は？」

「わたしは、絵を描こうかなって」

そう、奈緒には絵心があつたのだ。希望すればだいたい何でも叶えてもらえる天使病院、奈緒は自由時間のお供に画材一式を所望したのだった。まだ下書き段階のようだけじ、どつも儂を描いてるみたい。

「結局みんな、いつも通りかあ

「沙風はどうするの？」

「うーん……」

外は晴れてて、いい天氣だ。

「散歩しようかな」

「私も、本が読み終わったら一緒に行くわ」

それははづれしいかも。

「うん、一人でうろつくるよつそのまづがいいな。広いし、見たことないきれいな花とか咲いて結構面白いよ」

「私もたまには外に出ようかしら……」

日羽が外を見ながらそつちいた。このひとは常に家の中に籠つてそうなイメージがある。実際、ここに来てからはずっと病室で本を読んでいる。

「植物図鑑でも持つて行つたら?」

「冗談交じりでそう言つと、

「それはいい考えね」

と普通に返されてしまった。

「奈緒も、そのうち外で写生とかどう?」

「う、うん。行きたいな」

誘つてあげると、とても嬉しそうな顔をするんだ、この子は。いざ外でお絵かきとなつたら、わたしも一緒にやつてみてもいいかも。絵心ないけど。むしろ壊滅的だけビ。

「じゃ、今日もいつも通り、といふことで」

さて、今日はさっちに行こうかな。

今日は天気もいいし、屋根のないところに行つてみようか。そう思つて、わたしは舗装された渡り廊下から、その外へと、歩き出した。

病院の敷地内は、外では有り得ないくらいの緑溢れる庭園になっている。ちいさい頃に遠足で行った森林公园にさえ、こんなにしてきな自然はなかつた。

草の生えた地面を踏みしめる。足裏に、感じたことがないほど弾力が返つてくる。生命力溢れるといつか……。

本当に、きれいなところだ。

風も何だか、いい匂いがする。草花の香りなんだろうか。体全体をやさしく包んでくれるような、いい気分になれる匂いだった。ちよつとだけ冷たいけど。

ここはまるで楽園みたいだ。「飯はおいしいし、授業はあるにはあるけど余裕があるし、望めばだいたい何でも貰えるし。毎日のように点滴してお薬を飲まなければならないのは嫌だけど、それでも十分過ぎるくらいお釣りの来る生活だった。

外よりも、いいところ。

でも。

わたしたち本当に病気なのかな、とは、もう思えなくなつてしまつた。

体は今のところ、あんまり問題ない。ときどき少しだるいかなと思つことはある。でも痛かつたりとか、そういうことはない。わたしだけじゃなくてみんながそうだ。みんな、それなりに元気だ。それなりに。。。

だけど、わたしたちは確かに天使病なのだ。

その証明は、鏡を見れば目に入る。

少しずつ、髪の毛の色が抜けて来ているのだ。

まだ、どちらかといえば、黒い。白髪みたいに一本ずつ白くなるんじやなくて、頭全体から少しずつ色が抜けていくかんじ。だからわたしたちの髪は、今はもう、黒というよりは灰色だった。わたしたちの中では、特に僕の髪の毛が白くなっている。ときどきだるそうにしていることもあって、ちょっと心配だ。

点滴して薬飲んでも、やっぱり病状は進んでしまうんだなあ……、と分かつてしまつてちょっとブルー。だけど、病院がいいところだから、何となく救われているような気になれる。ああ、こんなにいい環境なのは、このためにあつたんだな、と理解してしまった。うまい話にはやっぱり裏がある。

……ひとりになると、そういうけれど沈んだ考えが浮かんできてしまう。だから誰かと一緒に散歩に行きたいなあと思うのだ。今度ちょっと、無理にでも誘おうかな。わたしのことは別としても、病院の庭がきれいなのは間違いないんだし。これ、体験しなきゃちよつと損だ。

外とは大違ひの、色とりどりの花畠。天然色の自然絨毯。そういうえば、なんで外にはきれいな花が生えないんだろう。ちょっと考えて、思い当たった。

黒雨のせいかな。

黒雨も、黒塵のせいらしい。塵が雨に混じつて降つてくるんだそうな。これが病気を引き起こすんだそうで、随分多くの被害者が出てらしく（そういうえば美加子もそんなことを言っていた）。

今は塵が薄くなつたから、それほど深刻ではなくなつたみたいだけど。

で、人間が病気になるなら、植物も病気になつたつておかしくはないんじゃないかなあと、そう思うわけなのだ。

もちろん、ここにだって黒雨は降る。だけどたぶん、誰かが頑張つて手入れなりしているんだと思う。広いので相当な労力がかかってそうだけど。

たぶん、わたしたちのために。

そんなことを思いつつ、ぼてぼてと歩いていると、ふいに田の前に高い壁が立ちふさがった。周囲は木々に囲まれて薄暗くなっている。いつのまにかずいぶんへんぴなところ、つまり、敷地の端まで来てしまったみたいだ。

壁は、殺風景だった。コンクリで出来た、見上げるくらい高い、垂直の壁。真下から見上げると空しか見えない。てっぺんには、侵入者防止用なんかでよく見かける有刺鉄線つきの返しがついていた。（ていうか……）なぜあれば、こちら側に反つてますか？ 普通逆じゃ。

なんだこれと思いつつも、わたしはすぐその場を後にした。ここはいまいち、好きになれない。壁の近くはあまり手入れがされてなくて、荒れた感じが寂しいのだ。暗いし。

「あれ？ 沙凪くんだ」

「あ」

壁の側、木々の暗がりから庭園のような病院敷地内に戻ると、ばつたりと歌撫さまその他の天使さまたちに出くわした。

「……そんなところで、何してるの？」

へんな目で見られてしまった。

「い、いや。ちょっとぼーっと歩いてたら突っ込んでつちやつたみたいで」

「うつかりさんだね、きみは」

「は、はあ」

「ちょっと恥ずかしい。

「歌撫さまは、今日も散歩ですか？」

このひとはよく散歩しているみたいで、病院内で知らないことはないと言われている……らしい。伊達に五年目、最年長天使さまをやつてるわけじゃないみたい。

「うん。今日天気いいし、みんなで外歩いりつてなってね。きみも来るかい？」

お誘いは嬉しかったけど、歌撫さま以外はろくな話したこともない先輩天使さまたちだったので、ちょっと氣後れした。

「ああ、一人で歩きたいなら無理しなくていいよ。気遣つと思つしね

心が読めるのかこのひとは。

「そういえば、あっちのほう、行つたことある?」

そうやつて歌撫さまが指す方向には、ちょっととした森みたいになつた場所があつた。

「いえ、まだです、たしか」

歌撫さまがにやりと笑つた。いたずら少年みたいな感じ。

「じゃ、森の中。ちょっと見てみるといいかもね」

「何かあるんですか?」

「それはきみ、行つてみてのお楽しみだよ」

「はあ」

どうせ田的で地なんかないし、行つてみるのはぜんぜん、やぶさか
じゃなかつた。

「じゃあ、またね」

行つてしまつた。

「さて」

じゃあ、行つてみようかな。

歌撫さまが指した森へ行く途中に、部室棟と呼ばれる建物の近くを通りた。中からはクラシックなアンサンブルの演奏する音だとか、人の声、多分演劇、なんかが聞こえてくる。いわゆる部活というやつが行われている棟なのだ。その方面的才ある天使さまたちが集まつて、こうして練習しては天使楽団とか天使劇団といつてチャリティ公演を行つていて。ちなみにわたしたち四人は、今のところ、誰も参加していない。

そんなどこか遠くて懐かしい音をBGMに、森の中に突入。落ち葉の積もつた柔らかな地面を、しゃくしゃく踏みしめて歩いていく。木は結構生えてるけど適度に間隔が空いていて、そんなに歩きづら

くはなかつた。

やがて、向こう側に、ちよつとした空き地が見えてくる。

森を抜けて、その先にあるものを見たわたしは、思わず足を止めた。

*

おあつらえ向きなことに、次の日は快晴だった。

「ね、みんな、外に散歩しに行かない？」

わたしはそう言ってみんなを誘つた。他でもない、昨日歌撫さまに言われ、わたしが森の中で見つけたあるものを、みんなにも見せたかったからだ。

「そうね」田羽は外に目を向けると、ぱたりと本を閉じた。「珍しい天気だし、こんな日くらいは外に出ようかしら」

「確かに、今日外を歩かないと損かもしないわね」僕も同意。

「あ、じゃあ、わたしも」奈緒も一緒に行くと言つてくれて、これで全員が揃つた。

わたしはなんだか、ほつとした。

そしてみんなと一緒に、昨日と同じ場所に立つたわたしの目の前には、大きな石造りの建物がそびえている。

一年の内でもいちばん日が長くなる季節、その昼間にだけ、たまに今日みたいな澄んだ青い空が見える。雲ひとつない青一色を背景に、周りを緑の木々に囲まれて、その建物は強烈な存在感でもつてわたしたちの前に佇んでいた。

見上げるほどに大きな四角い柱、その中央から少しだけ上寄りから、左右両側に向けて四角い梁が出っ張つている。

それは巨大な、十字架だった。

つまりそれは、天使たちの、墓地セメタリだつた。

長い間風雨に曝されたせいか、ところどころが黒ずんで汚れている。直視できない陽光が、その威容をはっきりと照らしている。

わたしたちの誰もが、口を開かなかつた。

たぶん、わたしたちの誰もが、厳肅な気持ちで、それを見上げていた。

「ね、これ見て」

わたしは十字架の根元に歩み寄ると、そこにある石板、すなわち墓碑銘を指し示してそう言つた。

みんながそれを見る。

そこにはこう書いてあつた。

+

黒き濁世にて、淨潔の御手、無垢なる翼以て
誇り高く、儻き命を全うした
白き癒し手達 此処に眠る。
汝等の御靈は黄昏から解き放たれ
永久の光の中に還るだろう

そして少し離れたところに、違った字体で、

救い在れかし

+

と書いてあつた。

「救い、あれかし……ね」

日羽がちいさく呟く。そのとき声を出したのは日羽だけだつた。だけどたぶん、心の中には、みんなそれぞれに思うところがあつた

んだと思う。

わたしの視線は、日羽とは違つところに向いていた。

傍き命。

わたしはまた、巨大な十字架、天使たちの墓標を見上げた。これは、わたしたちの未来の姿なのだ。しかも、そう遠くない未来の。

いま目の前に、厳然として在る、死。まわりの皆はわたしが天使さまになつたと知つて、元気に騒いでいた。ここに来て初めて見た天使さまたちは、みんな明るかつた。病院は楽園みたいに、いいところだった。だからわたしは、忘れていた。

天使病が、不治の死病だということを。

わたしはこれから、そう遠くないうちに、この大きなお墓の下に入る運命なのだ。わたしはその事実の存在感、あまりの大きさに圧倒されて、何だかとても、怖くなってしまった。

みんなは、どうなんだろう。

怖く、ないんだろうか？

儂と奈緒は、強い目つきで、巨大な墓標、死、を見据えている。まるで強大な敵に挑む戦士か勇者か、そんな雰囲気が滲んでいた。そう死とは敵なのだ。彼女たちはその手ごわい敵に対し、天使さまとして精一杯がんばる、そんな決意を武器として立ち向かおうとしている。この強い視線は、まさにその意志の表れなのだ。

ではわたしはどうだろう、わたしの武器は何？

分からぬ。わたしは天使さまになろうと授業を受けているけど、それはわたし自身が決めたというよりみんなに流されたからだ。わたしの意思是、この強大な敵に対抗するための武器とするには、あまりにも、頼りなかつた。

日羽はどうだろうと視線をやれば、この人はそもそも死が敵だとか、そういうのとは別のことを考えているようだつた。何やら疑わしげな様子で眉を顰め、墓碑銘を凝視している。その様子は、わたしや儂、奈緒とは異質な感じで、正直言つて何を考えているのか分

からない。

やがて、唐突に、田羽は踵を返した。

「……私は、部屋に戻るわ」

そう言つてさつと立ち去つてしまつ。

わたしたちは顔を見合させた。

「……ちょっとナーバスになつてゐるのかしら」と、僕が言つた。

確かにそうかもしけない。げんにわたしはナーバスになつてゐる。でも、ほんとうにそれだけなのかな、と思つ。妙な胸騒ぎがする。そのときはそれをきつかけとして、みんな部屋に戻つた。その日から、少しだけ、田羽の元気がなくなつた。

一週間が過ぎた。わたしたちが入院してから、だいたい一ヶ月が経過したことになる。

「うーん……」

この日、わたしたちは鏡の前に陣取つて、自分たちの姿をじっくりと眺めていた。

前髪をちょっとつまんで、よりわけ、一本一本丁寧にチェックしていく。儂と奈緒と、三人で並んで髪の毛を凝視。ちょっとおかしな光景かもしけない。日羽だけは興味がないのか、ベッドに腰掛けで黙々と読書している。

枝毛が気になるとかキューティクルのチェックだとか、そういうんじじゃない。

「やつぱり、もつ……」

「そうね……」

じっくり見続け、早や十五分。いい加減認めねばなるまい。

「もうすっかり、真っ白だ」

天使病第一段階、白化。

全身から色素が抜けて、髪は白く、肌も白く、血管とかが透けて見えるようになる症状。入院約一ヶ月目のこの日、わたしたちは、ついにその状態に達してしまったようだ。

「天使さまに向けて、大きな一步を踏み出しちゃつたってかんじ……」

「あとは羽根が生えれば、もうすっかり天使さまよね」

「み、見た目はね」中身に関してはまだまだ不安でいっぱいだ。

「早く天使さまになりたいわ。ね、奈緒」

「うん……」

病状の進行とほとんどイコールな、天使さま就任。その他諸々思つところを含めて、わたしとしては複雑な気分。

ちなみに、病状の進行はやっぱり僕が一番速い。最近は「こまめに髪の色をチェックしていたけど、わたしたちがまだ少し灰色だった頃には、すでに僕は真っ白になっていた。

そのことが、少し、気になつていて。

浅川せんせは白くなつたわたしたちを見ると、いつもの生き生きとした表情から一転、寂しげに微笑んで、

「もうすっかり白くなつちゃったわね……」

と呟いた。

でも、白くならなかつたら、というか病気が治れば、天使さまにはならないわけで。そうなるとせんせのしていることって無駄になるんじゃないだろうか。

そう言つてみると、

「もちろん、治つたほうがいいに決まつてるじゃない」「だそうだ。

「私のやつてることなんて、無駄になるのが一番なのよ。病気なん

か治るに越したことないわ」

自分のやつていることが無駄になるのが一番いいなんて、すごいことを言つひとじだ。

「じゃあなんでせんせはこの仕事してるんですか?」

すると浅川せんせは実にわざわざした表情で、

「だって、現実問題として、病気に罹つてしまつた子たちがいるわけじゃない。そういう子たちのためになりたいと思つてこの仕事をしているのよ、私は」

なるほど、無駄になるのが一番だけど、でも実際そうはならないからこの仕事をしている、というわけですか。

しかしやっぱりちゃんと考へているのだなあ。オトナつて実はす

「いんだろうか。

「年食つたら大人かつて言うと、それは違うわね。……」

その後にも何か続きそうな気がしたので黙っていたんだけど、話はそれで終わりのようだった。ちょっと不自然だつたなあ、と思つたけれどその理由は何となく分かる。

わたしたちは、大人になないので。

「まあ、みんなが立派な天使さまになれるよつ、私も頑張るからみんなも頑張れ」

せんせは笑顔でそう言った。決意の笑顔だ。ビュウやつたらこんな顔ができるんだろう。ちょっとまぶしい。

*

白化が完全に進行したことを受け、わたしたちの治療状況にすこし、変化が生じた。

薬の種類と数が増え、点滴の色が変わつて、回数が一日一回から一日に一度に減つた。そして手首のバンドが、淡い桃色から、ちょっときつい赤色に変わつた。

天使に一步近付いたねえ、とは歌撫さまの談。いつも気楽な顔をしているひとの真顔は、ちょっとこわい。

*

それから数日後のこと、散歩から戻ると、部屋には日羽が一人だつた。

「あれ、日羽一人？」

「ええ、と頷く日羽。

「奈緒と僕は、二人でお墓参りに行つてるわ

「へえ、そなんだ」

「あの一人、あれから結構連れ立つて墓地セメタリへ行つてるわよ

あれ、というのは初めて墓地に行つたときのことだ。

「そつか」

わたしはあのとき以来アンニユイな気分が抜けなかつたので、一人でいることが多くなつていて。だから、二人がそんなことをしているとは知らなかつた。

「あの二人は、天使さまにずいぶん思い入れがあるみたいだしね。」

「何となく寂しいものを感じつつ、わたしは咳く。」

「……そうね」

日羽もどことなく、元氣のない様子で返事する。相変わらずだ。みんなでいるときもぼうつとしていたり、何か考えごとをしているようだつた。わたしと同じく、みんなで墓地に行つて以来。あのときの日羽のおかしな様子が、ずっと気になつていて。

「つて、どうしたの、その包帯」

病衣の袖から覗く日羽の左腕、その手首辺りに包帯が巻かれていった。

「ああ、ちょっと切っちゃつて」

日羽は特に隠すでもなく、問題ないことを示すように左手を左右に振つた。

「大丈夫なの？」

「ええ、大丈夫よ。ここは病院だし」

微笑んで言うけど、いかにも頼りない様子。まさか自分で切つたとかじゃないよね、とかそんな心配までしてしまった。日羽の佇まいは力無い。顔色も悪く、白いを通り越して蒼かつた。やつぱり、心配だ。

今は部屋に一人だけだし、話を聞くにはちょうどいいかもしけない。

「ね、日羽」

「なに？」

「最近元気ないよね」

日羽、わずかに苦笑い。

「……やっぱり分かつちやう、わよね」

「まあね」

少しの間、沈黙。やっぱり、ちょっと緊張するなあ。でも、聞かないといけない。

「なんか、悩みもある?」

他人の領域に踏み込むのは、勇気が要る。できるだけ軽い調子に聞こえるように、でも軽くなりすぎないように、気を遣いすぎかなあとつてもそうせずにはいられない。

日羽はかなり長いあいだ、黙っていた。長いと感じただけだったかもしれないけど。

「……天使さまって」

果たして日羽の口からは、意外な言葉が飛び出してきた。日羽は天使さま関連の話題になると口数が減っていたので、てっきり興味ないものとばかり思っていたんだけど。

いつたいどう続くのか、と思っていたわたしは、次の言葉を聞いて更に驚く羽目になつた。

「みんな、驚くほど美形よね」

「はあ?」

すっとんきょうな声、を上げてしまつてから失礼だと思つて謝る。「「ごめん」でも日羽は気にしたふつもなく、といつか聞こえてもいなかつたようで、何事もなく次の言葉を口にした。

「なんでかしらね」

「なんで、つて。

「偶然?」

しかないんじやないかな。でもそれにしてはみんな美人すぎか。

「天使病は美人にしか発病しない?」

自分で言つておいて何だけど、苦しい。そんな病氣あるのか?

「確かに」意外にも日羽は同意した。「発病者が揃つて美形という病氣は、他にあるらしいわね」

美人病かあ。ロマンチックな病氣だ。いや、實際罹つてゐるひとか

らするとロマンディングじゃないだうけだし。

「わたしたちつて、みんな、ホームシックとは無縁だつたわよね」「え？」ずいぶん話が飛んだ。日羽らしくない。いつもは理路整然と話すのに。

「まあ、……そうだつたね」

わたしは入院初日の夜を思い出した。その後も、わたしたちの会話に家庭の話題が上つたことは一度もない。

「偶然かしら、ね」

「そりやあ……そうじやない？」

何かの原因で親がいない子どもは結構、いる。ここに来てから知つたことだけ、黒雨もその理由のひとつなのは間違ひ無さそうだ。ちなみにわたしが親を亡くしたのは、食糧配給問題に関わるテロに巻き込まれたからだ、と聞いている。物心つく前の話だから、実感がないけど。

黙る日羽。何が言いたいのか、全く分からなかつた。

「ええと、最近考えてたのつてそのこと？」

「じゃあ、」

む、むう、何なのだ。

「わたしたちの白化が、ほとんど同じ時期に始まつたのは、なんとかしら」

「それも……たまたま？」

言われてみると、随分「たまたま」が多いような気がした。

何となく、日羽が何を言いたいのか分かつた、ような。

「天使病が偶然じやない、って言いたい？」

いや、でもねえ……。

「変だと思わない？」

確かに言われてみれば、そんな気はするけど。でも、偶然じやないとしたら、どうこいつことだと思つの？

また黙る日羽。

わたしは、そんな日羽を見て、自分の言葉とは裏腹に、気味の悪いものを感じ始めた。

日羽はたぶん、とかきっと、とか、そういう曖昧な言葉をほとんど使わないのだ。憶測でものを語らない、といつぱり。いつだって彼女の言葉には、裏付けがあった。

今までは。

ならば、この話にも、日羽なりの根拠があるんじゃないかな。わたしに否定されたくらいでは揺るがない何かを、彼女は掴んでいるじゃないか。

そんなことを考えていたせいか、次の日羽の言葉は、わたしの中で殊更に強い印象を持つことになった。

「私たちの血、黒いと思わない？」

「まあ、……ね」

わたしたちは数日置きに採血を受けるので、自分の血は見慣れている。いや、奈緒はいつも血を採られるとき田を逸らしているから、全員がそうだというわけじゃないけれど。でもわたしは、見慣れている。

入院前、最後に自分の血を見たのはいつだったか。記憶にあるその色に比べれば、今の血の色は確かに黒ずんでいるような気はした。でもそれは、天使病だから。

「天使の体には、黒い血が流れている……か」

そう言って日羽は、薄く笑った。

「なんだかひどく、シニカルよね」

目が、笑つていなかつた。おそろしい笑みだつた。

病室の入口から、影が伸びた。

「奈緒」

奈緒が立っていた。わたしは何だか安心して、彼女の名を呼んだ。

「僕と一緒にやなかつたの？」

「う、うん。ちょっと外でスケッチしようかな、と思つて」

奈緒は入口に立つたままで言った。

「絵を描く道具を、取りに」

「外で絵かあ。いいなあ」

「今日も天気、いいものね」

田羽が言つ。もうすでに、おそろしい笑みはきれいにぱり消えなくなり、やわらかい雰囲気の声音に変わつていた。

「う、うん」

ようやく奈緒が部屋に入つてくる。それくさと画材をまとめ、「そ、それじや、また後でね」と、真っ白な髪を揺らして出て行った。しばらくの間の後、わたしは言つた。

「……聞こえてた、んだろうなあ」

「そうね」

「もしかして気付いてた?」

「いいえ」

田羽はゆっくりと首を振つた。奈緒にはあまり聞かせたくない話だった。

わたしの趣味は、相変わらず散歩だ。……ところが、じつとじじむさい感じがするけど。

年少病棟の側を歩いていると、中学生と思しき真っ白な子たちが何人か、授業を受けている風景が見えた。十人くらいの少人数がノートを取つたり船をこいだりしている。黒板に描かれている、複雑な形の図形。すこし前に習つたような覚えがある、どうやら数学の授業中らしい。

授業を受ける子たちの肩からは、すでに天使の羽根が生えている。普通に生活してれば高校生だったはずの天使病患者さんは、天使さまになると、終日自由時間ということになる。だけどこの子たちのように中学生以下だった場合は、義務教育が終わるまでは授業が続けられるのだ。

ちょっとかわいそ'う。

そう思いながらわたしは、その部屋の横を通り過ぎる。

病院の敷地内には、ところで、たくさんの建物がある。わたしたちが生活している病棟を初め、治療や検査を行うための医療棟、医者や看護師さんたちが住む職員寮、あとはわたしたちの生活を補助する部室棟だと図書館棟、さらには天使ヘリの管制棟、なんていふのもある。

いまわたしが中を覗いていた年少病棟というもの、これは読んで字の如く、まだ幼い　具体的には中学生以下の子たちのための、天使病棟だ。上は中学三年生から、下は幼稚園に上がるか上がるいかくらいまで……数は多くないけれど、それくらいのちいさな子どもたちの中にも、天使病が発症してしまったケースは存在しているのだ。

その中を覗きつつ歩いていたわたしは、ある部屋の横で足を止めた。中にはぱらぱらと、お布団を敷いて寝転がっている、ちいさい

子たちの姿。幼稚園児くらいこの子たちの部屋、今まだやや「お皿寝の時間」のようだ。

その中に、見知った姿があった。

奈緒がいる。

子どもを寝かしつけているようだつた。じきに背を向けていて、わたしが見ているには気が付いていない様子。
そういうば今までこの中入つたことなかつたな、と思つ出したわたしは、奈緒がいるところに行つてみることにした。

「あ、沙風ちゃん」

「や、奈緒」

お皿寝部屋なので、小声で挨拶。

「散歩してたら奈緒がいたから、来ちゃつた」

「そりなんだ。沙風ちゃんがここに来るのって珍しいな、って思つた」

そう言つてみると微笑む。

「実は初めて。奈緒はよく来てるの？」

「うん。年少組の子たちと、たまにあそんでるの」

「へえ……」

そこまで話したとき、奈緒が寝かしつけようとしていた女の子と目があつた。きょとんとした目付きでわたしを凝視している。もうすでに羽根まで生えてしまつた、四、五歳くらいのちいさな天使さまだ（見た目だけは）。

「はじめまして」

ひとつ笑つて挨拶してみる。

「……」

女の子、ほーっとわたしの顔を見てる。聞こえてないのかな……と、笑顔でありつつ不安になるわたし。

奈緒に助けを求めるようと思い始めた頃に、みづやへ口を開いてく

れた。

「お姉ちゃんも、あそんでくれるの?」

「う、うん」何して遊べばいいのかよくわからないけど。すると女の子はとっても嬉しそうな顔で、わらつた。

「じゃ、なおとかなと三人であそぼ!」

「だつ、だめだよ架那ちゃん。今はお昼寝の時間だから」

奈緒はちょっと慌てたようになつて、次にわたしを見て、「沙田ちゃんも……。今はお昼寝の時間だから、寝かしつけないとダメなんだ」

「あ、ああ、そうなんだ……」「めん」

普段と違つて、しつかりしたお姉さんみたいな雰囲気の奈緒だ。意外な一面。

「なあ……。やつぱりぜんぜん、ねむくないよ」

「だめよ架那ちゃん、ちゃんとお昼寝しないと」

えー、とかぶつたれながら、かなちゃんはわたしと奈緒の顔を見ていふ。そ、そんな縋るような目で見られても、困る。

「今おやすみしたら、晩ご飯がもつとおいしくなるよ。だからね、おやすみしよ?」

奈緒は辛抱強く、かなちゃんを寝かしつけようと頑張つてゐる。うーん、立派だ。

「な、なに? 沙田ちゃん」

その柔和ながらもしつかりとした横顔をじっと見てみると、奈緒は照れたような困ったような顔で、わたしを見た。

「いや、しつかり子どもの相手してると、すこいなあと思つて」

「そ、そんなことないよ、わたしなんか……」

「いやいや、立派だよ。わたしにはちょっと無理だなあ……」

「それは慣れれば……」

「なああ」

かなちゃんが奈緒の袖を引っ張つた。ずいぶん懐かれてるような気がする。

「やだー、なおとあそぶう」

今度はお布団の上でばたばたと暴れ出した。お転婆な子だ。

「だつ、だめだよ暴れちや。他の子が起きちゃうでしょ」

奈緒が慌ててかなちゃんを制止しようとした。

その拍子に、かなちゃんの病衣がめくれて、その下の素肌が見えた。

一瞬だけ。でも、はつきりと見えてしまった。

凍りつくわたし。奈緒は素早く乱れた病衣を正すと、すこし強い調子でかなちゃんを寝かしつけた。

奈緒の奮闘の甲斐あって、やがてかなちゃんも、安らかにおねむとなつた。

「……ね、奈緒」

奈緒も当然のよう、わたしが気付いた、とこいつことに気が付いていたようで、ビリが沈んだ雰囲気を漂わせつつ頷いた。

「……うん」

「わっきの、かなちゃんの、お腹……」

「……うん」

「あれつてさ……」

奈緒はゆるく首を振った。その先は言わないで、とこいつに。わたしだつてそんな言葉は口にしたくなかった。だから何も言わなかつた。

かなちゃんの病衣の下に見えたのは。

真っ白で、きれいなはずの、肌の上に散らばっていたのは。傷。青痣。火傷みたいな、引き攣れた皮膚。

お腹いっぱいに……。

口が、からからだつた。動悸がする。

奈緒がぽつりと、衝撃の事実を口にする。

「こいつ子、結構、たくさんいるんだ……」

「……本当に?」

思わずそんな言葉が口をついて出る。奈緒は頷く。顔がすこし、

蒼い。

「なんで？ まさか」「いや、……？」

「ううん、違うよ」

わたしは一瞬、天使病棟で酷いことが行われているのかと思つたけど、奈緒ははつきりと否定した。

「ここに来る前、家に居た頃のこと」

安心した。ここでそんなことが行われているなんてことになつたら、わたしはどうしていいか分からぬ。

「じゃ、とりあえずは大丈夫、か」

「うん」

それはそれとして、別の疑問が湧いてくる。

「結構いるって、世間ではそんなに……流行ってるの？ その……」虐待、という言葉を口にしたくなかったから、どうしても口^いもつてしまつ。荒んだ世の中だから、これさえも「よくある話」「なんだろうか。親がないのと同じよう」。でもわたし自身はそんな子を、一人も知らない。

「……分からない、けど」

「けど？」

それは奈緒の、不意打ちの告白。

ほとんど聞き取れない、か細くて消えてしまひそうな弱々しい声で、彼女は言った。

「わたしも、同じだった……よ」

「同じって……」

でも、奈緒の体に傷はない。一緒にお風呂に入っているから、それは確かだ。

「ご飯が、貰えなかつたの」

不意に、わたしは思い出した。

病院に来て初めてご飯を食べたとき、奈緒がとつぜん泣き出しことを。

「わたしの体、すごく痩せてるよね。お父さんが、ぜんぜんご飯く

れなかつたんだ……」

奈緒は、右手でかなちゃんの頭を、左手で自分のお腹をゆるゆると撫でながら、哀しそうに微笑みつつ、淡々と、喋っている。

「お腹空いたつていうと、怒るから……」

「奈緒」

たまらなくなつて、わたしは奈緒の話を遮つた。

「あ、ごめん……沙凪ちゃん」

「ううん。いいよ。……でも、わたし」何を言つていいか分からない。

「今は、大丈夫だよ。」飯はお腹一杯食べられるし、みんな優しいし……」

奈緒はちょっと涙ぐんでいた。

「それに、天使さまになれるから。だから大丈夫……」

天使さま。奈緒はずつと憧れていた、と言つていた。天使さまになる、ということに対して一番頑張っているのも奈緒だつた。

「……お腹が減つたとき、テレビをつけると、天使さまが映つてゐるの」

「……うん」

「天使さまは病気なのに、いっぱいの笑顔で、天使さまと話したひとも笑つてた」

「……うん」

「病氣でつらいはずなのに……死んじやうかもしないのに、どうしてこんなに笑えるのかなつて、思つてた」

「……うん」

「天使さまのお姿を見て、お腹減つたくらいでへこたれてちゃ、だめだなつて、そう思つてたの……」

「……うん」

「天使さまになれば、わたしも強くなれるかなつて、そう思つたから……」

「……そつか」

奈緒が天使さまに憧れる理由。一生懸命な理由。つらかったんだ
と、思つ。完全には理解できなければ、でも想像することくらいは
できる。奈緒はきっと、天使さまに自分の姿を重ねて、よひやく今
まで生きてきたんだ。

ちいさくてかわいらしい姿の中に詰まっている、酷い過去。
わたしはとつぜん、奈緒の頭を抱きしめたくなつた。
実際、その通りにした。

「さ、沙凪ちゃん？」

「……奈緒」

腕の中です」」し動く、あたたかい、奈緒の体。

「な、なに？」

「奈緒はきっと、いい天使さまになれるよ」

「……う、うん」

「だから、大丈夫」

「……沙凪ちゃんも」

「えっ？」とつぜん自分に話を振られて、わたしは大いに困惑つた。

「沙凪ちゃんも、一緒に……」

「わたしも？」

「沙凪ちゃんとか、優ちゃんとか、日羽りちゃんも一緒にじやなこと、
わたし……」

すこし、奈緒の体が震える。腕」」に伝わつてくる。

不安なんだ。

「わたしも……不安だよ」

天使さまになることも。病気のことも。

生きてる限り、不安だらけだ。

「でも、奈緒たちと一緒に、頑張ると思つ」

「……うん」

「一緒に」

みんなと一緒になら、不安だけど、何とか、やつていける。

「……何してるの？　あなたたち」

「わっ」

びっくりして奈緒から離れた。

声のしたほうを見ると、怪訝そうな顔付きでわたしたちを見ている、知らない大人のひとが一人。

恥ずかしいところを見られてしまつた。顔が赤くなつてるのが分かる。あ、奈緒も真つ赤だ……天使さまに近付いて肌が真つ白になつてるので、ものすごく、目立つ。天使さまになるのもいいことばっかりじゃない。

ところで、この人は誰？

「せ、先生、ごめんなさい」

奈緒が謝る。せんせか。

「いえ、いいけれど……子どもたちはみんな、寝た？」

「はい」

奈緒がそう答えると、せんせらしき大人のひとは、こつこつと笑つた。

「そう、ありがとうね。いつも助かるわ
どうやら保母さんらしい。奈緒はよく来てるせいか、すでに顔なじみになつてる様子。

「そつちの子は？」

保母さんはわたしを見てゐる。そういうえば、勝手に入ってきたんだつた。

「あ、名霧沙凪つていります。『ごめんなさい』、奈緒がいるの見て、つい

「ああ、今年來た子ね。あなたも手伝ってくれたの？」

「は、はあ」そういうつもりでもなかつたけど、はつきり否認するのも何なので、曖昧な返事になつてしまつた。

「ありがとうね。あなたたちが来てくれると、子どもたちも喜ぶのよ

保母さんの笑顔がわたしにも向けられる。

それを見た瞬間、わたしの胸が、ひとつずくらんと波打った。不思議な気持ちが、じわりと広がる。欲求のような、曖昧な何か。

「子どもたちと遊んであげるくらいなら、こいつ来てもいいから。またお願いするわ」

保母さんは子どもたちがみんなすやすやと寝ているのを確認すると、どこかに行ってしまった。

「天使さまも、ここに来てるの?」

わたしは奈緒にそう聞いた。さつき保母さんが「あなたたち」と言つてた意味は、そういうことなんだろうと思つたから。

「うん、ときどき来てるよ」

「そつか

子どもたちの相手をする」と。そして、保母さんに感謝されたりすること。

「ね、奈緒」

「なに?」

「天使さまのお仕事つてさ、こんな感じなのかな?」

「うん……よく分からぬいけど、多分そうなんじゃないかな……」

天使さまは、お仕事で、児童養護施設に行つたりもするらしい。さつきみたいに子どもを寝かしつけたり、一緒になつて遊んだり。

「そつか……」

不思議な気持ち。保母さんの笑顔、子どもたちが喜ぶという言葉。今日わたしは、ただ奈緒がいたからと理由でここに来て、結局何もできなかつた。だから保母さんの笑顔、感謝の気持ちは、わたしには受け取れない。

だから……と、少しだけ、思つ。

その気持ちを受け取れたら、満たされた気持ちに……わたしも、嬉しくなれるのかもしないな、と。

こういつ気持ちのやり取りが、天使さまであるといふことなのか も、しれない。

またここに来てみようかな、と思つた。今度はちゃんと話を聞い

ておもなことは

完全に白くなつてから「ひつか、ひづも体がだるい。といつても、のたうち回るほどでもないけど。夜になると特に痛むので、ちゅうと寝苦しいのが一番の悩みことだ。

わたしだけじゃない。みんな同じ。

これに伴う変化としては、授業が一時的にお休みになつたことがある。確かにだるくって授業どころじゃないから、素直に嬉しい。

「大丈夫かね、きみたち」

ふつうの病人（おかしな言い方だ）みたいにベッドの住人と化したわたしたちの元に、歌撫さまがお見舞いに来てくれた。

「それなりです……」

「それなりか。まあ、誰もが経験する道のりだよ。そのうち楽になるから、今はひたすら我慢だね」

天使病第一段階、生翼。

肩の辺りから小さな羽根、正式名称で言つといふの「翼状畸形」が生えてくる症状。

これが完了するまでしばらくの間、今わたしたちが感じてるつな、鈍い痛みが続くんだそうだ。今からちょっと不安。

「もうすぐみたちも、ぼくらの仲間入りだね」

どこから取り出したのか、ポッキーをもふもふしながら歌撫さまはそう呟いた。

「羽根が生えたら、もつ身体的には天使さまと同じですね」

儂の言葉で、その事実を意識する。どんどん近付いてくる、天使さまのとき。容赦なく迫つてくる、その刻限。

「そうだね。きみたちとお仕事する日も近い」

なんだか、余り面白くなさそうな声。

「歓迎するよ。本当は歓迎したくないんだけど」

歌撫さまは、歯に衣着せない。その真っ白な歯はまさしく全裸、素つ裸だ。ちなみに今のは、「お仕事一緒にやるのは大歓迎だけど、天使病が進行するのは『冗談じゃない』という意味だ、多分。」の方の言葉を完全に理解するには、すこし慣れが必要る。

無垢なる御歯をお持ちの歌撫さまは、奈緒のベッドに腰かけると、やおら奈緒の頭を抱え込むように撫で回し始めた。奈緒はくすぐったそうでどこか困ったような、あるいは照れたような複雑な表情でされるがまま。

「ぐるぐるうにひにー」歌撫さまはときどき得体の知れないことを言つた。

「通りいじり回された後、奈緒はぽつりと言つた。
「……ひややく《早く》く天使さまになりたいです」台詞かんだのは回されすぎた後遺症に違いない。

「だとすれば」歌撫さまは異様に満足げだ。「もう少しの辛抱、だね。羽根が生えたなら、残りは最後の締め……誓約の儀式をするだけだよ

「誓約の儀式?」

何だか宗教ちっくな響きだ。

「そう、誓約の儀式」

歌撫さまは何だか楽しげに口元を緩めて、そう繰り返した。

「あれはなかなか、いいイベントだと思つよ。楽しみにしてるといさ」

わたしと僕と奈緒は、三人して顔を見合せた。何だろ。ちなみに日羽は、本から顔を上げていなかつた。

「でも、不思議ね」

ちいさくあくびしながら僕が言つた。

「何が?」

「うん、もうちょっと早く外に出してもうえても、いいと思うんだけれど……なんだか姿が天使さまになるのを待つてみたいで」

「ふむう……」言われてみれば、そうかも。授業とかスケジュール

すかすかだしね。

これに対しても歌撫さま曰く、

「生翼が終わるまではあんまり体調が安定しないからね。病院側としてもやつぱり、そんな状態の患者を外に出すわけにはいかないんでしようよ」

「なるほど」

「……とこりもあるけど、僕くんの意見も実は結構、的を射てる」「え？」

「天使の姿になるのを待つてるって話ね。ほら、ぼくたちの人気つて、見た目に支えられてるところ、かなりあると思うし」

「こまではつきりと、自分の容姿を誇るとは。本当に遠慮のない人だ。

「そもそも病人のぼくたちが外に出られるようになつてることの制度自体、なんか変だもんね。そこは浅川先生とかが頑張ったみたいだけど」

「へえ、そうなんですか」

浅川せんせつて色々やつてるなあ、本当。

「十年くらい前、当寮母として着任直後だった浅川先生と、何人かの患者が協力して病院側を説得、この制度を作り上げたって話。まあぼくは直接その現場を見たわけじゃないから詳しくは知らないんだけど、説得材料の中には天使の見た目も入つてたって噂。……まあその真偽はともかく、現状、この見た目が天使の存在を支えるのは間違いないね」

「なるほどなあ。

「ドラマですねえ……」

「何だか遠い世界の話みたいだ。

「そりや、ドラマチックですよ
歌撫さまは大げさに頷いた。

「誓約の儀式もそのときからだね。あれはすこしう、ドラマチックでロマンチックですよ。ぼくたちは偉大な先輩を称えなければなら

ないね

ドラマでロマンですか……。何だかよく分からなければ、ひそかに

だ。

「まあ、楽しみにしていたまえよ」と、歌撫さまは悪戯つ子の笑顔で言った。

*

それから一ヶ月近くの間、段々と強まる倦怠感と、肩の疼痛にわたしたちはひたすら耐えた。

一日の間でも痛みがピークに達する夜中、背中が痛くて眠れず、うめきながら朝を迎えたこともあった。

あるとき僕が言い出して、わたしたち四人のベッドをくつつけた。背中が痛いときは手を取り合って、耐えよう。

繋がる手と手、痛みがそこを伝つて、どこかに溶けて消えていくような気がした。

あたたかくて柔らかい手を通して、安らぎに満たされるような気がした。

そうやってわたしたちは、四人でつらい時期を乗り越えた。

*

「天使さまに、なっちゃったね。わたしたち」

白い髪。白い肌。そして肩からちいさな羽根が生えて。

専用の服 「天使服」^{エンジェルガーブ}という、背中に羽根を通すための穴

が開いた天使さま用の制服、というか病衣を着て。手首のバンドが、白に変わつて。

わたしたち四人は、もうすっかり、天使さまの出で立ちになつた。さて、わたしたちの中では奈緒がいちばん、天使さまになること待ち望んでいたわけなので。

「うふふ」

今いちばん様子がおかしいのも、当然、奈緒なのだった。

「もう、一時間くらい経たない……？」

「え、ええ……」

「よっぽど嬉しいのね……」

鏡の前でくるくる回り続ける奈緒を遠巻きに眺め、僕は心配そうに、日羽は呆れた様子で、言葉を交わす。奈緒は自分の姿を確認するのに忙しい。頬は緩みっぱなしで、えへへとかうふふとか奇声を発しつつ自分の顔をぺたぺた触つたり、髪を撫でたり、羽根を引っ張つたり。最初は微笑ましかったけど、さすがに一時間も経つとそろそろ止めるべきかという気になつてくる。

わたしはふと、自分の肩から生えてきた新しい自分、「天使の羽根」に触れてみる。

感覚は、薄い。耳たぶみたいにわずかな感触があるだけだ。それはやわらかくて、ふさふさした白い羽毛に包まれていて、まるで本物の羽根みたい。

羽根にもそれなりに個性があるようで、例えばわたしの羽根よりも日羽のほうがすこし大きいし、僕のはさらさらした感じだけどわたしのはちょっとぼさぼさだ。髪質ならぬ羽根質ともいうんだろうか。

わざわざお手入れすべきかどうかは、悩みどころだけど。

「あ、ちょっと動く」頑張ると羽根が動かせた。

「あら、本当」

僕もぴこぴこ羽根を動かしてみてる。あ、わたしより大きく動いてる。

「僕、かわいい」

一生懸命はばたく小鳥みたい。

そうやってひとしきり遊んだ後。

「いよいよ天使さまとして外に出る時間が、近付いてきたわね

「うん」

僕の言葉に、奈緒が嬉しそうな声で振り向いた。いつもはもっと控えめなのに。今日は本当にご機嫌だ。

「ようやく、ね……」

僕は感慨深げな様子で呟く。

わたしはわたしで、天使さまをやるとこ「」に對して少しづつポジティブな気持ちになれていたので、前ほど一人のやりとりに距離を感じることはない。

でもわたしは二人と違つて、手放しでは喜べない。

体の様子が変化したという事実が示す別の側面、すなわち、天使病が進行しているということ。それを思ひと、わたしはどうしても気分が沈んでしまうのだ。

肌の白さ、肩の羽根は、消えゆくいのちを表しているよひで。

しかもそれは、……偶然じやないかも、しれないわけで。

そう、あの日の日羽の言葉が、わたしの中にはずっと、消えない棘として残つている。

天使病は偶然じやないかもしれないという話。

その話をした人、日野日羽は、相変わらずどこか冴えない表情で日々を過ごしている。表面的にはふつうに話しているし、何も問題なく生活してるんだけど、あの話を聞いてしまったわたしとしては、どこか引っかかるような気持ちが抜けきらない。

このひとは天使さまをやることについて、どう思つているのか。

とりあえず、外に出ていく氣はあるみたいだけど……。

ともかく、そんな心配事未満の引っかかりのせいでの、わたしは僕や奈緒みたいにはしゃぎ切れないのだった。

「でもやっぱり、不安だなあ……」

ようやく鏡の前から離れた奈緒がふと、小さな声で呟いた。たつた今考えていたこととおかしな具合にシンクロしてしまい、どきつとしたけど、奈緒が言つてるのはもちろんそういう意味じやない。

「大丈夫よ。奈緒は一生懸命だから」

僕がやさしく笑つてフオローする。

「一生懸命さは相手にちゃんと伝わるものよ。こんなことをして、みんなに元気を出してもらひのが天使さまのお仕事なんだから、一生懸命さつて一番大事なことなんじゃないかしら」

「そうかなあ……」

そう言いつつもちよつと安心したような表情の奈緒。なごやかなやりとりだ。

……それはいいけど、一生懸命とか言われると、今度はわたしが不安になるなあ。

「ふふ、沙凪は大丈夫よ。相手の気持ちが分かるひとだもの」

「僕はそう言うけれど、わたしにはいまひとつ自覚がない。

「私もそう思うわ。沙凪とはとても話しやすいのよね」

日羽がそんなふうに思つてたなんて初耳だ。

「無意識の中にフォローしているというか。空気が読めるっていうのかしら？　いい意味で気を遣えるひとよね」

僕の言葉に深く頷く日羽。

「沙凪ちゃんはすごいと思うよ……」

奈緒まで。ちょっと、やめてください、くすぐったいですから。

「僕こそ、天使さまに向いてるつて。やわらかい雰囲気でどんな機嫌の悪い人も一瞬で天にも昇る気持ちになるよ」

なんだこの褒め合戦。

「そうかしら」僕は気弱そうに微笑んで、「天使さまになつてひとのためになれるのは嬉しいんだけど、うまくできるかどうかはそれとは別問題だから……」

「大丈夫だつて。わたしが保証するよ」

僕に話しかけられて嫌な気分になる人なんかそういうないだろう。

う。

「自分で言つたじやない、一生懸命が大事だつて。ひとのためになれるのが嬉しいって思うなら、その辺りはオーケーなんじゃない？」

「そうね」

僕はちょっとだけ、元気の出た顔で笑つた。

そして順調に、わたしたちの症状安定化宣言がなされ。

「みんな、今までお疲れ様。これで全課程修了よ」

点滴スタンドの消えた教室に、浅川せんせの声がこだまして。ついに、わたしたちが天使さまになる準備が、整ったというわけだ。

「あなたたちは、立派な天使さまになれると思う。自信を持つて外出で行きなさい」

せんせが力強い笑みで激励してくれる。いついうときには定番の台詞なんだけれど、やっぱり定番になるにはそれなりの理由があるんだなと思った。

何とかなるような気持ちに、少しだけなれた気がしたから。

……言つ人や状況によつても、変わるものかもしれないけど。

「まあ、まだ最後のしめがあるから。それとも最初のしめと言つべきかしら?」

「宣誓の儀式……ですよね」という夢の言葉に、頷くせんせ。

歌撫さまが言つていた、宣誓の儀式。要するに、天使さまの入学式（学じやないと思うけど）のようなものなんだろう。詳細不明。特に予行演習なんかはないらしい。

「そう。それを以つてあなたたちは正式に天使になり、外へ出て社会貢献するようになる」

場の雰囲気がぴしつと張り詰めたような気がした。

「明後日やるわよ。楽しみにね」

その日の晩から次の日一日は、その話題で持ちきりだ。

「結局何するんだろうねえ、宣誓の儀式って」

「予行演習がないことだし、そう複雑なことはしないんでしようね

日羽はいつも通り、落ち着いている。

「で、ひ、でも、あ、繩張するなあ……」

対して、どう見ても緊張しそうな奈緒。いや、気持ちは分かるんだけれど、前つ日本へはいったことはないから、何がどうなるか。

「私たちの記念すべき第一歩ね」

そう言つて笑う僕は、適度な緊張感を持つてゐるかんじ。

僕自身は楽しそうだつたけど、それを聞いた奈緒は更にがちがちになつてしまつた。記念すべき、という辺りが緊張を催す、のかなあ。

「みんな無事に天使さまになれて、良かつたわよね」

傳と奈緒は和やかに話しているが、わたしと、あとたぶん口羽にも、何か違った意味に聞こえてしまった。

確かに無事は無事なんだけれど

儀式前日の夜は、何だか寝付けなかつた。わたしがベッドを抜け出してベランダで一人、ぼうつと真つ黒な夜空を眺めていると、誰かが隣にやってきた。

「眠れない？」

僕だつた

何だか、ね

外に寒いので

奈緒は緊張しそうじゃないかしら？」
疲れて眠つたみたい

ふふ、と優しく笑う。

「日羽は逆に、緊張とは無縁かしらね。いつも通りとこり感じ」
「そひだねえ」

心配してしまひ。

「よつやく、天使さまになるのよね、私たち」

「うん」

「待ち遠しかつたな……」
わたしはおや、と思った。ちょっとニコアンスが、いつもと違つ
ように思えたのだ。なんだかもつと前、天使病に罹る前から、ずつ
とそう思つていた、みたいな。

「うん。……私、ずっと『何か』になりたいなって、思つてたの」
何かに、なりたい。

何となく、分かるような気がした。それはたぶん、何のために生
きるのか、とかそういうことなんだろう。

「前にも言つたと思うんだけれど、私、ずっと入院してたの」

「うん」

重い症状ではなかつたけれど、病院から離れられるわけでもなか
つた、という話。

「ただ単に入院してるだけって、ほんとうに退屈なのよ」寂しげに
笑う。「ここは違つたけれどね。授業とかがあつて、それが未来に
繋がつていると思えたから」

わたしは小さく、本当に小さく溜息をついた。僕は、気付かなか
つたと思う。

未来に繋がつている、という言葉。どうなんだろう。

天使さまたちの墓地セメタリを思い出す。わたしたちの、未来の姿。

「あの頃の私は、何のために生きているんだろう、って思つてた。
他の子たちは学校に行つて授業を受けている。その先で社会に出て、
誰かのために、働く。でも病院で何もせず、ただ治療だけ受けてい
る私は」

僕の声が、少しずつ硬くなってきたような気がする。

「私はただ、他のひとに迷惑をかけて生きているだけなんじゃない
か、つて、そう思つてた」

「僕」

その様子があまりに寂しそうなので、思わず名を呼んだわたしに、
僕は「めんねと笑つて続けた。

「だから天使病だつて言われたときは、嬉しかつたわ。天使さまになれる、そうすればみんなのために生きていく。ずっと何の役にも立たなかつた私に、居場所ができる」

居場所。でも、それは……。

「天使病は」

きゅうに背後から声が聞こえて、わたしたちはびっくりして振り返つた。

日羽がいた。

「日羽……起きてたんだ」

おどかさないでよ、と続けようとしたわたしは、しかし、その声を飲み込んだ。

日羽はずいぶん怖い顔で、僕を見詰めていた。

「天使病は、ただの病気。だから天使になるのは、自分の力で切り開いたわけじやない、ただの結果論」

まるで責めるような硬い声で、日羽は囁く。

「僕は、そんな風にして得られた居場所でも、構わないというの?」止めるべきか、と思つた。日羽が何故そんなことを聞くのか、わたしには分かる。分かるけれど、これは、僕には余りにもつらい問いかけのはずだ。

そんな、わたしの想いに反して。

僕は、ふわりと笑つて、それに答えた。

「偶然でも、構わないわ」

きつぱりとした声だった。

「要するに、私が誰かのために何かができる、という事実があればいいの。私にとつては、天使病に罹つたというのは、幸運なことだつたの。私はその幸運を、めいっぱい活かすつもりよ」

わたしは僕の言葉に、愕然とした。

天使病に罹つたという、幸運……。

……何てことを言うんだろう。

「……そう

日羽の顔は、相変わらず険しかつた。だけど声からは、厳しさが抜けている。肯定でもない、納得でもない、それはまるで、諦めみたいな聲音だつた。

「儂の気持ちは、分かつたわ……あなたは、強いのね」

「……ありがとう。日羽」

日羽は背を向けた。なんだかその背が、ちいさくみえた。
「邪魔したわ。明日、儀式でみつともない姿をむらむらじ
なきやね」

日羽はおやすみ、といつて病室に戻つていった。

「私たちも、そろそろ寝なきや」

「あ、うん」

儂は長い髪、細い手足を軽やかに揺らして、日羽に続き病室に戻つて行つた。

わたしは少しだけその場に止まって、真つ暗な空を一瞥した。

「……原因はどうあれ、か」

儂はすごいな、と思った。彼女は見つけたのだ、自分なりの答えを。迷いない眼で自分と、自分の行く先を見詰めている。
つらやましいなあと思つ。わたしにもいつか、自分の答えを見つ
けられるだろうか。

*

宣誓の儀式

出席者はわたしたちと、浅川せんせと、現役天使さまたち。

会場は墓地セメタリ、の中。巨大な石の十字架の中にある、教会のような雰囲気の小部屋だった。墓地に扉があるのは知つてたけど、施錠されてたから入つたことはなかつた。

中央に通路、両脇に十列ほどの長椅子が並んでいる。いちばん奥は壇になつており、壁のくぼみには、純白の天使像が収められてい
た。

室内の灯りは蠟燭の炎だけで、薄暗いけれども厳肅、かつ幻想的な雰囲気になっている。お香が焚かれているらしく、不思議な香りが満ちていた。

わたしたち四人は、最後列にちょこんと座っている。前のほうには現役天使さまたちの列。一番前に歌撫さまがいるのが見えた。そして壇には普段のジャージっぽい姿ではなく、黒を基調とした礼服に身を包んだ、浅川せんせの姿があった。

喋るひとは、誰もいなかつた。

静謐な空気が、揺らめく炎に照らされている。

「では、今期の誓約の儀式を始めます」

浅川せんせが静かにそう告げると、ぞ、と前列の天使さまたちが一斉に立ち上がった。わたしたちも慌てて立ち上がる。そうする間に天使さまたちは皆、中央の通路のほうに向き直っていた。

「白河 僧」

「……はい」

まず初めに名を呼ばれた僧が、ゆっくりと天使さまたちの間を通り、壇に向かう。天使さまたちの視線はさまでまだつたけど、だいたいは優しげな表情で、歩む僧を眺めていた。

僧がシスターのような雰囲気を纏つた浅川せんせの前まで辿り着く。

せんせは、誓句を詠み始めた。

白河 僧よ。

汝は常に誇り高く、

また死されることなき慈愛を以つて、

この黒き濁世に於いて

清潔の御手と無垢なる翼持つ

白き癒し手となり

「僕を命を全うすることを誓つたか？」

「いつか、どこかで聞いた　いや、見た言葉。

それは天使さまたちの墓碑銘と対になつた、誓いの言葉だつた。わざかだけど長い沈黙の後、

「誓います」

と、僕は静かに、力強く、応えた。

浅川せんせはそれに頷きで返答すると、
「では、頭を下げて」

と言つた。

僕が言われた通りに、少し頭を下げるとき、せんせ自身の手によつて、そこに白い花で作られた冠が載せられた。白い花の、天使の輪だ。

「これであなたは正式に、天使として認められました。今の気持ちを忘れず、尽くしなさい」

「……はい」

僕は一いち方に背を向けているので表情は分からなかつたが、想像はできた。声が少し、震えていたから。

今、また一人新しく、純白の天使さまが誕生したのだ。

果たして戻ってきた僕は、目を赤くしながらも薄く微笑んでいた。わたしは自分の番がまだだとうのに、もらい泣きしそうになつてしまつた。

「名霧沙凪」

「は、はいっ」

わたしは反射的に答えると、慌ててせんせの元へ向かつた。天使さまたちの間を通るときはものすごく緊張した。壇の直前で歌撫さんが笑いながら「もうちょっと落ち着きなよ」、壇に辿り着くとせんせがやつぱり少し苦笑いで「大丈夫よ、リラックスして」と小声

で言つてくれた。そうして儂のときと同じ誓句を詠み上げた。

わたしはできるだけの気持ちを込めて、

「誓います」

と言ふ、言われるがままに頭を下げ、花の冠を載せてもらつた。緊張で頭が真っ白になつてしまつた。顔が赤くなつてゐるのがはつきり分かつてしまい、そのせいで更に恥ずかしくなる。悪循環。まうまうの態で元の場所に戻つたわたしは、すぐに椅子に座りたくなつたけど、みんなが立つてゐるのに一人だけ座るわけにもいかない。

「立派だったわよ」

と、一足先にやることを済ませて余裕の儂から声をかけてもらい、よつやく落ち着いた。ああ、終わつたんだな。

わたしが後遺症に四苦八苦している間に、日羽は立派に役目を終えた。日野日羽はソツのない女だ。

そして最後に、奈緒が呼ばれる。

彼女はゆつくりと、本当にゆつくりと壇に歩み寄つた。

そして問われる。誓うか？　と。

少しの間があつた。

後ろから見る奈緒の顔は、しつかりと、前を向いている。

「誓います」

清冽な鈴の音のような、凛と響く誓約だつた。あの奈緒が。ずっとおどおどしていた奈緒が、誰よりも立派に、誓いを約してゐる。最初はおどおどしてて、頼りなさそうな子だなと思つていた。だけどいちばん天使さまに憧れていたのは、奈緒だつた。

そしていちばん努力していたのも、奈緒だつた。

天使さまをやるということに対し、わたしたちの中でいちばん真摯に向き合つていたのは、このちいさな女の子、穂ノ村奈緒だつたと思つ。

白い冠を載せられた奈緒が、こちらを向いた。

真つ直ぐな目。

そこには確かに、一人の立派な、天使さまの姿があつた。

そして厳かに告げられる、儀式の終わり。

わたしたち四人は、こうして、天使さまになつた。

天使さまになつたら、その次に待ち受けているのは何かといふと、お仕事だ。

「さうわけで、今日はわたしたち新天使さま（自分のことなのに「さま」をつけるのもどうかと思うけど）の初陣。とある児童養護施設を訪問し、子どもたちのお相手をするということだ。

新天使さまの初仕事ということで、テレビの取材なんかも来るつて話。ただでさえ緊張してゐるのに、正直ちょっと勘弁してください……という感じだ。といつてもどうしようもないんだけれど。

さて、どうやつて移動するかというと、基本はヘリである。わたしたちが初めて天使病棟に来たときに乗つてきたヘリ。あれがまさしく、天使さまの移動のために使われている。すなわち、空を飛ぶための天使の翼（ただし鋼鉄製）というわけだ。

ヘリ内部は、狭い。パイロット席を除けば、わたしたち四人プラス一人でもう一杯だつた。

「ううー緊張しますよせんせー」

「天使は度胸だよ、名霧」

「慈愛じやないんですか？」

「慈愛と度胸」

「要求厳しくないですか？」

「そんなことないわよ、みんなできてるんだし。実戦で勘を掴みなさい」

なんだかこのひと、とつぜん放任主義になつたな。

ちなみにヘリ内部での会話だ。パイロットは、何を隠そう、浅川瞳先生その人である。パイロットまでこなすとは、この人一体何者だ。

「かつ、歌撫さまも最初はこんな気持ちだつたんですね？」

ただ一人の「わたしたち四人以外」である歌撫さまは、流石に慣

れきつた様子で、というより座席にだらーと座つて……ずり落ちてう……リラックスし過ぎだこのひと。

「え？ うん」なんか眠そうだし……。「大丈夫、すぐ慣れるよ。それより何事も初めては特別、貴重なオンリー・ワンだから大事にしないと、ダメだよ」

ふわああああとか大あぐびしながらそんなこと言われても。にしても、会話ができるわたしさまだ良いほうかも知れない。奈緒に至つては顔色がちょっと悪いくらいだし……。

「奈緒、大丈夫……？」

「う、うん」

「緊張するよね」

「う、うん」

「でも奈緒は子どもの扱いは慣れてるから平氣かな？」

「う、うん」

「……やつぱり、ダメ？」

「う、うん」

「……テンパつてゐる……。

「……儂、何やつてるの？」

「このひとはさつきから、ヘリ内部にぶらさがつてゐる医療器具っぽいのをいじつては戻しを繰り返してゐる。

「ええ、ちょっとと落ち着かなくて……」

「そうだよね」

「この医療器具みたいなのがて役に立たないのかしら……」

「いえ、緊張をほぐす役には立たないと思いますよ……。

「精神安定剤とか、ないのかしら……」

「薬に頼ろうとした！」

「田羽、何とか言つてやつてよ」

さつきから一言も発さず、窓からぼーっと外を眺めている田野田羽に助けを求める。

「……本を持つてくれれば良かつたわ」

聞いてないし。

「あー、大混乱だね。ぼくらのときも似たようなものだつたな」
そんなわたしたちの様子を面白がるよつて、にやにや笑いの歌撫
さまが口を出してきた。ただ、田は、どこか遠くを見るよつて……
懐かしげに、細められている。

「歌撫さまのときはどうしたんですか？」

「ん？ 案するより、産むが易し」

「この状況じや何の役にも立ちませんよそれ」

「じゃあ、塞翁が馬」

「わたしは安定志向です」

「窮鼠猫を噛む」

「あなたを噛みますよ」

「ぼくは沙凪くんになら、噛まれてもいいよ……？」

「ひい」不気味にくねくねしながら近寄らないでください！

「ふふん」

なぜか勝ち誇った笑みを浮かべると、歌撫さまは黙つてしまつた。
誰も助けてくれない。

へりは、一旦どこかの学校の校庭らしきところに着陸した。目的地には停まるだけのスペースがないらしい。そこからはマイクロバスで移動。そのバスも真っ白だったけど、偶然なのかどうかは分からぬ。

目的地に着くとすでに子どもたちは準備万端スタンバイオッケー
だつたようだ。

「天使さまだ
！」

今まさにバスから降りようとしていた奈緒が、驚いてずり落ちそうになるくらい凄まじい音圧のお出迎え。子どもたちの怒涛が押し寄せ一瞬で包囲。手を掴まれて引きずり込まれた。

「ねーねー天使さまー」「はねさわっていーい？」「まつしろだー！」

「きれー」

ええともっと穏やかで和やかなお遊び風景を想像してたんですね
どっ！ とんでもなくパワー溢れる子どもたちだ。これって普通？
わたしたちが天使まだから？ ていうか段取りとかないのつ？
てつ、天使さまは慈愛と度胸！ 気合を入れて子どもたちの話を
聞き微笑み返し手を握つて頭を撫でる。入れ代わり立ち代わり現れ
る大勢の子どもたち。ここには戦場かつー？

ちらと周りを見れば、優と奈緒はさっきまでの慌てぶりが嘘みたいに落ち着いた様子で、子どもたちの相手をしている、というか彼女たちのところにいる子どもたちは、どうしてあんなに静かなんですか？

冷静な女、日野日羽は今日も慌てず騒がず、柔軟な微笑みを浮かべて子どもたちに抱きつかれたりしてゐる。

歌撫さまは流石に慣れたもので、一瞬前まであんなに眠そうだったにもうめちゃくちゃしゃつきりしてゐる。主に男の子の相手をしてるみたいだけど、それは子どもたちが歌撫さまの少年みたいな雰囲気に敏感なのか、何なのか。

つて、困つてそつなのわたしだけか。

うわつあれつてテレビカメラ？ 初めて見た。でかいなあ。といふかわたしたちテレビに映つてるのか。そうだよねそつ言つてたもんね……。

「うわあこのはねあつたかい……」

一人くらいの女の子がさわさわとわたしの羽根を撫でてゐる。ちよつとくすぐつたい。

「ね、なんで天使さまにははねがはえてるの？」

「なんでかみの毛、しろいの？」

純粋な瞳をきらきらさせて、無邪気な質問をしてくれる子どもたち。

ち。

ええと病氣だからです。
なんて言えるわけない。

「え、えーとね……」

何かいい答えはないと脳内検索。

「天使さまの体はね、お砂糖でできてるの。だから白いんだよ
子どもたちはお口半開きで、わたしの言葉を聞いている。

「……ちなみに、黒蜜入り」

何も言わない子どもたち。

外したかなあ……ていうかわたしは何を。

「……うわあ……」

子どもたちの一人がちいさく声をあげる。そつちを見る。
一人の女の子がいて、

めちゃくちゃ目が輝いていた。

「すゞーい、天使さまのからだつてお砂糖でできてるんだー！」
予想外の大ヒット！？

「うわあー」

「あまいの？」

「たべてもいい？」

子どもたちがものすゞい勢いで迫ってきた。ペたペたと。ペたペ
たと。ペたペたと。

だ、だれだつわたしの羽根を引っ張つてるのは！

ああ、でつかい声でわたしの言つたことを言いふらさなこりつ。
恥ずかしい。

子どもたちの波に飲まれて、わたしは意識が遠のくよくな気分を
味わつた。

薄れゆく意識の中で思つ、

わが無一の親友湯葉美加子め、おかしなことをわたしに吹き込ん
だ恨み、晴らしやでおくべきか、ど。

で、ようやく子どもたちから解放されたわたしたち新天使さま四

人は、まとめてインタビューを受けることになった。わたし以外は涼しい顔をしているのが、どうも納得いかない。

「さて、今日から新しく四人の天使さまが加わりました！ 一人ずつインタビューしていきたいと思います」

どこかで見たようなレポーターの女の人が、無闇に明るい声でそう言った。まずは名前を聞かれたので普通に答える。

「今日は初めてのお仕事なんですよね。どうでした？」
と聞かれてマイクを向けられたので、わたしは正直なところを述べた。

「つ、疲れましたあ……」

するとレポーターの人は一瞬きょとんとした後、大笑いした。何か変なこと言つたかな？

「ずいぶん人間味のある天使さまですね！」いや人間ですから。その後順々に皆の今日の感想が述べられるにつき、わたしの言ったことがどうやら標準外らしいことが分かつてきました。

奈緒曰く。

「わたしは、ずっと天使さまになれたらいなって思つてましたから……今日初めて天使さまとしてお仕事ができて、とても、何ていふか……感動します」

日羽曰く。

「尊い仕事だと思つています。これからも皆さんのお役に立てるよう頑張りたいと思います」

儂曰く。

「私にもできることがあります。これからも皆さんのお役に立てるよう頑張りたいと思います」

甲斐……ですね

みんな立派すぎ。これじゃわたしの立場は壊滅的だ。
後に日羽にそんなことを言つたところ、

「あんなもの、適当に良いこと言つておけばいいのよ

というクールな答えが返つてきた。奈緒や儂はかなりの部分本音だったんだろうけど、彼女はじつにドライである。

「病気の体を押して私たちのために社会貢献してください」といふ天使さま。彼女たちの献身に深く感謝しつつ、彼女たちが少しでも長く生きられるよう祈りましょう!」

そんなふうにインタビューは締め括られた。天使さまになる前にコースの中で散々聞いた言葉だ。この点については、天使さまになろうがわたしの感想は変わっていない。

盛り上がり過ぎじゃないかな。

対外的にはともかく、実際はどうだったの? といふ話になる。「やっぱじょっと、気持ちが変わったっていうことはある、かな……」

奈緒はベッドにちよこんと腰かけ、足をふらふらさせながらそつ言つた。体はちこさいままでも、なんだか貴祿が出てきたよつな気がする。

「前はレポーターの人言つてること、へんだなとは思わなかつたけど。ううん、何というか……」「……」

「僕がちょっとだけ苦笑いしつつ、その先を継いだ。
「ちょっと、大げさな感じはするわよね」

「そ、そうだね。そんな感じ」

「天使と人間は別のもの……」っていう印象よね」

日羽が淡々と言つ。

「ま、確かに大げさだけど、あれが天使の存在意義もあるわけだからねえ」

初仕事を終えたわたしたちに、歌撫さまは、そんなことを言つ。

「あの盛り上がりがあるからこそ、ぼくたちの仕事の重要性が増してるので」

天使さまは人気者、みんなの心の拠り所、か。

「そうですね」僕は相変わらず柔らかい雰囲気だけど、目付には強い意志を感じる。

「もつとがんばらなくちゃ」

奈緒がうんうんと頷いた。

「それにしても、子どもたちと話せたのは良かったわ。すいごく喜んでくれていたみたいだもの」

「そうだね」奈緒もとても嬉しそうな微笑になる。「かわいかつたなあ」

「悪いもののじや、なかつたわね」日羽までそんなことを言つ。

「わたしは疲れた……」

「沙凪ちゃん、大人氣だつたね」

「子どもたちも、人見てるんじやないかしらね」

日羽のへんな笑顔が気になるけど、うつむ。子どもたちも侮れない。

「ちょっと……珍しいタイプの天使さまつていう感じはするわね」

僕が興味深そうな目でわたしを見ている。妙な間があつたけど何と言おうとしたのやう。

「ああ、インタビュー見たよ。面白かったね、あれは『歌撫さま、からかわないでください』

「みんな立派なこと言つてたね。ずるい」

「ずるい、というか……」

ジト目わたしを見てちょっと申し訳なくなつたのか、困つたよ

うな表情の僕。

「何だかカメラ向けられると、あんな感じのこと言わなきゃいけないような気がして」

「う、うん……」

奈緒が同意。そんなものかな。

「いいんじやないかしら。歯に衣着せないのが沙凪の魅力でもあるのよ」

「そうかな？」

「そうそう」歌撫さまには言われたくないです。

ともかく、……「でもある」ってのが気になるけど、褒められて
いるんだと思つておいつ。

「沙凪は、どうだったの？」

僕がどこか遠慮がちにそう聞いてきた。ああ、そう言えれば疲れた
としか言つてなかつたなあ。

「うん、子どもたちは可愛かつたね。いつもどうなのか知らないけ
ど、すぐ元気だつたし」

わたしはあのときの子どもたちの様子を思ひ出しつつ、

「笑顔が見れるお仕事つて、貴重だなあと思った」

それは本心だった。僕の言つた「天使病に罹つた幸運」という言
葉の意味が、ほんの少しだけ、理解できたような気がする。

「わたしが笑顔を、ねえ……」

ぼそっと呟いただけだつたんだけれど、皆に聞こえていたようだ。
顔を上げると、みんな優しげに微笑んでいた。

恥ずかしかつたけど、不快じゃない。

このとき確かにわたしは、天使さまのお仕事を、すてきなものだ
と思えていたから。

*

そうして天使さまとしての生活が始まつて、わたしたちは、いろ
んなところでお仕事をしていった
身寄りのない子どもたちやお年寄り、障害者のひとたちと語つ
たり。

街角の美觀のために、ゴミ拾いをしたり、緑を植えたり。
人形劇のチャリティ公演のため、お人形をせつせと作つたり。
あるいは、単にわたしたちを写すためだけの取材に答えたり。
楽なことばっかりじゃなかつたけど、みんなで手を取り合つて、
わたしたちは頑張つた。

わたし自身としては、ひとつお仕事をする」といふのが一歩

天使さまに近付くような感じを覚えていた。

それは意外なくらい、気持ちのいい感覚で。

緩やかに穏やかに、そのすてきな時間は過ぎていった。

ずっとそんな生活が続けばいいなど、どこかでわたしは思つていた。

だけど、そんなわけはなくて。

髪の毛が抜け落ちるよう、伸びた爪が切られるように、じくじく自然な結論として、永遠なんか、どこにも無いのだ。

時間が止まつて欲しいだなんて、そんなわがままは、通らない。

そう、わたしたちは天使さま。
不治の病の、犠牲者なのだ。

三 天使さまの体には、黒い血が流れている

褪めた月の光が、眩い夜だった。

音が聞こえる。

ちいさく、かすかな、軋む音。

夢うつつのちいさな吐息。

ぼんやり目を開けば、そこは灯りの落ちたいつもの部屋。月の光がカーテンの隙間から細く射し込み、わたしたちのベッドを蒼白く照らしていた。

何の音……？

誰の声？

きちきち、きちきちと、硬いものが、擦れ合つよつな音。

不安を誘う音……、

時折響く、押し殺した声が誰のものなのか、その意味するところが何であるのか、理解したわたしは、飛び起きた。

「儂！？」

お腹の底がひつくり返るような、嫌な感覚がする。

「は、う、うつ……」

田覚めた意識にくつきりと刻まれる、苦しそうな喘ぎ声。外からの仄かな光に照らされ、かすかに浮かぶ儂のベッド。その上に、何か大きなものが、のし掛かっているのが見えた。なに……あれ……。

暗闇に同化する黒いもの。うつぶせの儂の背中ひとつへ、いび

つな形の大きな何か。そこから聞こえてくる、異様なくらい耳につけ、枯木が折れるような不吉な音色。

「どうしました？」

部屋の入口から、場違いに間延びした声が聞こえてきた。

少し遅れて、灯りが点く。一気に緊張する、入口の気配。

僕の背にあるものが、蛍光灯に照らされた。それはまるで、奇妙にねじれた異形の彫刻。でもどこか生物的な質感を持つていて、そしてそれは濡れていて、黒い露を、シーツの上に、ぼた、ぼた、と垂らしていた。

それは、僕の肩の辺りから生えていた。

天使の羽根の替わりに、生えていた。

黒くて大きい、いびつな翼。

そこから時折、割れるような音が聞こえては小さく揺れ、黒い飛沫を散らしながら、きちきち、ぱきぱきと、細く枝分かれしていく。僕の肌は、いつもと変わらない白……だけど羽から散つた黒い何かで汚れ、無残な斑に染まっていた。

「は、あ、うつ、ぐうつ……！」

一際大きな苦鳴が漏れると、それとともに翼が揺れる。ベッドはすでに、真っ黒だった。

「あああう、うああつ！」

ずる、と、片側の羽が傾いだ。そのまま肩から剥がれて床に落ちる。「じりじり」という音が聞こえて折れた羽が生え変わっていく。泣きながら駆け寄ろうとした奈緒が、いつのまにか増えていた看護師さんに取り押さえられる。泣き叫ぶ声が、わたしの鼓膜を震わせる。

わたしは無意識のうちに、自分の体を抱き締めた。

担架に移され、運ばれていく、僕の体。

顔は苦痛一色で、汗と涙に塗れていた。

僕は、戻つてこなかつた。

僕の血で汚れた一切はすでに清められて、元の通り、真っ白になつてゐる。看護師さんたちが、掃除していった。ゴム手袋つけて。汚いものでも扱うように。こんなに激しく、急なのは初めてだ、とか、言つていたけど、そんなのは知つたことじやない。僕の血は汚くなんかない。でも怒る氣力はからつぽだつた。

持ち主の居なくなつた、ベッド、机、クローゼット、本棚、その他諸々。何もかもそのままなのに、一番肝心なものだけがなくなつてしまつた、生活の抜けがら。

日羽も、奈緒も、ずっと無表情で黙つている。そしてわたしも。食事も喉を通らない。

最低限の反射だけで進める、反復行動としての日常生活。停滞した空気が、重さを持つたように、わたしたちの上にわだかまつてゐる。

とても大切なものが、欠けてしまつた。
分かつてはいたはずだった。

はずなのに。

わたしたちは天使病。

いづれ死に至る、不治の病の犠牲者なのだ。
けして目を逸らしてはいたわけじやない。だけど、現実は想像して
いたよりも、もっとずっと、酷かつた。

こんなにすぐ。

あんなにも、辛そくな。

僕の姿。お人形さんのよひききれいな彼女に、あんな、怖ろしい
形の何がが生えるなんて。

痛がつてた。苦しんでいた。目を開じ、歯を食いしばつて、耐えていた。
どうして。

どうして僕が、あんな目に遭わないといけないんだ。

子どもの頃から入院していて、天使さまになれるとなつかつて喜んでいた僕。

天使さまになつて、ようやくみんなのためになれると、張り切つていた僕。

いつでも優しく笑つて、空氣を和らげてくれた、わたしたちの大切なともだち。

僕が何か、悪いことをしたのか？

病気だから仕方ない？

天使病に罹つてしまつた現実を、嘆くしかない？

いつかこうなる運命だったと、受け入れるしかない？

いや、そもそも。

天使病に罹つたことは本当に偶然だったのかと、そう言つたひとが居た。

「日羽」

わたしはあのことについて問い合わせることを決心した。自分でも驚くほど、無感情な声が出た。

日羽は声に出しては返事せず、視線だけでわたしの言葉に反応した。そしてちら、と奈緒のほうを見る。彼女はベッドの上で、膝を抱えて塞ぎ込んでいた。このところずっとそうだった。

だけど、この話は、奈緒にとつても無関係じゃない。

「前に言っていた話」

日羽は何も言わない。

「天使病が」

決心したはずなのに、それを実際に口に出すのには抵抗があった。

苦労して喉の奥から、言葉を引きずりだす。

「偶然じゃないかもしれないって話」

奈緒がはつとして顔をあげた。怯えるような表情。

ずいぶん長い間、日羽は黙っていた。その間、わたしは日羽の目を見詰め続けた。

やがて、根負けしたように、日羽は目を逸らした。

彼女が口を開く。

「天使病なんて病気は、無いわ」

「証拠は？」

わたしは言つ。疑つてはいるわけじゃなかつた。単にそれは、日羽が掴んでいるであろう証拠の提示を、求めただけだ。

それを聞くと、日羽は机の中からカッターナイフを取り出した。そして自分のマグカップの上に、手首とカッターをかざす。ぎち、と音を響かせて、日羽はカッターの刃を出した。

不吉な空気が、場に満ちる。

「……日羽。何するつもり」

わたしの言葉も半ばに、日羽はその手にもつたカッターで、自分の左手首を、さっくりと切り裂いた。

血の気が引くのを自覚する。奈緒が隣で悲鳴をあげる。

「何、してるんだっ！」

手当てしようとしたわたしを、日羽は蒼白な、だけど強い視線で睨みすえて制止する。

「黙つて、見ていて」

確かに意志の光に中てられて、わたしは動けなくなつた。

黒い 真っ黒い血が、日羽の左手を伝い、ぽたぽたとマグカップの中に落ししていく。零、零、黒い血の珠……。

長い、長い間そのまままでいた日羽は、ふいに傍らのタオルで手首を押さえると、手際よく止血して包帯を巻いた。

そして病室の隅に歩いていき、花瓶から一輪、緋色の薔薇を抜き取つた。

日羽の手から薔薇が放たれ、マグカップの中に、落ちる。

日羽の いや、わたしたち天使さまの血に、薔薇が触れる。

少しの間、変化はなかつた。

始めに起きた変化は、音。

きちきち、

きちきちと、

何がが擦れるような音がする。

小さい音だつた。誰かがお喋りしていたら聞き取れないだろう、

そんなかすかな

薔薇の悲鳴。

日羽の白い指が、マグカップの中の薔薇をつまみあげる。

姿を現した薔薇は……真っ黒に濡れて、零を垂らすそれは……、

もう、薔薇とは似ても似つかないかたちになつていた。

枯木が折れるような不吉な音色を撒き散らしながら、歪にねじれ、さくられ立ち、割れて枝分かれしては一部が剥がれて落ちて行く……、そしてまた、生え変わる。

見たことのある変化。

「これは、まるで……、

まるで僕の羽根と、同じ様子だった。
やがて変化は落ち着き、後には枯れた、一輪の薔薇が……。

「見たことないかしら。」の、花の様子
言われてわたしは思い当たる。確かに、見たことがある。

「道端の……」

日羽が小さく頷く。

「道端の、草の姿」

そう、その薔薇の、黒く干乾びたような姿は、雨晒しの草の、成
れの果てにそつくりなのだった。日羽が手を放し、黒く枯れた薔薇
は落ちていく 着地したそれは、粉々に壊れてばらばらになつた。
天使さまの血に浸された薔薇の花が、僕と同じよつな変化を経て、
雨晒しの草のような姿になつた。

つまり……。

「私たちの血は、黒塵と同じ反応を示す」

日羽は淡々とした口調で、しかし厳然と宣言した。

「同じ畸形を、生命にもたらす……」

念を押すように、同じ内容の言葉を繰り返す。

もう、分かつている。日羽が何を言いたいのか。そして日羽は聞
違つたことを言つていいないことを。田の前に、紛れも無い証拠が示
されていると。

でも、反論しなければならない。でないと。

「黒塵が、わたしたちの血の中に溶けてるって言いたいんだよね」

日羽は頷く。

「でもそれは、天使病がそういう病気だつていうだけの話じゃない
の？ たまたま、血が黒塵みたいになる病気

「自然発生した病気が、偶然黒塵と同じ反応を示すなんて、有り得
ないと思うわ」

「じゃあ、……今でも黒塵は大気中に散つてるんでしょ？ それが
取り込まれただけなんじゃ」

「それも違つわ。天使病が確認されたのが約十年前、その頃には黒塵の濃度は落ち着いていて、それによる病気の報告も殆どなされなくなっていたもの。今に至るまで、新たな天使病発症者が出ていることが説明できない」

「……体に入った黒塵が、勝手に増殖したとか」

「黒塵はウイルスじやないわ……自己増殖したりしないの。そうでなければ、濃度が薄まつても、被害は収束しないはずだもの」

「……」

反論は、「ことじごとく潰されてしまつ。

「それに」

日羽は、望んでもいない駄目押しを呟く。

「天使病が偶然だとしたら……天使の持つ共通性、例えば誰もが身寄りがないか家庭に問題があつたり、おかしなくらい美形だつたりすることの説明がつかない。初めから、そういう人間を選んで連れてきていると考えるのが自然だわ」

何か反論したい。日羽の言うことを認めたくない。

それなのに、わたしの中からは何も出てこない。

「私の父は、黒塵の研究者だったの。ちいさい頃の私は父の研究室によく出入りしていた。その頃に父は死んでしまったから、それが私に残る、父の唯一の記憶。だからよく覚えてる。この……黒塵の反応のことば」

そして、黙りこむわたしの氣を知つてか知らずか、日羽は、言葉を継いでいく。

ため息を、つきながら。

「……もう、分かるわよね」

分かりたくない。

「……自然に発生したものではない、体内で増えもしないとすれば

その先は聞きたくない。

でも……。

「外から入れられるしかない つまり」

……日野日羽は、残酷な女だ。

「私たちが毎日受けっていた、点滴。あれに、塵の成分が入っていたんでしょうね」

だとしたら。

「儚、は」

口の中がかからからだ。舌がうまく回らない。

「儚は……病院に、病院のせいで、あんな目に遭つた、ってこと?」

「儚だけじゃないわ」

日羽はあくまで淡々と、言う。どうしてこんなに冷静なんだ。

「わたしたちも。今までの、天使たちも」

日羽は髪をかき上げた。

その左手首には、白い包帯が巻かれている。

ああそうか、とわたしは悟った。

前に日羽が、わたしにこの話をしたとき、そのときも彼女は左手首に包帯をしていた。

日羽はそのときも同じことをしてたんだ。あのときもう、天使病が偶然ではないという証拠を確認してたんだ。

もうずっと前、わたしたちが白くなつた頃から、知つてたんだ：

…。

だつたら。

「どうして」

知つてた、のに。

「どうして、止めなかつたの」

もつと前に止めておけば、儚は、あんな苦しい思いをせずに済んだんじゃないのか。

点滴なんかしなければ。薬なんか飲まなければ。

「どうして、止めなかつたんだ!」

そうすれば、儚はもっとずっと、天使さまで居られたんじゃないのか!

「どうして……」

「やつ、やめて、沙凪ちゃん！」

気がつけばわたしは日羽に手を伸ばしていく、その腕に、涙でぐちゃぐちゃになつた奈緒がすがりついていた。

「やめてよ……けんかしないで」

「……ごめん」

急に気持ちがしほんだわたしは、離れてベッドに座り込み、膝を抱えた。

沈黙。

やがて日羽が、ぽつぽつと、喋り始めた。

硬くて痛いものを吐き出すような、告白……。

「……私は、どうしていいか、分からなかつたの」

こんなときでさえ、いつもと変わらない、冷静な日羽だと思つていた。

そうじやなかつたと、わたしはじのとき初めて理解した。

「私は、やめさせるべきかもしれないと思つた。でも、僕と奈緒の顔を見ていたら」

奈緒が顔をあげ、赤い目で日羽を見た。

「やめさせたら、天使になれなくなる……。だから、私は」

日羽の声が、そのとき初めて、ふるえた。

「止められなかつた」

いつもと変わらない、冷静な日羽なんかではなかつた。

それはただ、どうしていいか分からないから、いつも通りにしかできないだけだった。

無表情な日羽の目から、涙がひとすじ、つ

と落ちた。

「私には、できなかつたの……」

「……日羽」

日羽だって、つらくないわけじゃない。

そんなの当然だ。日羽だってわたしと同じ気持ちなんだ。一緒に羽根が生える痛みに耐え、天使さまとして手を取り合つた、たいせ

つな友だちなんだから。

「ごめん、なさい」

「ううん、日羽……」つむじかわ、『ごめん。』言こ過ぎたよ。」

「でも、」

それでも納得しない日羽に、わたしは首を振った。

「第一、日羽のせいじゃない。わたしだって……」

そう、わたしだって日羽の話を聞いていたのに、結局何もしなかつた。やううと思えばわたしにだつて、止められたはずだ。

日羽のせいじゃない。日羽の話を本気にしなかつた、わたしにも責任はある。

「それに、途中で点滴やめたって、本当に止まつたかどうか」

「……やつ、ね」

日羽はまだ、申し訳なさそうな顔をしている。

その表情一つ見ても、よく分かる。日羽はわたしたちと、同じ気持ちだと。

本気に決まつてゐる。でなければ、わざわざ自分の手を切つてこんなにも沢山の血を流してまで、事の真偽を確かめたりしない。

「日羽のせいじゃ、ないよ……」

何度も念を押して、ようやく日羽の表情は、すこしだけ和らいだ。

「……ありがと。沙凪」

「こんなのは、絶対許せない」「誰が悪いか？ そんなの決まってる。わたしたちに黒塵を混ぜた、病院が悪いに、決まってる。「何とか、しないと……」

こんな酷いこと、止めないといけない。」の気持ちもみんな一緒だと、わたしは思っていた。だけど日羽も、奈緒も、顔を俯けたままだ。

「……どうしたの？」

「本当に、止めるのが、いいのかしら」「え？」

「もし私たちがこのことを告発したとしたら、きっと……」のままでいらっしゃれない

「……あ」

「私たちは、きっと、天使ではいらっしゃなくなる」

今の生活が壊れる。

それは、怖ろしい想像だった。天使さまとしてこれまでしてきたこと。そしてその結果として得られたこと。みんなの笑顔。わたしたちの生き甲斐。

それがみんな、消えてなくなる。

「……それでも、このことを告発するのが、本当に正しい」と……

「……」

日羽の表情は、苦惱に満ちていた。

よつやくわたしは、日羽が何に悩んでいたのか、どうしてこのことをずっと隠していたのか、その本当の理由に気がついた。今の生活を壊して、真実を明るみに出すか。それとも、天使さまとしての立場を守るか。

一つに一つ。

儂のことは、許せない。それは絶対だ。

だけど、わたしたちは、そして他の天使たちも、天使さまとしてのお仕事によりかかつて生きている。それは決して、簡単には壊せない。わたしたちだけの問題でもない。

わたしは、天使さまでなくなつたら、どうしていいのか分からな
い。

「とんでもない一律背反だつた。
どうすればいいんだろつ……」

「…………わたしは」

そこで声をあげたのは、奈緒だつた。

「わたしは、本当のことを、みんなに知つてもいいのがいいと
思つ」

「…………奈緒」

「天使の生活が、壊れてしまつても？」

日羽の問いに、奈緒はちいさく、でもはつきりと頷いた。

「わたしたちは天使さまだけ、でも……」

奈緒は俯いたままだつたけど、声もちこつかつたけど、その言葉

ははつきりとわたしたちの耳に届いた。

「わたしたちのしてきたことは、天使さまじやなくとも、できるん
じゃないかなつて……思つんだ」

「…………あ…………」

確かに、その通りだ。

目からうるることは、このことだ。

わたしたちが普通のひとと違うのは、見た目だけ。

容姿そのものの影響も、少なくはなかつたかもしぬないけど。
でも、決して、それが全てじゃない。

「確かに天使さまは真っ白で、きれいで……それはいいことだけど、
でも、そのために病気になつて、儂ちゃんみたいに……なつちゃう
なんて……」

涙声。

奈緒は、聞いたこともない大声で言った。

「そんなの、ぜつたい、まちがってるよ。……」

奈緒が、怒ってる。

初めて見た……。奈緒がこんなにはつきりと、自分の意見を主張するところなんて。

だから余計に、その姿が胸に突き刺さる。

「そう、ね」

「……うん」

わたしは日羽と顔を見合わせ、お互いの気持ちを確認した。

「確かにこんなの、絶対おかしい」

「そのことを知ったからには、必ず真実を、白日の下に」
喉がつかえそうな、痛くて苦しい気持ちが湧き起る。

「絶対に」

僕はもう、犠牲になってしまった。わたしたちも遠くない将来、同じようになるかもしれない。もう手遅れかもしれない。そしてわたしたちの行動で、天使さまたちの生活を粉々に壊してしまいかもしれない。

だとしても。

「戦おう。わたしたちが、最後の天使さまになるよ！」
三人、手を取り合って、頷いた。

「でも、どうすればいいのかな……」

奈緒の言葉は、もつともだ。戦う、と言つても一体どうすればいいのか。

「うーん。そだな……」

腕組みして考える。

「やつぱり、警察……？」

黒塵を体の中に入れてるなんてそんな馬鹿なこと、常識的に通るわけない。どう考えても犯罪行為、いやそれ以前の問題だ。

でも日羽はわたしの意見を否定する。

「警察は、信用できないと思つ」

「どうして?」

「……そもそも私たちがここに来たきっかけ、覚えてる?」「ええと」何だつたかな。

「健康診断」

「ああ」そうだ。学校で受けた、年に一度の健康診断。

「あれは、国がそうしなさいと決めているものなのよね。今にして思えば、天使のオーディションを兼ねていたんでしょうけど」

日羽の口元は皮肉げに歪んでいる。ちょっとこわい。

「ということは、天使病つて……」

「国が絡んでいる可能性が、高いと思う」

敵の正体は、国でした。……いきなりスケール広がった気が。

「だとすれば、警察も信用できないわよね」

「確かに、そうかも」

「というか、そもそも警察に駆け込むにしたってどうすればいい? という話ではある。

ここは天使病院であり、外との連絡手段は全く、ないのだ。携帯もない。固定電話もない。ネットも書き込みやサイト開設などの情報発信は不可。…… こうなつてみると、都合悪い情報をリークされないようにそうなつてるようになしか思えない。

じゃあ逃げ出せばいいかというと、これも難しい。ここが何処なんか、いつもヘリで出入りしてるせいでの全然分からぬ。どこかの山の中だつてことは分かるけど、歩いて人里までたどり着けるのかどうか。それ以前に、敷地から出るのさえ難しい。

ともかく、警察のセンが駄目だとすると……。

「あ」

情報発信の手段、あるじゃないか。

わたしたちは天使さま。お茶の間の定番だ。

「あのや。テレビに出たとき、このこと言つてみるってどうかな」

それも録画じゃなくて、生中継のとき。^{ライブ}

「う、うん。そうだね」

奈緒はちょっと頬を赤くして、乗り気みたいだつたけど、「そうね……」

田羽的にはいまいちなようだった。

「きつとすぐ止められてしまつと思うわ」

そういうえ、天使さまが外に出るときには、病院の先生の他に警備員の人が必要、同行する。今までわたしたちを守るために居てくれるてるんだと思つてたけど……。

「でも、少しでも伝えられれば」

「ここに戻つた後で一度と外に出してもらえなくなつて、テレビでは良いよつに情報操作されてしまつ……、と思ひ、わ

「そつかな

テレビの線もだめか……。

どうすればいいんだろう。

「うー」

分からぬ。

理不尽。

理不尽だ、本当に。

「だいたい、何だつて病院側はこんなことしてるんだ」

まさか真っ白な天使さまを作り出して社会貢献させるため、じゃないだろうじ。

「社会貢献どころのも理由の一つかもしれないけれど

「え？」

「いえ、現状の天使人氣つてすごいでしょう、社会現象にまでなつているし

「それは確かにそうだけど……」

「ええ、もちろん結果論だとは思つわ。だけどわたしたちの存在が、不満を逸らすための広告塔になつてているのは確かだと思つ」

不満、か。確かに今の世の中、暗いけど。

「それに、美形の人ばかりがここに集まっているのも、そうだと思えれば納得できるわ。……というより、それ以外の理由が思いつかない」

「確かにね……でもそれが主目的じゃないよね？」

「そうでしょうね」

「じゃあ何のために？」

日羽はちょっとと考え込んだ。

「……人体実験、とか」

その口から、気味の悪い言葉が吐き出された。

「黒塵の影響を見るための？」

「ええ。今では濃度が薄まつたとはいえ、黒塵は未曾有の大災害。再発防止のため手段は選んでいられない……ということかも知れないわね」

天使さまそのものはロマンチックな存在なのに、その存在意義を語る日羽の言葉は、ひどく現実的で醜悪だ。

人体実験。たとえ災害対策目的だらうと、黙つて薬打つて病氣にしてしまうなんてどうかしてる。これじゃ今までの天使さまたちも浮かばれない……。

……そうだ。

そもそもこれは、わたしたちだけの問題じゃない。一般的のひとに知らせるよりも、まず当事者……つまり、天使さまたちが知るのが先じやないか？

「そ、そうだね」

奈緒はその意見に同意してくれた。

「日羽はどう思つ?..」

「……え?..」

考え込んでいて、聞いてなかつたらしい。思いつめたような表情だ。

「無理もないかもしけないけど、そんなに思いつめないほうが」

「ああ、ごめんなさい、大丈夫よ。……それで、何だつたかしら?..」

卷之三

「さう、
ね」

そう詰つたきり、田羽はまたすこし、考へ込んだ。

……いきなり全員に知らせるよりも、少しずつ広めていったほうがいいかもしない」

六

とすると
ねたしたせいかよ

附录二

卷之二十一

領
二
人。

日羽の表情は、まだちょっと暗い。いや、奈緒もそうだし、わたしだつてきっとそうだ。こんな状況じゃそれも当たり前なんだけど、日羽には何か心に引っかかることがあるみたいな感じで、少し気になる。

「少しだけ待ってくれる？」

そんな日羽はおもむろに立ち上がると、血の入ったマグカップを取つて洗面台のほうに歩いて行つた。

「あ、それ……これからも使うの？」

卷之三

「まつわよ」

そう言って、にやりと笑つた。

九月十九日
木曜

それはわたしたちが

たちに言つた言葉だ。

だから平氣よ。洗えばきれいになるわ。

「……」つとわらつて、蛇口をひねる。

あのときは何も考へないで黒蜜とか言つたけれど、今ではすいぶん皮肉に聞こえる。

「……まあ、でも

日羽は、とつぜん真顔に戻ると、

「私はそういう甘いものは、余り好きじゃないんだけれどね」
洗面台の上でマグカップを逆さにして、自分の血を捨てた。

歌撫さまの部屋は、病棟の四階にある。造りはわたしたちの部屋と同じだけど、今ではあのひと一人だけで、その部屋に住んでいる。歌撫さまはベッドに座つて、ぼうっと外を眺めていた。今日の空はそれほどきれいでもない。斑な雲が薄青く沈んでいる。

「きみたちから訪ねてくるとは珍しいね……」

緩慢に振り向いて、そう言った。

「儂ちゃんのことかな?」

いつも強気な歌撫さまには珍しい、気弱な微笑みだった。

「知つてたんですか」

「そりや、まあね。姿消す理由なんて、ここではあれくらいしかないし」

わたしは空いているベッドの一つに腰掛けた。奈緒が隣に座る。日羽は立つたままだ。

歌撫さまは、膝を抱えた。

「分かつたでしょ? ぼくらが、天使として、しつかりやってかなくちゃいけない理由」

「……それは」

大切なともだちの死に恥じないようにして、とか。
遠くはない未来に死ぬ自分のために、とか。
でも。

「……歌撫さま」

「何?」

「もし」

「うん?」

「もしも、ですよ」

どうしてわたしは「もしも」なんて言つんだらう。

天使としてしつかりしなくちゃ、なんて話をされたせいだらうか。

「これからわたしたちは、それを壊すための話をしようとしているから。」

「天使病の、正体が……」

「天使病にはいくつかおかしなところがあるって？」

わたしは目を見開いた。隣に座る奈緒も身を固くしたようだ。

「知つてたんですか？」

「伊達に四年もこじで過ごしてなによ。そんな話は毎年出るしね」

面白くなさそうに、いやむしろ、怒っているような調子で、歌撫さまは吐き捨てる。

「美形揃いだとか、病状の進行速度が……特に生翼までの時間が似すぎだとか、他にもいろいろ。くだらない。証拠なんか、何もないのに」

「証拠、」

わたしはそんな歌撫さまの気配に威圧されて、喉に言葉を引っ掛けてしまった。

代わりにそのことを告げたのは、驚いたことに、奈緒だった。

「証拠なら、あります」

歌撫さまがものすごい勢いでこっちを見た。見たこともないような、驚き、の形相。

「……何だつて？」

その顔に驚いて、奈緒は少し腰が引けてしまったようだつた。だからわたしが代わりに、ついさつきわたしたちが日羽に見せてもらつたことを話した。血を流してみせることはしなかつたけれど。聞き終えた歌撫さまは、しばらく、蒼い顔で黙り込んでいた。

「そんなに……簡単なことだつたのか……」

ちいさくちいさく、呟いた。

信じてもらえたようだ。歌撫さまにも、もしかしたら思い当たる節があつたのかもしれない。もし信じてもらえたかったら、今度はわたしが血を流すつもりでいたから少し安心した。

歌撫さまの反応は、無理もない。

血が証拠だなんて、知らなかつたら分からぬ。ここでは血が出るような事故なんてほとんど起こらないし、天使さまの人数はとても少ない。さらに少しばかり血がかかつたくらいでは、あの変化は起こらないのだ。

……僕の容態が急変したときは、血が沢山出たけど。あれは、例外中の例外だつたらしいし。

「わたしたちは、戦います」

わたしは静かに宣言した。

「歌撫さまも、いつしょに」最後まで言えなかつた。

「それはできない」

大きな声、硬い、拒絶の言葉。

「……どうしてですか？」

ようやく、それだけを言つた。

「ぼくはね」

死人みたいに青白い顔に、死地に向かう兵士のような決意を浮かべ、

「死んでいつた子たちのために、最高の人生を送つて、ぼくも笑つて、みんなの笑顔に囲まれて、死んでやるうつて決めたんだ」

歌撫さまは、自分の想いを吐き出した。

「ぼくたちには、天使にはそれができるからね。……きみたちがやろううとしてるのは」

急に話が自分のほうを向き、わたしはうろたえた。

「天使の生活を、壊そうとすることだ」

その通りだ。

そんなことは、分かつている。

いや、分かつていたはずなのに。

いざその生活を守るうとするひとを目の前にして、

その余りに重い四年間を前にして、

天使さまを続けるということの、本当の意味を、わたしはちゃんと分かつていなかつたのだと思つた。

「……」「……

でも。だ。

分かつていなくて。いや、まだ分かつてないから」ハル。

「僕は、たまたま病気になつたんじゃないんです」

わたしたちは、退くわけにはいかないんだ。

「僕だけじゃなく、わたしたちだってそうです。わたしたちは……これまでの天使たちみんな……、殺されたような、ものなんです」

歌撫さまはじっと、わたしの目を見た。怖かった。だけど目を逸らすわけにはいかなかつた。

ふと、歌撫さまの目線が逸れた。奈緒と、日羽を見ている。二人もわたしと同じように、歌撫さまを見つめている。

心強かつた。わたしはひとりじゃない。

「…………わかつた」

わたしはその言葉を聞いて、一瞬ほつとした。

勘違ひだつた。

「手伝うことにはできない。でも、せめて、今の話は忘れてあげる」歌撫さまは膝を抱えた腕の中に、顔を埋めた。

わたしたちは、動けなくなってしまった。ショックだとか。何とかならないか、とか。

すると、ずっと黙っていた日羽が、言葉を発した。

「一つだけ、聞かせてください」

歌撫さまは、顔を上げない。

「放つておけば、これからも私たちと同じ境遇の子が生まれる。それでも、いいと言つんですか？」

歌撫さまは、返事をしない。

返事をしなかつた。

長い間そうしていたあと、歌撫さまは一言だけ、ぽつりと呟いた。

「…………出てつて」

肩の羽根が、少し震えていた。

日羽は踵を返し、わたしたちだけに聞こえる小声で言った。

「……行きましょう」

わたしたちは静かにベッドから腰を上げると、音を立てないうつに入口に向かつた。

後ろから聞こえてくる、か細い声。

「……ぼくの気持ちを、覆さないでほしい」

聞いたこともない、弱々しい声だつた。

「あ…………」

病室に戻ると、わたしはばたりとベッドに突つ伏した。めちゃくちゃ疲れた……、精神的に。

まさか、こんなにはつきりと拒絕されるなんて思つてもみなかつた。天使さまであるということは、わたしの予想を遥かに超えた重みを持つていてのこととか……。

だけどわたしたちにも、譲れないものとこののが、あるのだ。

「あとは浅川せんせくらいかなあ……」

他の天使さまも歌撫さまと同じ気持ちかもしれないし、だいいち余り面識がないから話を聞いてもらえるかどうかさえ分からぬ。

「先生もきっと、駄目だと思うわよ」

日羽の声は冷たい。

「なんで？ 話してみないと分からぬじゃん」

簡単に諦めるわけにもいかない。やれることはやらないと。

「……先生に話すのは、歌撫さんに話すのよりリスクが高いってこともあるわ」

「せんせがグルだつてこと？」

日羽は回答を避けた。わたしはせんせがそつだなんて考えたくな
いし、たぶん日羽も同じなんだろう。

でも……。確かに日羽の言うことは、一理ある。

……そもそも、誰がどこまで知ってるんだろう。わたしたちが真相に気付いている、ということを「敵」に気付かれたら終わりなんだから、その辺りはつきりさせておきたいところではある。と言つても、当たつて砕ける方法しかわたしには思いつかない。

「う…………」

砕けちゃ困る。今のところ仲間は三人しかいないのに、率先して欠けるわけにもいかない。

「…………少し落ち着いて、これからのことを考えましょう。捕まつたらお終い、焦りは禁物だと思うわ」「わたしは一刻も早く、この馬鹿げた真実を暴いてやりたい、だけど今は、田羽の言つ通りにするのが正解なんだろうな…………。

結局、いい案は思い浮かばずに。

わたしたちは真実に気付いていることを隠すために、薬も点滴も、今まで通り続けることにした。

*

平行線を辿った一週間後、田羽がとんでもないことを言つて出した。「テレビで告発するわ」

「え？」

わたしと奈緒は驚いて田羽の顔を見た。

「来週、私だけが生中継で取材を受ける予定が入つたから。そのときには」

「ちょ、ちょっと待つてよ。それは駄目だつて言つたの、田羽自身じゃないか」

田羽の田は、本氣だ。

「…………玉砕する気?」

「もちろん、そんな気はないわ」

「じゃあ、どうあるつもつなの?」

田羽は賢いひとだ。無謀なんて言葉は、似合わない。

今も、さつとそうだ。

「田のは、告発そのものではないの」「でも、その考えはわたしには分からない」。

「どうこう」と?

「田のは、ijiの旨を、動かすこと」

「ijiの旨……天使たちを?」「ええ、と田羽は頷く。

「どうやって……いや、それよりも、そんなことしたら田羽の身が危ないんじや」

捕まつて……一度と外に出られなくて……。

「承知の上よ」

「そんな」

田羽らしくない。

「こんな風に、まるで捨て身みたいに、自分から虎の穴に飛び込むような真似……。

「私たちだけじゃ無理でも、ijiの旨で一斉に動けば、さつとijiから逃げられるはず。そこで今度iji、本当の告発をするのよ」

「待つて、だめだよ、田羽だけにそんな危ない」と……だいたい皆で一斉に動いたからって本当に逃げられるかどうか……。そんなやふやな計画」

わたしは何としても、田羽を止めたかった。

「沙嵐」

でもそんな風に強い調子で名前を呼ばれたら、黙るしかない。

「誰かが、やらないといけないのよ」

じつとわたしの田を見て、田羽は告げる。

彼女の覚悟を。

「ijiのままでは何もできない。壁に囲まれたまま、いずれ、私たちも儂と同じようになってしまつ。だから、誰かが、壁に穴を開けな

ければならない。そして、眞実を明るみに出すための、流れを作る。その役がたまたま、私だけていうだけの話よ」

「でも……それなら、わたしも」

「だめよ。私がやろうとしているのは、ただの布石に過ぎない。それにこれは、私だけがやれば済む話よ」

彼女はいつでも、論理的だ。だけど、今回ばかりは。

「でも、そんな、理屈で納得できることじやない」

そう言つと、田羽は、少し哀しげに目を伏せた。

「……私はずっと、動かなかつた」

「え？」

「眞実に気付きながら、ずっと傍観者のままだつた」

「……田羽？」

「もう、そんな自分は、嫌なのよ」

田羽の目は鋭く、虚空を睨みつけていた。まるでそこには、自分の嫌う自分が見えているかのよう。

「私はもう傍観者では居たくない。私は自分の手で壁を壊して、道を作つていきたい」

田羽の気持ちが、わたしを打つた。

「このひとはもうやると決めてしまつたのだと、理屈ではなく、納得した。

氣持ちは同じだ。僕のために。わたしたち自身のために。もう新たな天使さまを、生み出させない。

その気持ちをかたちにしようとしているひとを、どうしてわたしは止められるだろう。どうしてその想いに、応えないでいられるだら。

「……分かつた」

田羽の表情が和らぐ。

「田羽ちゃん……大丈夫、だよね」

不安そうな奈緒の言葉に、田羽ははつきりとした声で応えた。

「当然。無策でなんて、臨まないわ」

そこにあるのは、確信的な笑顔。

日野日羽は、冷徹な論理に裏打ちされた女だ。

だけど今回ばかりは、その笑顔はまるで、強がりみたいに見えた。それでも、わたしたちはやらなければならない。それがあやふやな、計画とは呼べないきつかけでしかないとしても。何も変わらないまま死ぬなんて、できないから。

田羽が単独インタビューリを受ける田、すなわちわたしたちの戦いの決行日。朝。へりに乗り、発つ田羽を、わたしたちは見送る。これから田羽は、わたしたちだけが知っている真実を、テレビカメラの前で口にする。

相手だつて、これだけ大掛かりなことをしておいて、ばれないための対策を取つてないわけはない。だらう。

だからたぶん、田羽は捕まる。
もしかしたら、もう会えないかもしれない……。

「田羽ちゃん」

奈緒は涙混じりの声で、田羽に抱きついた。

「また、……会えるよね」

田羽は奈緒の頭を撫でながら、しつかりと答えた。

「ええ。必ず」

口元には微笑みがありながら、でも田はちょっと悲しそうだった。

「沙凪も。元気でね」

まるで学校帰りにまた明日、と言つみたいな口調だつた。
だからわたしは、余計に悲しい気持ちになつてしまつ。こや、また会える、と田羽は約束したのだ。だからわたしはそれを信じる。信じればいい。信じないといけない。

ああ、わたしはダメな人だ。また会えると信じていろのに、どうして涙が出てくるんだろう……。

「田羽……」

「そんな顔しないで。私ならひまくやれるわ。私のことはよく知ってるでしょ?」

知つてゐる。田羽は賢い。

でも、こんなときに自信過剰な台詞を吐くなんてことは、知らなかつた。

「また会こましょつ。少しだけ痛い思いをするかもしれないけど、次に会うときは笑顔になってるわよ、きっとね」

まだ知らない日羽がいる。だからまだ、お別れには早すぎぬ。

「うん。絶対、成功させないと、いやだからね？ わたし

「当然、そのつもりよ」

日羽の笑顔は力強くて、すこしだけはかない。

そしてわたしたちは、そのときを待つ。

日羽が映るのは、ちょうどお皿どき。そのとき、動かすべき相手すなわち天使さまたちは、お皿のせんを食べに食堂に集まっている。そして食堂にはテレビがあつて、それはいつも、天使さまの番組を優先的に流している。だから日羽の姿をみんなに見せるのに、特別なことをする必要は何もなかつた。

これからのことを考える。すると、逆に、ここでのことが思い出されてきた。

あまり長い聞いたわけじゃないけど、この病院にもずいぶんたくさんのお出しができた。だから、すこしばかり感傷的な気分が湧いてくるのだ。まるで、卒業式みたいな。

何か、やり残したことはあるだろうか。

奈緒は墓地セメタリに行つた。でもわたしには、あの場所にそこまでの思い入れはない。

……やり残したことなんか、何も思い浮かばなかつた。

だからせめて、みんなと過ごしたこの部屋を、記憶に焼き付けていくことにする。

入院してから今までに、随分この部屋にはものが増えた。最初ただの病室でしかなかつたこの部屋は、少しずつ時間をかけて、わたくたちの部屋になつていつたのだ。

これからわたしは、ここを出していく。

もう一度と、戻れないかもしれない。

日羽の机は、整然としている、というより必要最低限のものしか置かれていない。それなのに本棚には本が納まりきらず、床にまで溢れ出しているのがすこし可笑しい。

奈緒の生活空間は、女の子らしくファンシーだ。机の上からベッドの周りまで、大小さまざまないぐるみで溢れていてとてもかわいらしい。

わたしの場所は散らかっている。どうも整理が苦手なのだ。でも趣味らしい趣味を持たないわたしは、そもそもものが増えないので辛うじて散らかり具合が致命傷に達するのを免れている。

そして、

居るべきもつひとつが、居ないのだ。今、そこにはただ、白くてがらんどうの空気が漂っている。

「……僕」

ここに僕が居たことを示す痕跡は、今はもう、たった一つしかない。

それは、キャンバス。奈緒の場所にはぬいぐるみのほかに、布がかけられたキャンバスがある。それはあの子が少しずつ描き続けていた、そして最近は全然進んでいない、僕の絵だ。奈緒は墓地に行く前、それに布をかけていった。

もう描けないかもしれない、僕の絵。
せめて完成したところを見たかったな、と思う。奈緒、うまかつたのに。

でももう、そんな時間はない。

最後にもう一度だけ全体を見渡して、わたしは部屋を後にした。
緊張を胸に 食堂へ。

天使さまが続々と集まつてくる。歌撫さまもいる。みんないる。奈緒とわたしは緊張の余り、食事が喉を通りない。
これから自分たちがどれだけ無茶なことをしようとしているのか…

…こんな状況でまともに食事できるひとがいたら、そのひとはよほどの偉人か、ただのおばかさんだ。

隅っこで一人、明らかにダークな空気を発散させるわたしたちに對し、他の天使さまの様子は当然ながらいつも通りの明るいお皿。このかけがえない日常風景を、今からわたしたちが破壊してしまうと思うと、胃がきりきり痛んでくる。

でもやらなきゃ。

「…」
というか、もうとつぐに賽は投げられてる。日羽によつて。
わたしはぎゅっと、ポケットの中のお守りを握り締める。
そして、食堂の賑わいも頂点に達する頃。

テレビに、日羽が映つた。

「さて、今日は新しい天使さまの中でも、特に知的な美しさが光る田野日羽さまにお話を伺いたいと思います！」

いつそ場違いなくらい明るいレポーターさんの声に、心臓を驚撃みにされたような氣分になる。

ついに来た。

食堂の一角を占めるばかでっかいテレビの中に映る、誰よりもよく知つてる天使さま。

白くて長い髪、知的な眼差しの、無二の友だち。

「日羽さまはご両親が学者さん、頭脳派の家系にお生まれとのこ

とですが……」

「はい。今日は私のほうから、天使病について話したいと思います」「レポーターさんが固まつた。

急すぎる話題転換。

それとも天使病という単語のせいいか、食堂が、少し静かになつた。

日羽は少し無言で、まるでこちらの様子を確かめるよう、カメ

ラ目線になつた。

「ええつと……？」

困惑した、レポーターさんの声。

「天使病は……」

日羽がそう言つた瞬間、食堂の喧騒が、完全に消えた。
誰も喋らない食堂に、ボリューム最大の日羽の声が響き渡る……。
その手には、喧騒をかき消した最大の原因、
カッターナイフが握られている。

「作られた病よ」

カメラの前にはつきりとかざされ、何の言い訳もきかない程にはつきりと、それは映つた。

カッターナイフが手首に当たられ、ゆっくりと 深く 引かれる。

彼女の手首に刻まれる、三本目の傷。

じわり 血が、黒い血が溢れて手首を伝つ。

レポータの悲鳴。少し遅れて、画面の外からの怒号。

それら全てに勝る大声で、日羽は叫んだ。

「天使病なんて病気はないわ！ 治療と称して黒塵を入れられ、
私たちは 」

そこまでだつた。

画面はノイズに塗り潰され、すぐに放送事故を伝えるそれに切り替わる。

食堂は、おそろしい静寂に包まれたままだつた。

しばらくの間、誰も、何も喋らなかつた。

そこに、一言。

「 やつて、くれたね」

ただ一人、立ち上がる天使さま 歌撫さまの声が、水面に一滴

黒インクを垂らしたように、静かな食堂に染み渡つた。

歌撫さまは蒼白な顔で、凍りついたテレビ画面を、凝視している。

不意にその顔が、わたしたちのほうを向いた。

「きみたち……やつてくれたね」

じつと、おそれしい目付きでわたしたちを睨みつける歌撫さまに

対抗するように、わたしは奈緒と手を握り合って立ち上がった。

「はい。……わたしたちが、やりました」

食堂の全ての視線が、わたしたちに集中する。ものすごい重圧だつた。

「どうなるか、分かつてやつたの」

「……はい」

「とんでもないことを、してくれたね……」

歌撫さまの視線はわたしたちに固定されて剥がれない。

「こんな……、こんなことをされたら」

歌撫さまは、何かに耐えるように、絞り出すように、言葉を紡ぐ。

「田の前で、あんな風に、血を流されたら……！」

震えを抑えるように、自分の肩を抱いて。

「こんな、気持ちになつたらつ……！」

大きな痛みに耐えるように、大声で叫ぶ、

「……動くしか、ないじゃないか！」

まるでその言葉を合図としたみたいに、天使さまたちが、一斉に立ち上がった。

一様に蒼い顔をして、でも残らず覚悟を決めたような眼差しで。

「ぼくはきみたちを、恨むよ」

まるで泣いてるみたいな、歌撫さまの声が胸に刺さる。

「……これから、どうするつもり？」

「ソレから出ます。出て、本当のことと言います」

「分かった」

歌撫さまは踵を返して、食堂から出て行った。他の天使さまたちもそれに続く。

わたしは人知れず、胸をなでおろす。心中はどうあれ、日羽の日

論見、天使さまたちを動かすことには成功したようだ。

日羽の言葉通り。

歌撫さまは、あと一押し、きつかけさえあれば行動を起こすだろうと、彼女は言った。前に歌撫さまに本当のことを言ったときの様子から、そう判断したらしい。日羽、弱々しい声色と態度は、迷いの表れ。

日羽の目は、確かに。

日羽は確かに、彼女にできる行動を起し、そしてやり遂げたのだ。

彼女はもう、傍観者なんかじやない。

そして次は、わたしたちの番だ。

「行こう、奈緒」

「うん」

頷きあつて、食堂を出る。

そのまま外に出ようとしたわたしたちは、ところが、棟の出口辺りで足止めを食つことになった。

天使さまたちと、制服を着た警備員の男のひとが揉み合つてる。
(……そんな、もう来たの？)

日羽の行動を知った病院側が、わたしたちの動きを警戒するだろうとは考えていた。だけどこんなに動きが速いのは、想定外だ。

取り押さえようとする警備員の怒声と、抵抗する天使さまの悲鳴が混じつて騒然となつた、病棟の出入口。

警備員の数は一人。でも、これからもっと増えるだろう。取り押さえられそうになつてるのは、集団の先頭に居た、歌撫さまだ。

「放せつ！ 放せつたらつ！」

必死で抵抗しているけど、女の子の腕力じや大の男の手を振り解けない。

潰される。

せつかく天使さまたちを動かすことができたのに、その流れが、せき止められる。

だけど、そんなのは、とっくに予想済みだ。

「奈緒……」

「……うん」

わたしたちはポケットの中のお守りをぎゅっと握り締めたまま、混乱する天使さまたちを焼き分け、警備員の矢面に立つた。わたしは大声を張り上げる。

「こっちを見て！」

警備員だけじゃなく、天使さまたちまでわたしを見る。視線が集中する。

その真っ只中でわたしは、持っていたお守りを、^ハ使用^ハする。

日羽のことを持つ、

彼女はこのために、三度も手首を切つて、痛い思いをした。三度もだ。

日羽だけに、そんな痛い思いは、させない。

お守り、すなわちカツターナイフを、わたしは手首に当てる。見せ付けるように、はつきりとかざし。

決意と覚悟と力を込めて。

日羽が教えてくれた、わたしたちの、わたしたちだけの武器を、わたしは、体の中から取り出した。

「この血はっ、黒塵から出来ているんだ！」

切り裂く激痛、手首を中心に脈動する、鋭い寒気。脂汗が吹き出る。視界が少し狭まる。でもそんなの、大したことじやない。

溢れる黒血で手首を濡らし、わたしはそれを、歌撫さまを押さえる敵、警備員に向けて突きつけた。

「これがつけば、あなたも病気になるー！」

呆気に取られてわたしの自傷を見ていた警備員は、その言葉を聞くなり顔面を蒼白にして飛びのいた。解放された歌撫さまは、機を

逃さずその場を離れる。

「ほりつ！」

そのまま詰め寄ると、小さく悲鳴を上げてその場から逃げて行った。思つてた通り、いやそれ以上の、黒塵がもたらす病氣への恐怖が、その顔には貼り付いていた。

まるで、化物を見るような顔……。

もう一人の警備員は、同じく泣きながら腕を切った奈緒が追い払つていた。

「……沙凪くん、奈緒くん」

歌撫さまが、乱れた天使服の裾を直しながら呟いた。視線はわたしたちの腕に向けられている。

今でもまだ蒼い顔で、歌撫さまは少しの間、じつとしていた。

と思うと、わたしの手からカッターナイフをひつたくる。

「きみたちにばっかり、いいところ持つてかれるわけにはいかない」止める間もなく刃を出して、

「ぼぐだつて……！」

歌撫さまは、腕を切つた。

「うつ……！」

顔をしかめる。

「痛いな、もう……！」

見る見る黒く染まる腕を押されて、歌撫さまは悪態をつく。そして、涙目になつていた。

「点滴の比じゃないぞつ……」

当たり前ですよ……。

見ると、何人かの天使さまは、わたしや奈緒のカッターナイフを受け取つて自分の体を傷つけ、血を流していた。

「……行くぞつ！……」

歌撫さまの号令一下、天使さまは外へ向けてあふれ出そつとした

が。

「待ちなさい」

背後からの声。わたしたちが一斉に振り向いた。

「浅川、せんせ」

廊下を、わたしたちに向けて駆けてくる、わたしたちの教師、浅川せんせ。

せんせはわたしたちから少し離れたところで、立ち止まつた。歌撫さまがせんせに近づいてここまで出てきた。

「何しに来たの？ 先生」

棘のある声だった。

「もし、邪魔しに来たって言つたな……」

「場合によつてはね」

せんせは感情の掠れた声で、そつまつた。

と思えば、わたしや奈緒、歌撫さまの腕を見て、哀しそうに顔を歪める。

「全く……馬鹿なことを……」

このひとは味方だと、わたしは直感的に思つた。だけど本当にそうかどうかは、分からぬ。歌撫さまは警戒を解いていない。

「一つだけ、確認させて」

せんせはわたしたちの傷から、皿を逸らさない。

「……日野がテレビで言つていたこと。本当、なのね？」

よく見ると、せんせの体はちくちく震えていた。顔色も悪い。

「本当です」

わたしは、はつきりと答えた。

「証拠もあります。わたしたちの血に植物を浸せば……」

せんせはじつと、わたしの皿を見た。

「……分かつた」

「せんせ……」

「あなたたちは単なる想い込みでこんなことをじつるわけじゃない。そつね？」

「そうです」

わたしはしつかりと頷いた。

「分かつた……、私もあなたたちと、一緒に行く」

「先生は、天使病の本当のことは知らなかつたんだね」

「知らなかつたわ……今更こんなことを言つても何もならないけど。

知つてたら、止めてた」

せんせの顔が苦しげにゆがむ。

「……こんな……馬鹿なこと」

やつぱりせんせは、わたしたちの味方だ。

「あなたたち、これからどうするつもりなの？」

「外に出ます。出て、天使病の真実を世の中に知らせます」

「そう……分かつた。私がヘリで連れていくわ」

願つてもない申し出だった。

せんせの協力によつて、目の前に明るい道が開けたような気がし

た。逃げると言つても、実際のところ、山の中を走つて行くのでは

あまり現実味がなかつたし。

「ねえ、行くなら早く。もたもたしてるとどんどん人が集まつてくる」

「は、はい」

歌撫さまの焦つた声に急かされ、わたしたちは今度こそ、外へと溢れ出した。

目指すはヘリの発着場。警備員が現れては行く手を遮るけど、わたしたちは血塗れの腕をかざして、彼らを押しのける。

怒涛のように。

わたしたちは、白い波になつた。まっさらな体に、黒い毒を塗りつけて。怒りと哀しみを原動力に。全ての間違いを飲み込んで、粉々に砕こうと。

わたしたちは、走つた。

ある分岐路に差し掛かったとき、やめうに歌撫さまが進路を変えた。

「歌撫さまー？ へりはそつちじゅ」「やめう？」

「分かってるよー！」

怒鳴り返されて、わたしは怯んだ。

歌撫さまが行こうとした先にあるものは……。

「年少病棟……？」

「そうだよ。きみらの考えなしの行動のせいで、ちいさい子たちがおかしな扱いを受けるかもしれないんだ」

わたしは大きな衝撃を受けた。歌撫さまの言つ通りだった。

「だからぼくは、あの子たちのところに行く

「わ、わたしも」「わ、わたしも

「ばかっ！」

反射的に歌撫さまについで行こうとしたわたしは、一喝されて子どもみたいに首を竦めた。

「きみらが行かなくて、誰が行くんだ」

歌撫さまは真っ直ぐにわたしを、奈緒を、睨みつけている。

「言ひだしつべなんだから、しつかり責任取つてよ」

歌撫さまは真っ青な顔で、でも乾いてきた血を補充するために、また腕を切った。

「痛い……！ この痛み、無駄にしたら、許さないからなー…警備員がまた、迫つてくる。一体どこからこんなに湧いてくるのかと思つほどの数だ。

「ほら、早く行って！」

追い払つよう、元気よく大きく腕を振る歌撫さま。

「沙凪ちゃん……」

奈緒に袖を引かれる。

彼女こそ、年少病棟にいる子どもたちのことが心配なはずだった。なのに先に行こうとわたしを引っ張っている。

奈緒には、自分のやるべきことがちゃんと分かつてゐる。
わたしは……。

「……行こう」

まだ少し後ろ髪引かれる思いがしつつも、わたしは歌撫さまと、歌撫さまに続いた天使さまたちに背を向けて走り出した。

と、数歩も行かない内に、その歩みは止められた。

「放せ……っ！」

歌撫さまの苦しげな声が聞こえてきたからだ。

思わず振り返ると、年少病棟のほうに向かった天使さまたちが、警備員に取り押さえられているのが見えた。

「なんで……」

今までの警備員全員、血を突きつけられれば怯んで道を開けたのに、どうして急に？

（あ……）

警備員たちの向こうに、白衣を着た大人が見えた。警備員たちの指揮を取っている。何か叫んでいた。

遠くて全部は聞き取れない……だけど、断片から、何を言つているのか分かった。

曰く、患者の体には、治療のための抑制剤が点滴されている。多少患者の血液に触れたくらいでは、黒雨のような病は発症しない。

い。

それはわたしたちの武器を無効にする、最悪の情報だった。その言葉に力を得て、警備員たちは次々と天使さまたちを取り押さえしていく。

「そんなん……」

腕を取られ、地面に組み伏せられる天使さまたち。苦しそうな、悔しそうな顔がいくつも地面に押し付けられる。交錯する悲鳴と怒号。

絶望的な空気が流れる。

だけど、そのとき　。　。
歌撫さまの様子が、変化した。

「うつ……」

それはもしかしたら、取り押さえられ叩き伏せられるよりも、も
つとずっと深い絶望かも知れず。

「うつ、うつ」

だけど確かに、どこにも行けなくなりかけた、この状況を打破す
るもの。

「う、あ、ああ……つ！」

急速に歌撫さまのシルエットが肥大する。
誰もが口を噤む。

一瞬のうちに静寂が満ちたその場、
ちきりきと、ちきりきと、枯木が折れような不吉な音色が、虚ろ
に響く。

歌撫さまの肩から生える翼の色は、絶望色、すなわち黒。

「ああああ……ツー！」

絶叫と共に、

「ひつ……！」

歌撫さまの翼から大量に、真っ黒い液体が飛び散り、

「ひああああ……ツー！」

歌撫さまを取り押えていた警備員がそれを頭からかぶり、パー
ックを起こして飛びのいた。

儚と、同じ症状。

天使病の、末期段階　黒変。

「はつ、はつ、はつ……」

浅く速く、繰り返される呼吸はちいさいはずなのに、わたしの鼓
膜を強烈に打ち据える。

ゆつくつと 歌撫さまは、黒い翼を背負つたまま、立ち上がる。

た。

天使さまたちは歌撫さまに寄り添い、今にも折れそうな体を支える。

敵は慄き、遠巻きに退いた。

「はつ、はつ、ハ」

今や全身血塗れの、真つ黒な天使さまになつた歌撫さまは、聞いたこともないほど悲痛な声で、絶叫した。

「近付くな……！」

早く、行けつ……！」

「はつ、はいつ！」

それが届いたかどうかは、分からぬ。

反射的に返事をしたわたしは、奈緒の手を引いて、歌撫さまの声に、姿に、背中を押されるように駆け出した。

歌撫さま。歌撫さま。歌撫さま。

ごめんなさい。こんなことに巻き込んでしまってごめんなさい。わたしたち、やります。きっとやり遂げてみせます。

だから、どうか、

どうか死なないでください。

ヘリの発着場まで辿り着いたのは結局のところ、わたしと奈緒と浅川せんせの三人だけだった。ほとんどが歌撫さまと一緒に年少病棟に行つてしまつたし、少しだけわたしたちについてくれた天使さまも、みんな取り押さえられてしまった。

逃がしてくれた天使さまたちが、どうなるか。歌撫さまの容態や、日羽がどうなつたかも心配だ。

だけど、それは今のわたしこそはじつもできないこと。できるのは、わたしたちが置かれた状況を正しく伝え、天使病なんていつ馬鹿げた病気に罹るひとを、もう一度と生み出さないように

にすることだけだ。

「言つなれば、わたしたちの希望を乗せて、ぐりは飛び立つた。

「……話はついたわ」
しばらくの間、外と連絡を取つていて浅川せんせがそう言った。
外とはすなわち、民放局だ。邪魔が入らず、大勢の目に触れ、かつ即時性のある情報伝達手段として、せんせが民間のテレビ局を提案してくれたのだ。

せんせの言葉に、わたしたち一人はしつかりと、頷く。

「私に出来ることは、もうお終い」

「いえ、十分過ぎるくらいです……ありがとうございました、本当に」

奈緒と一緒に、お礼を言ひ。

偽らざる気持ちだった。

わたしは、もしかしたら浅川せんせが敵かもしれないと思い、このことを話しに行かずに行動を起こしたこと後悔していた。

天使病患者の教師役を買って出てくれたのは、浅川せんせだった。患者が天使さまとして外に出れるよう病院側に無理を押し通したのも、せんせだった。

いつでも浅川せんせは、わたしたちの味方だったのに。

最後に信じ切れなかつた、自分が嫌だ。

「ごめんなさい、せんせ」

「何を謝つてるの？」

「色々です。……疑つちゃつたこととか」

浅川せんせが笑つたのが、気配で分かつた。

「いいのよ

「でも」

「むしろ私は、あなたたちが自力でここまでのことをしてかしたことには、尊敬の念すら抱いているのよ」

せんせに尊敬されるほどのことなんて、何もしてない。

「それに、気が付かなかつた、私にも罪はある」

「せんせは悪くないです！」

少しの間、せんせは黙つた。

「……今からあなたたちがやひつとしていることは、あなたたちにしか出来ないこと」

わたしの言葉に答へず、せんせは続けた。

「こんな状況に対応する術は、教えられなかつたけど」

悔しそうな声だった。

「……あなたたちは、間違つてない。胸を張つて、告発しなさい」

かされる、その声に、

「はい」

わたしたちは、はつきりと返事をした。

真っ赤に染まる夕空の下を、ヘリコプターは飛ぶ。

今度こそ、邪魔の入らない状況で、みんなに天使病の真実を伝え
るために。

わたしと奈緒は一人で、テレビカメラの前に座った。
大きなカメラ。今からこれに向けて、話さないといけない。
天使さまとして何度もテレビに映り、インタビューも受けしてきた
けど、今からしようとしてることはわけが違う。
生中継で、わたしたちは告発する。

日羽がきつかけを作ってくれて、

歌撫さまや他の天使さま、みんなが立ち上がっててくれて、
浅川せんせに連れてきてもらつて……。

みんなが身を挺してくれたお陰で、わたしたちは今ここに立て
いる。

テレビ局側の対応もすいぶんと速かつた。今まで天使さまに關し
ては、国営放送《NHK》の独占状態だつたせいかもしない。内
容が内スキヤンダル容だし……。

わたしたちの田の前で、着々と、田まぐるしく、準備は整つてい
く。

不安だ。

うまく言えるのかどうか。

みんながしてくれたことを、ちゃんと活かせるのか。
どうしようもなく背中が震える。緊張で喉が強張る。

羽根が重くて潰れそう。
はあ……、と、たまらず特大のため息をこぼしたわたしの手が、
そつと握られた。

「……奈緒」

奈緒の顔は真っ青だった。きっとわたしと、同じ気持ち。

「沙凪ちゃん」

ちいさくて形のいい唇が、わたしの名を呼ぶ。

わたしは、奈緒の手を握り返した。

確かに不安で、緊張しすぎてお腹痛いけど、
でもわたしは今、ひとりじゃない。

たいせつな友だちが隣にいて、手を握ってくれてる。
初めからずっと、共に居た友だち……。

奈緒がここに居てくれて、良かつた。

大丈夫。わたしは頑張れる。

そして準備は整つた。

撮影開始の合図が、今 下された。

*

「こんなにちは、みなさん……」

まず、心を落ち着けるために、わたしは何でもない挨拶を口にした。

「今日は、みなさんに、わたしたちの……天使さまのことと、話したいと、思います」

カメラから目を外して、奈緒を見た。奈緒もわたしのほうを見た。カメラがなんだか、おそろしかった。

「今日の昼間、わたしの友だち……日羽が、テレビに出ていたのを見ててくれたひとも、いると思います」

スタジオはだだつ広く、今は放送内容ゆえに余分なものが何もなく、だから余計に孤独感が煽られる。

「……日羽の言つたことは、本當です」

わたしは奈緒の身体を、ほとんど抱くように寄せながら、言つた。

「天使病は、作られた病氣。天使病なんていう病氣は、本当はないんです」

血に塗れた、自分の左手をカメラの前にかざす。

奈緒も同じように、血に塗れた腕を見せた。

「わたしたちの血は、赤いというより……黒いです。黒雨と、同じ

です。黒塵がわたしたちのからだの中に入つて……そのせいで、わたしたちの血は、黒く染まつたんです」

喋りながら、わたしの中に、色々な想いが湧いては消えていく。

初めは、天使病に罹つたなんて、ただの災難だとしか思つてなかつた。病氣で、入院で、しかも面会謝絶だつたから。でも、ここのみんなに出会えて、天使さまに対するわたしの気持ちは、すこしづつ変わつていつた。

着実に進行していく症状、刻々と流れる時間が怖かつた。
セメタリ墓地の大きさに、圧倒されたこともあつた。

でも、みんながいたから、やつてゆけた。

そして、みんなで羽根が生える痛みに耐えて。わたしたちは一緒に、天使さまになつた。

そう、やつと、なれたのに。

みんなで、ずっと幸せなまま、天使さまをやりたかつたのに。

そんなことさえ、叶えられずに。

わたしたちは、大切なともだちと、離ればなれになつてしまつたんだ。

もう、儂には、会えない。

胸元から、ひう、とちいさくしゃくりあげる声が聞こえた。

奈緒が、泣いていた。

それを見たわたしも、鼻の奥がつんとなつて、喉の奥から詰まるような痛みがこみ上げてきた。

視界がぼやける。

奈緒のからだを、ぎゅっと抱きしめた。

「儂は……真っ黒になつて……わたしたちの病室から、運ばれて行つて……。

それで、戻つて……来なかつた……です」

涙が、どんどん溢れる。うまく喋れなくなつてくる。

「……返せとか、治せなんて言いません。そんなこと言つても誰も、何も戻つて来ないし……でも」

わたしは頑張つて涙を止めて、きつとカメラを睨み吸えて。

今、一番言わなければならぬことを、一生懸命に喋つた。

「でも、これからのことに対するでは、何も言わないなんて、できません。だから、はつきりと言います。

もう一度と、新しい天使さまは、生まれないで欲しい。もうわたしたちと同じ、ありもしない病氣にされて死んでしまうような子は、生まれないで欲しいんです。

わたしたちの身体をこんな風にした人たちを、わたしたちは、許しません。その人たちのしたことの証拠が、ここにあります」

わたしは、血塗れの腕を突きつける。

左手を、胸に当てて、はつきりと示す。

「わたしたちの身体が 証拠です」

言えた。

ちゃんと言えた、と思つ。

わたしはわたしにできる」とやれた。

これで、いいよね? 傳……日羽……歌撫さま。

わたしちゃんと、できたよね?

「ね、奈緒……これでいいよね」

わたしは奈緒にだけ聞こえる小声で、そう確認した。

奈緒は泣き腫らして、うなぎみたいに真っ赤になつた目でわたしを見ていた。

その瞳は、だけど、何かを訴えるみたいに揺れていった。

「沙凪ちゃん……」

ちいさく、わたしを呼ぶ。何か、言い忘れたことあったのかな……。

あ、そつか……。

「待つてください」

わたしは撮影を止めよつとしたスタッフのひとを制止した。

「まだ、言つこと、あります」

スタッフのひとは頷き、わたしの発言を促した。

そう、まだだいじなことを言つてなかつた。

わたしたちは確かに、望まずに病氣にさせられた。それは許せない。

だけど……。

「わたしたち、天使さまのお仕事は、大好きです」

袖を掴む奈緒の腕に、ぎゅっと力がこもる。奈緒は少しだけ微笑んで、わたしを見ていた。

それは、わたしの、偽らざる気持ちだった。

初めはぴんと来なかつた。

ただ流されるままに天使さまになることにした。

だけど、みんなと一緒に天使さまをやつていてる内に、わたしの気持ちは変わつた。少しづつ、少しづつ変わつていつた。

今ならわかる。

断言できる。

わたし、天使さまが好きだ。

「暗かつた表情が、笑顔になるとき。みんなのよろこぶ顔が、わたしは好きです。天使さまになれて、初めて知ったこの喜びを、わたしは手放したくない。この手でできることを、大切にしたい。たとえどんな結果になつても、わたしは、白くてやさしい、天使さまのまでいたいです」

奈緒と二人、頷き合つ。

許せないことがあつて、わたしたちはそれを壊そつとした。

だけど、何もかもを壊したいわけじゃない。

守りたいものもある。

みんなを強引に巻き込んでおいて、それはちょっとわがままかも

しないけど。

それでもわたしは、やっぱり、天使さまでいたい。

終　夕空の下の、天使さま。

結論から言うと、わたしたちの行動は、しっかりと実を結んだ。日羽がきっかけとなって天使たちが立ち上がり、わたしが奈緒と一緒にテレビで告発した一連の事件によって、天使病の真実は余すところなく、世間の知るところとなつた。正確に言うとわたしの告発の後にも色々（警察の不祥事発覚とか政権交代劇とか）あつたんだけれど、その中心にいたのは天使さまではなく、政府の息がかかつてない医者たちとか、人権団体のひととか、世論とか、警察だとか、そういう人たち。まあ少しからだを調べられたりはしたけど……その詳細にはわたしはあまり、興味がない。このことについて重要なのは、ひとつだけで。

つまり、わたしたちの願いは、叶えられたので。
もう、白い天使さまは、生まれないので。

単身捨身の自傷行為で突破口を開き、テレビ局で囚われの身となつた日羽は、何だかんだで無事だつた。その場で取り押さえられたものの、直後にわたしたちが起こした事件のせいでの警備員に一時待機の命令が飛び、更にわたしの告発を契機に、捕えておくのは無駄だと説得、自力で解放させたらしい。

このひとは別にわたしなんかが何もしなくて、勝手に何とかしてたんじやなかろうか。

「沙凪、かつこよかつたわよ」

その本人は今、目の前でにやにや、わたしを見ている。

「天使さまのお仕事、大好きです　なんて、私胸を打たれたわ
わざわざ身振りまでつけ、告発したときのわたしの真似をしてく

れるこのサテイスト女を何とかしてほしい。

あああああ恥ずかしい……あのときはへんなテンションになつちやつて心の赴くまま喋つてたから、いつもは絶対言わないようなことを言ひちゃつてたのだ。一体これからどれほど、あのことをネタにいじられるのやら……。

でも、不安ではありつつも、日羽が無事だったのは素直に嬉しい。

事後、わたしたちは入院生活を続けることになった。場所は元と同じところだけど、普通の病院みたいに部外者のお見舞いがオーケーになつた。……と言つても山奥だし、更に元々身寄りのないひとが天使さまに選ばれてたという事情もあり、お見舞い客はほとんど訪れない。外部への連絡も可になつたから久々に美加子と話をしたけど、すぐにお見舞いに来る、ということには流石にならなかつた。食事は、残念なことに、普通になつてしまつた。理由は単純で、予算のせいだそうな。今まで滝のようにお金下ろしてた今回の黒幕、政府がひつくり返つてしまつたので普通の待遇になるということ。無駄にお金のかかつてた部分は、それなりにコストパフォーマンスを重視したかたちになつていくといふことだ。

ちなみに、敷地内の楽園のような庭園は、維持されるそうな。天使さまを使った人体実験の副産物として、植物にも効く黒塵効果抑制剤が完成してたらしい。この技術は広く公開され、今後街には少しづつ緑が戻つていいくでしょう、という話をわたしはニュースで聞いた。

そう、植物用のがあるということは、当然人間用の抑制剤もあるのだ。だからそれを使って、今度はわたしたちの、本当の治療が行われる。

もしかして髪の色とか、肩の羽根とか、元に戻るのかなと思ったけど、そうはならなかつた。残念なような気もするし、このままでいいような気もする、複雑な気分。

でも薬を打つていい限り、症状が悪化することはないでしょう、
と言われた。

天使病が死病なのは、もう過去の話になつたのだ。

それで。

「お爺ちゃん、元気にしてますか？」

「おおー元氣だあ。天使さまが来てくれたんだからー十年は寿命が
延びた氣がするぞう」

そう言つてわたしのお尻に手を伸ばすお爺さん。別に寿命延びな
くても元氣じやないですか、むしろ延びた寿命をわたしが削つてや
らうか……いやだめだつ、他の天使さまが見てる。天使さまは慈愛
の精神、南無……じやなくて。

「沙凪ちゃん、笑顔、笑顔」

奈緒に小声で背中をつづかれた。いや、笑顔のつもりなんだけど。
「あおすじ」

田羽がぼそつと一言。気付けばえろ爺さん、引いてしまつてます。
「これはいけない。

「お爺ちゃん、はい、あーん」

むいていた林檎を差し出す。満面の笑顔、これで完璧！

「沙凪ちゃんそれナイフ！」

「え？」

「ナイフとフォーク間違えてるからー。」

「お、おお」これはうつかりさん。

「おおじゃなくつて！」

奈緒に林檎」とナイフを取り上げられた。

「わ、わはは、わっははは、お嬢ちゃんお茶田だなあー」「
笑つてないで爺は少しくらい反省してください。

というわけで。

わたしたちは変わらず、社会貢献している。結局、わたしたちの生活で変わったところなんて、ほとんど何もなかつたのだ。天使さまはまだ、天使さまである。テレビにも出る。むしろ人気は前より、盛り上がつたかもしけない。

でもたぶん、それは一時的なことで。

人気なんか関係ない。わたしは今、自分の意志でこうしている。恥ずかしいからもう言わないけど、天使さまが好きでいる。

それがたぶん一番だいじなことで、それだけでいいんだと、そう思う。

*

「あのときの沙凪ちゃんは、ちょっと怖かつたよ……」

最近どんどん口数が増え、しつかりしていつてる奈緒に、わたしは怒られっぱなし。

「ナイフ突きつけるなんて……」

「そのうつかり加減がまた、沙凪の魅力なのよ」

日羽がしたり顔で説明する。天然はかわいいって言いたいのか。

「あら、不満？」

心底不思議そうな顔。どう見ても作つてゐるけど。

「こ、これからはもう少ししつかりしますよ」

くちびるを尖らせて反論するけど、どうしても弱いわたし。

一時はどうなることかと思つたけど、病室でまた、こんな風に他愛無いやりとりができるて本当によかつたと思う。食事グレードダウンは不満だけど、最初に予想してた内容に比べれば、基本的には文句のない結果だ。

「テレビでお話したときは、すいかつたのに……」

奈緒がナチュラルにわたしの急所を突き刺した。この子こそ天然。

「そうそう」サディスト女、日野日羽が喜悦に歪んだ表情で相槌を

打つ。このひと本当にこの話が好きだな。「白くてやせっこ、天使さまでいたいのよね」

そう一字一句覚えてるんだよ」のひとー、陰湿だつ。

「天使さまは、慈愛のこころ……」

奈緒がぽけっと呟く。わたしはさうて恥ずかしくなる。
かくなる上は。

「ね、ねえ、助けてよ、、」

「
「僕」

「私も沙凪は、格好いいと思うわよ？」

ふんわり花咲くように、お人形さんみたいにきれいな天使さまが、ベッドの上で微笑んでいる。

「いやあ、ぼくもあればすぐ良かつたと思うよ。切々と、涙ながらにぼくらの悲境を訴える……ひとりの立派な天使さま！」

少年みたいな口調の、だけど誰より女の子らしい容姿の天使さまが、その隣で大げさに頷いている。

「いやそれフォローになつてませんからー！」

突つ込みつつも、こうしてまた和やかにお話ができるのと、わたくしはろくに信じてもいない神さまに感謝したい気持ちだった。まあいいよね。一応「天使」だし。

そう、僕も、歌撫さまも、ちゃんと生きてる。末期発作で黒くなつた羽根は、外科手術で取り除かれ、きれいになくなつていい。症状に関しても、ちゃんとしたお薬を打ち始めているせいが、とても安定している。

一人の手首には、黒いバンド。まだ安静にしてなきゃならないけど、わたしたちと同じ白いバンドに戻る日は、そう遠くないという話だ。

あの日、発作を起こした僕は、末期患者のための緩和ケア病棟に運ばれていった。そこは当時立入禁止だったから会いに行くことも

できず、結局再会できたのは、わたしたちが起した事件の後だ。

歌撫さまも、同じく元気。

また、みんなで、天使さまができる。

これ以上は望むべくもない、すてきな結果だと思つ。

「ところで、あそこがあれって、奈緒の描いた絵かしり?」

「ふと、僕がそんなことを言つた。

「あっ、うん」

慌てて奈緒が、病室の隅に立てかけておいた絵を取りに行く。

「やつと完成したから、見てもらおうと思つて……」

布に包まれたそれを両手で抱えて、奈緒はぱたぱたと戻ってきた。そして僕のかたわらに座り直すと、ゆっくりと、包みを解いていく。

「わあ……」

ちいさく歎声をあげたのは、誰だつたか。

だいじに額に入れられた、水彩画。

淡い色彩のやさしい絵。

本物の純白の翼を生やした天使さまが、ゆるく目を閉じ、夕空の下で微笑んでいる。

輝く天使の輪を戴いた、白い髪の、僕の絵だ。

「素敵な絵……」感極まつたように、僕が呟く。

「ほう、うまいね」歌撫さまが感心する。

「本当、才能あるわよこれ」日羽も掛け値なしに褒める。

「えへへ……」奈緒は顔を真つ赤にして照れている。

わたしたちが立ち上がった日を境に、もう一度と描かれないかもしなかつた僕の絵が、いま僕自身の手の中に収まっている。

それはもしかしたら、実現しなかつたかもしれないこと。完成しなかつたはずの絵が、ここにある。

これもわたしたちの行動の、ひとつ目の結果なんだ。

「ね、奈緒。この絵の題つて、もうつけたの?」

「あ、ううん。まだだよ
「そつか」

わたしたちは、最後の白い天使さま。

だから、黄昏どきに、幸せそうな表情で微笑む真っ白な天使さま
……今のわたしたちに、これほど相應しい絵もないと思つ。

「じゃあさ、こんなのはどうかな」

みんなが、わたしを見てる。ちょっと緊張したけど、わたしは思
い切つて、その言葉を告げた。

白い天使さまの最後を飾る、そのきれいでやせしく、そして少し
だけ切ない、絵の名前は。

『夕空の下の、天使さま』。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0796d/>

夕空の下の、天使さま。

2010年10月8日13時57分発行